

God is our shelter and strength,  
always ready to help in times of trouble.

神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。  
苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。  
詩編46編2節

# 教会学校教案誌

2010.7.8.9月号

No.38

日本キリスト改革派教会  
中部中会日曜学校委員会

# 2010年7～9月カリキュラム（第38号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
7月4日	アブラハムの召命	創世記12:1-9	創世記12:4a
	神の選びと召しに従ったアブラハム。神に召されて歩む幸いを知ろう		
7月11日	アブラハムへの約束	創世記15:1-21	ヨハネ3:16
	神の約束に信頼して生きたアブラハム。約束に基づいて生きる生き方を知ろう		
7月18日	ソドムの滅亡	創世記19:1-29	ローマ3:23-24
	神の裁きを知り、主をおそれることへと招く。振り返ることなく神に従おう		
7月25日	イサクの誕生	創世記21:1-8	ローマ9:8
	神の約束と憐れみの中でイサク（笑い）が与えられた。神の祝福を知ろう		
8月1日	イサクを献げる	創世記22:1-19	ヘブライ12:5,6
	アブラハムの信仰の姿を学び、備えておられる神の恵みを知ろう		
8月8日	ヤコブとエサウ	創世記27:1-40	ヘブライ12:14
	人の企みを超えて神がみわざを成し遂げておられる。神をほめたたえよう		
8月15日 平和主日	平和の主	ローマ1:7	ローマ15:33
	平和の源である神。主イエス・キリストからの恵みと平和を祈り求めよう		
8月22日	売られたヨセフ	創世記37:1-36	コリント二1:20
	ヨセフ物語をとおして、神の歴史支配を確信する信仰、摂理の信仰に立とう		
8月29日	総理大臣になったヨセフ	創世記41:1-44	創世記39:2
	苦難の中でも主が共にいてくださる。主が共にいてくださる幸いを知ろう		
9月5日	摂理の主の勝利	創世記50:15-21	創世記50:20
	人の悪を善へと造りかえる主のみわざを学び、摂理の主を信じる信仰を養おう		
9月12日	モーセの誕生	出エジプト1:22-2:10	ローマ8:28
	主なる神の不思議な導きをとおして、歴史を支配しておられる主を仰ごう		
9月19日 (20敬老の日)	モーセの召命	出エジプト3:1-22	マラキ3:6a
	契約に真実である神が救いの土台である。わたしたちも真実に神に応えよう		
9月26日	十の災いと過ぎ越し	出エジプト7:8-24	出エジプト7:5
	十の災いのみわざをとおして、ご自身の民を贖い出す神をおそれ、あがめよう		

も く じ

2010年7・8・9月カリキュラム

まえがき…………… 吉田 隆…………… 4

巻頭説教…………… 金 起泰…………… 5

特別寄稿

聖書は歴史をどう語るか(第1回)…………… 牧野信成…………… 10

特集「信仰の継承」(第1回)

信仰の継承について…………… 梶浦和由…………… 13

証し—信仰の継承…………… 草野勝男…………… 15

家庭における信仰教育…………… 町野正三…………… 17

副読本のご案内…………… 18

聖書研究・説教展開例・分級展開例…………… 19

7月4日…………… 20

7月11日…………… 27

7月18日…………… 34

7月25日…………… 41

8月1日…………… 48

8月8日…………… 55

8月15日…………… 62

8月22日…………… 69

8月29日…………… 76

9月5日…………… 83

9月12日…………… 90

9月19日…………… 97

9月26日…………… 104

2010年10・11・12月カリキュラム…………… 111

2010年度年間カリキュラム…………… 124

自由募金のお願い…………… 114

教案誌会計報告…………… 115

執筆者よりひとこと・あとがき…………… 116

# まえがき

吉田 隆（仙台教会牧師）

私は、いわゆる“右脳型”の人間のようなです。脳の働きを文系と理系で分ける人もいますが、私の場合にはあてはまりません。計算（とりわけ暗算）は未だにソロバンをやっている小学生にかないませんが、図形の証明などは好きです。国語も英語も大の苦手でしたが、お話は大好きでした。とりわけ、無味乾燥なアルファベットの羅列に過ぎない英語の単語や文章にはどうしても馴染めませんでした。

大変だったのは受験勉強です。嫌いな科目の勉強を強えられるほど苦痛なものはありません。いわゆる“シケ単”（『試験に出る英単語』の略）を必死でやってはみたものの、全然頭に入りません。英単語が刷り込んであるトイレトペーパーで“ふんばれ！”とか、単語帳を“食べて覚えろ！”という強引な勉強法も試す気がしませんでした（そもそも効果があるのか）。

とにかく楽しく覚えやすい方法はないものかと、ひたすら自分にあったものを探しているうちに出会ったのが“連想記憶術”という本です。「アゴに(agon) “苦痛” のアッパーカット！」というダジャレとイラスト満載の英単語集。およそ本来の英語学習法から外れた邪道でしょうが、私には合いました。これで相当数の単語が頭に入り（ダジャレとイラストしか覚えていないものも相当ありましたが）、英語嫌いも徐々に克服できました。

信者の家庭で生れ育った契約の子どもたちに日曜学校の思い出を聞くと、大きく二つの反応に分かれます。「楽しかった」と「苦痛だった」です。「楽しかった」理由のほとんどは、友達と一緒に遊べたこと。逆に「苦痛だった」理由のほとんどは友達と遊べなかったこと、です。

今日の少子高齢化教会で、同じ教会に同年代の“遊び仲間”を見出すことは至難の業です。教会はそのような子どもたちのために、全額を負担してでも他教会と合同のキャンプに参加して友達ができるように配慮すべきでしょう。しかも願わくは一年に一度ではなく、できる限り頻繁に行き来できるような機会を作ることができれば理想的です。

が、それと同時に、何より毎週の日曜学校が子どもたちにとって楽しい場所になってほしい。友達がいるいないに関わらず、聖書を学ぶことやイエス様のお話を聞くことが“楽しい”と肌で感じてほしいのです。あの分厚い文字だらけの聖書を開いて楽しいと感じる子どもは減多にいません。先生のお話だけを聞いて楽しいと感じさせるためには相当の話術が必要です。とりわけ小さな子どもの教育には、どうしても視覚教材が必要だと思うのです。

ビジュアル的にすぐれた教材が米国や韓国の改革派・長老派教会にはあります。何とかあれを使えないものでしょうか。教案や教材は一度作れば何度でも使えるはずです。そういう所に、教会はお金をかけるべきです。マンガもまた然り。すぐれたマンガ教材は、何冊もの解説書にまします。要は伝えること、伝わることです。本誌委員会にリーダーシップを取っていただくか、それとも大会の教育委員会かは別にしても、教材作りに献身してくださる方を心から願っています。

そうして身に付けた知識が果たしてどれほど残るか、それはわかりません。しかし、少なくとも“苦痛”から解放された“楽しい”知識は真にその子どもの魂を育むものとなると、私は信じています。

## 「主の道を整える洗礼者ヨハネ」

—マタイによる福音書3章1～12節による説教—

金起泰（浜松伝道所代理宣教教師）

そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「虻の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

（マタイによる福音書 3章1～12節）

「現代人と教育」は、切っても切れない関係になってしまいました。今日のように人々が高い教育を受ける時代は今までにありませんでした。

しかし私はこの時間、現代人の明晰な頭脳を高めるようなお話しをするつもりは微塵もありません。現代人の高い教育熱に感動するようなお話しも全くしません。昼夜を問わず、勉強している現代人の粘り強い執念に賛辞を送りたいとも私は思わないのです。むしろ高い教育を誇っている現代人の非常識的な点の一つを指摘したいと思っています。そのことはまさに「罪意識」に関することなのです。

今の時代では「罪意識」がどんどん消え去っています。いや罪意識と言うもの自体、なく

なってしまうと言ってもよいのかもわかりません。これほどに学校や塾が多くというのに、おかしいことに今の社会はますます恐怖のつぼへと化しています。まるで高い教育熱と低い罪意識とが反比例しているかのように見えます。罪の欺瞞性とも言えるでしょう。罪は理論的なものでも、学問的なものでもありません。私たちはここで学校教育の限界まで述べる必要もないでしょう。このようなことが現代人の苦痛の種であり、痛みとなっているのです。

罪意識の喪失については、教会にも責任があります。教会にとって、罪意識の問題は決して軽んじてはいけない重大な事柄です。今日、罪意識がこれほどまでになくなっていく現状の中には、まさに、この事態を軽視している教会の

姿があるからなのです。いや説教者の責任と言うべきでしょう。罪意識を持つことの大切さに気づかせるのは、説教者の最も重要な務めの一つです。説教者が罪意識を慎重に取り扱うとき、信徒は自分の罪に気づき始めます。聖なる神様の御前で自分の罪を認め、「兄弟たち、私たちはどうしたらよいのですか」（使徒2:37）という泣き叫ぶ声が出始めます。そして、この罪に対する感覚が「悔い改め」につながっていくのです。人が悔い改め始める時に現れるもっとも大きな変化は、まさに神様を思い始めることにあります。罪意識と真の悔い改めは、神様を正しく思い始める時に起こる業であるのです。

今日の箇所は、「そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え」（1節）という御言葉とともに始まります。この「その頃」とは、明らかな表現ではありませんが、おそらくイエス様の公的なお働き（あるいは、公生涯）の始めと関わりがあるようです。つまりそのころとは、2章の最後の節（23節）と約30年の差があるように見るべきでしょう（ルカ3:23参照）。

洗礼者ヨハネは、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え始めました。マタイは、ルカと違って洗礼者ヨハネの出生と背景を述べることなく（ルカ1:5～25, 39～45, 57～80）、さっそく洗礼者ヨハネを表舞台に導き出しています。おそらくマタイの福音書の受取人であるユダヤ人たちが洗礼者ヨハネをよく知っていたからなのでしょう。ヨハネの働きの舞台は、ユダヤの荒れ野（ヨシュア15:61、士師1:16）でした。そこは、エリコの南側と死海の西側の高原地帯で、オアシスがほとんどない荒涼とした土地でした。

荒れ野は、イスラエルの歴史において重要な意味を持っています。エジプトから脱出した彼らの祖先は、約束の土地カナンに入る前、およそ40年にもわたる長い間、そこで住みました。モーセをはじめ、ダビデとエリヤなどの彼

らの偉大な父たちもやはり荒れ野で時間を送りました。さらにイエス様も荒れ野で時間を送られたのです（4章）。このように荒れ野には、大きな意味があります。一本の木、一株の草そして小さな泉さえ見つけにくい場所、それが荒れ野ですが、神様の民は、その荒れ野で神様に会わせていただけるのです。

今日の信徒の未熟さは、荒れ野での経験を軽視する態度と決して無関係ではありません。信徒はいつの間にか夏には冷房、冬には暖房に慣れてしまいました。教会の指導者の中には、冷暖房の施設と共に広い駐車場を確保しなければ、隣の教会に信徒を奪われてしまうという危機感まで覚える時代となってしまいました。しかし、そんな私たちにも荒れ野での体験が必要です。荒くて潤いのない荒れ野で、神様との出会いをさせていただくことが必要なのです。荒涼とした荒れ野での生活を軽視している限り、信徒の成熟は期待できません。なぜかと言いますと、私たちの人生は、神様との出会いのために、荒れ野での経験が必要だからなのです。

洗礼者ヨハネは、ユダヤの荒れ野で「悔い改めよ。天の国は近づいた」（2節）と宣べ伝えました。彼のメッセージは簡潔ですが、衝撃的でした。彼のメッセージは、厳しいものでした。ファリサイ派の人々やサドカイ派の人々のような宗教指導者のメッセージとは、全く異なっていました。洗礼者ヨハネのメッセージは、新鮮な衝撃でもありました。彼の最初のメッセージは、まさに「悔い改めよ」ということです。悔い改めは、罪のどがめと共に罪意識を持たせることです。悔い改めは人間の不信仰と神様への背きを鋭く指摘します。悔い改めは人間の墮落した内面世界を一つ残らず暴き出すものです。

悔い改めの目的は唯一つだけです。私たちを再び神様の御前に立たせることです。人間を裁くために、罪をとがめるものではありません。罪意識を持たせる理由は、さばきではなく、救いに導くことにあるのです。真の宗教は、救いの

宗教でなければなりません。神様の恐ろしいさばきに代わって救いを与えるのが、真の宗教が語るメッセージです。悔い改めよと叫ぶ洗礼者ヨハネのメッセージもやはり裁くためではなく、救うためであったのです。

洗礼者ヨハネは悔い改めよと叫んだ後、「天の国は近づいた」と語りました。この天国の到来のメッセージは、それまでに語られてきた預言が完全に成就する日が迫ってきたということを意味しています。神様のお約束通りメシアの到来が近づいてきました（ミカ4:7、ゼカリヤ14:9）。メシアの到来の日がもうすぐだと語った洗礼者ヨハネであったのです。それは、本当に驚くべきメッセージでした。

ここには、一つの大変なメッセージが語られています。それこそ、天の御国が到来する起源についてのことなのです。洗礼者ヨハネは天国の起源は、この地ではなく、天であると語りました。天国はこの世で復興された国なのではなく、天から降りてくる国であります。人間の力と努力によって作り上げる国ではなく、絶対的な神様の力によって造られた国が天国なのです。こうした天国が今洗礼者ヨハネの目に入ってきた、というのです。

著者マタイは、この事実が確かであるということ証しするために、旧約聖書を引用し、「これは預言者イザヤによってこう言われている人である。『荒れ野で叫ぶ者の声がする。「主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ』」（3節）と書き残しています。つまり洗礼者ヨハネの存在意義は、イザヤの預言の成就（イザヤ40:3～5）からも確実に語られていると述べるマタイであるのです。

それは神様の完璧なご計画と摂理です。預言者マラキ以降の400年間、イスラエルには預言者がほとんど存在しませんでした。このときのイスラエルは、まるで、霊的な暗黒の地、荒れ野と似ていました。彼らは彼らのかたくなさによって、すでに心が固くなっていました（ロー

マ2:4, 5)。彼らは預言者を退け、預言者から神様のお声を聞くのを拒みました。結局、彼らはメシアを迎え入れる準備が全くできていませんでした。しかし、それでも、神様はこうした彼らを捨てられませんでした。あわれみによって、洗礼者ヨハネを送り、彼らのためにメシアの道を整えさせられました。

洗礼者ヨハネは、彼の容貌や生活の様式の面からも旧約時代の預言者を連想させています。

「ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた」（4節）と語る通りでした。著者はここで、洗礼者ヨハネはまるでエリヤの預言（マラキ4:5、ルカ1:7）の成就者であるかのように暗示しているように見えてきます。彼は徹底した自己節制と敬虔な生き方を見せました。彼のこうした生き方は、当時、贅沢な生活を送っていた宗教指導者に向かっての強力なメッセージとなりました。彼の容貌と生活ぶりは、悔い改めを叫ぶ説教者によく似ていたのです。

予想通り、洗礼者ヨハネの仕事は、人々に強烈な影響を与えました。当時の状況を著者のマタイは、「そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた」（5,6節）と書き記しています。エルサレムとユダヤの全土はもちろんのこと、ヨルダン川の四方つまり、ガリラヤ、ペレア、サマリアなど、いわば宗教的に疎外された地域にいた人々まで自分の罪を告白し、ヨルダン川で受洗するようになったのです。本当に驚くべきことに、宗教的復興運動が、そんな荒れ果てた土地で起こったのです。

さて、私たちをもっと驚かせるのは、四方八方から人々が荒れ野に押し寄せたことにあります。彼らは好奇心や群集心理によって、この荒れ野にやってきたものではありません。彼らは自分の罪を告白するために集められてきたのです。この「告白」という言葉は、100パーセン

ト確信に満ちた無条件的な認定のことです。彼らは神様の御前で、すっかり降伏してしまった、という意味が語られています。彼らは神様に完全に屈服しました。罪を告白しながら、ヨルダン川に沈められることは、彼らが神様のさばきに向かって完全に屈服したことをあらわしています。真の悔い改めの姿がまさにここにあります。自分の罪を徹底的に認めるのが悔い改めです。そして、この真の悔い改めは、洗礼の道へと導いていきます。洗礼は罪の赦しのしるしであり、キリスト教における信仰告白なのです。洗礼は自分を否認し、その代わりに、キリストを受け入れる決断でもあります。

ところが「ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見る」や、ヨハネは「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」（7節）と厳しく叱りました。洗礼者ヨハネの目には、これらの宗教指導者らがエバを誘ったあの古い蛇、サタンの道具（ヨハネ8:44）として見えたのかもしれません。彼らは罪の告白とはほど遠い人々でした。悔い改めは彼らの関心事ではありませんでした。あらゆる偽善と自己満足そして優越感に陶醉されていた彼らには何の「罪意識」もありませんでした。だからこそ、洗礼者ヨハネは彼らに向かって、このように猛烈な攻撃を浴びせたのでした。

続いて、洗礼者ヨハネは、「悔い改めにふさわしい実を結べ」（8節）と語りました。彼らの決定的な欠点は、まさに「悔い改めにふさわしい実」を結べないことにありました。彼らは悔い改めに関心さえなかったので、ふさわしい実を結べないのは当然なことでした。洗礼者ヨハネは、彼らに向かって神様の裁きの恐ろしさを警告しました。洗礼者ヨハネが強調した悔い改めにふさわしい実とは、「差し迫った神の怒り」を免れる唯一の方法であったのです。

今日の教会の中にも悔い改めにふさわしい実を結ばない者たちがいないかと私は本当に心配

でたまりません。偽りの悔い改めは、ふさわしい実を結べません。洗礼を受け、教会に通っていたら、もう大丈夫だと考えているなら、それは大きな誤解です。洗礼者ヨハネは、現代教会の偽りまで厳しくとがめているのです。ヨハネは、現代教会の中にいる生ぬるい信徒、いい加減な信徒、無責任な信徒、わがままに生きている信徒に向かって差し迫った「神の怒り」を宣言しているのです。

10節で洗礼者ヨハネは、即時に、悔い改めと悔い改めにふさわしい実を結ぶことの必要性を力説しています。また、11節と12節で、来るべきメシアと自分自身とを比較しています。自分は、水で洗礼を授けているが、来るべきメシアは、「聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる」と謙遜な姿勢で真実を語っています。イエス・キリストによる「聖霊と火」の洗礼がなければ、水の中に沈められることは、何の意味もないと彼は語ったのです。

差し迫ってきた天国は、聖霊と火の洗礼の時代であるとも予告しています。メシアの到来によって与えられ始めた天国の市民は、聖霊と火の洗礼を授けられた者だけなのです。真の教会員は、ただ聖霊と火で洗礼を受けた者だけです（使徒2章）。

愛する信徒の皆さん！

私が時代の人々はみな、高い教育熱と高学力を誇っています。しかし私たちは、現代教育の限界を骨身に感じていなければなりません。なぜなら、高い教育の裏側には「罪意識」がますます失われているからなのです。罪意識の軽視は、現代人の苦痛を増し加え、現代社会を恐怖のるつぼに追い立てています。罪意識の問題は、教会の重大な仕事と関わっています。このように、罪意識が喪失していること自体、まさに教会の怠慢であり、説教者がその責任を正しく果たしていない結果でもあるのです。

神様はメシアを地上にお送りくださる前に、



主の道を整える洗礼者ヨハネを先にお送りくださいました。洗礼者ヨハネの関心は唯一つだけでした。それは、来るべきメシアの道を整えることだけでした。彼のビジョンは、イエス様の道を整えることだけです。洗礼者ヨハネの姿は、現代キリスト者の利己的な姿を厳しく暴いています。神様からの祝福をいただこうとし、イエス様を信じた振りをして「家庭幸福」を何よりも第一にする、現代教会の中にいるそんな人たちをもヨハネは鋭く指摘しているのです。

彼の説教は、「悔い改めよ。天の国は近づいた」という実に簡潔なものでした。しかし彼の説教はそれだけでなく、衝撃的であり、強烈な印象を人々に与えました。その結果、数多くの

人々が荒野のほうに足を向けるようになりました。そして、彼らは自分自身の罪を告白し、謙遜に洗礼を受けたのです。謙遜に神様に屈服したのです。

また洗礼者ヨハネは、水で洗礼を受ける自分と聖霊と火で洗礼を受けられるイエス様とを比較し、イエス様の道を整えました。洗礼者ヨハネは、常に、「あの方（イエス様）は栄え、わたしは衰えねばならない」（ヨハネ3:30）と証しました。それ自体がまさに神様のご計画でありました。神様は洗礼者ヨハネを通して道を整え、イエス様を送られたのです。私たちがイエス様だけを誇り、イエス様だけを証しする理由がまさにここにあるのです。アーメン。



## 聖書は歴史をどう語るか (第1回)

牧野信成 (神戸改革派神学校教授)

わたしの民よ、わたしの教えを聞き  
わたしの口の言葉に耳を傾けよ。  
わたしは口を開いて箴言を  
いにしえからの言い伝えを告げよう  
わたしたちが聞いて悟ったこと  
先祖がわたしたちに語り伝えたことを。  
子孫に隠さず、後の世代に語り継ごう  
主への賛美、主の御力を  
主が成し遂げられた驚くべき御業を。

(詩編78編1~4節)

もう20年以上前のことになりますが、私たち日本キリスト改革派教会は『創立40周年記念宣言』を大会で採択して、神の啓示の言葉である聖書に対する教会の信仰を確認しました。それによって、プロテスタント教会の、カルヴィン主義の伝統に沿う聖書観をウェストミンスター信条において改めて確認し、現代に生かし、さらに堅固で豊かな御言葉の理解の上に教会を建て上げる一定の指針を私たちの教会はもつようになりました。

私は丁度そのころ大学生で、東部中会の青年会でなされた修養会等で宣言を学習する機会が与えられ、東京教会の矢内昭二先生を始めとする先生方の御指導を通して、初めて聖書の読み方が自分なりに理解できるようになりました。もっとも、そこが出発点であったのですが。

簡単に言えば、それは書物として聖書を読む、ということでした。当たり前といえば当たり前ですが、教会学校で育った私にとって聖書は他のものとは全く異なる類の書物になっていましたから、誰かに説明してもらわなければ分からないものでしたし、牧師や教会学校の先生が教

えてくれる範囲を越えてはならないものでした。もう少し具体的には、教理問答の学びがまず先でしたので、聖書の読み方としては、学んだ教理を聖書の中に探す、という関心の持ち方になっていました。自分で何がしかの感想をもつことが禁じられたわけではありませんが、そうしないことが自然と身についたのだと思います。それで、読まずにいても聖書のことは分かったつもりになっていました。

聖書を一冊の書物として意識する、ということは、それが人の言葉で書かれたものであって、いつ、誰が、どこで、どんな目的で書いたかに関心を払うことにつながります。大学生の時に先生から受けた指導は、聖書をよく理解しようと思ったら、市販の参考書を用いて国語の勉強をしろ、ということでした。国語力、読解力を身につけること。受験で問われるそうした能力が、そのまま聖書理解にも適用されます。そこから自分で聖書を読む具体的な手立てが与えられて、聖書の言葉とまずは自分が向き合う必要が生じてきました。「素読をしろ」と勧めてくださった先生のことも思い起します。同じことを意味しておられたのでしょう。

求道者から導かれた方々には当然のことかも知れませんが、自分で初めて聖書を手にとったところから信仰の歩みが始まったのですから。けれども、契約の子にとって、聖書を読むことは初めから「習慣」です。親は子どもの信仰教育を心がけて聖書を読むことを習慣づけようと試みます。私も子どもの頃から毎朝の日課として一日一章の通読をした時期がありました。先に題辭に掲げた聖句にも表れていますように、これは信仰の継承という聖なる民の使命でもあり

ますし、後にお話ししますように、それが聖なる伝承が形成される絶え間ない生の営みです。そして、聖書を読む習慣は、契約の子たちの成長段階で確かに絶大な効果を生んで、たとえ十分な理解に達していなくても、彼らの辿る道を照らす光となります。

しかし、習慣は必ずしも聖書の言葉に正面から向き合うという主体性を生み出しませんから、神の言葉が私の内に生きて働くという実感には乏しい聖書信仰になりがちです。そして、聖書の文面に書いてある事柄を自分でよく確かめようとせずに、教会で受けた説明だけで満足していましたから、教理の体系を基礎にした思考力はある程度身につけていたとしても、豊富な聖書知識と正確な本文の理解には乏しい信仰となりました。こうした点は私の個人的な経験ではないようでして、昔からだ聞いていますけれども、神学校の入学試験で教派出身の受験者が最も苦手とするのは「聖書知識」の科目であったりします。

一人のキリスト者として成人するまで（信仰告白をするまで）の間、契約の子の内には基礎的な聖書論が確立しますが、聖書自体への習熟が追いつかないという事態が起こります。聞いたことのある聖句は幾つもあるとしても、それがどの書物のどのような文脈で語られていたかは覚えていませんし、「好きな聖句は」と聞かれても答えることができません。そういう関わりを聖書との間に築いてこなかったからです。

聖書は文字通り「聖なる書物」であり、神の言葉として信仰と生活の基準に違いありませんが、同時に人の手によって人の言葉で書かれた歴史的な文書です。このことに改めて気づかされると、神が私たちの生きている世界の歴史に直接接触してこられたことを、聖書そのものに見て、感じて、受けとめるようになります。

さて、「歴史」といいますと、学校教育を通して今日の科学主義的な態度を身につけた私た

ちは、まず「事実」を問うこと、と考えます。今日の歴史学では、出来るだけ多くの証拠を集めて分析し、そこからある出来事や人物や社会の実態を正確に描き出そうと試みます。そういう作業の綿密な積み重ねによって「世界史」が叙述されて教科書となり、私たちの歴史観を形成します。しかし、それは啓蒙主義時代以降に成立した「歴史」の概念です。私たちが聖書の歴史に触れる場合に、そういう歴史科学的な観点から近づいても、聖書は必ずしも「歴史」そのものを伝えてはくれません。例えば、旧約聖書の冒頭に置かれた『創世記』では、「初めに神は天と地を創造された」とありますが、これは科学によって証明されるような「歴史」ではないことは誰でも分かります。それは、創造者なる神を信じるイスラエル民族の口を通して語り継がれた伝承に基づく信仰です。

古代人には事実と神話の区別はありません。聖書の時代を生きた人々にとって聖書の物語はすべて真実です。私たちは聖書を「歴史」として読む場合、今日的な意味での「世界史」と、ある民族に語り継がれた物語伝承としての「歴史」とをよく区別しておくことが肝要です。初めから科学的な関心をもって聖書に近づくると本文の意味を取り違えたり混乱を招きます。そして十分な理解のないまま不注意にそれを宣教に用いようとするれば、未信者の人にとっては「これは作り話だ」と思い込ませてしまうかも知れません。聖書が語る人類の歴史は、一般的な歴史理解に一定の情報を与えてくれることもありますが、本来それは神と世界、神と人間との関係を描き出し、万物の根源であり真の権威と力をもっておられる神の御前に、それを読む人々を通して、世界全体を位置づけようとする啓示の目的に従って、神が人に書かせたものです。そして、その記述の仕方もまた歴史的なのであって、この一冊の書物が完結するまでに実に千年もの時間がかかっています。

旧約聖書は神の民の形成を物語る伝承を綴っ

た大きなタペストリーになぞらえることができます。そこには、天地創造から始まる人類の原初の歴史が含まれ、一人の人間から一つの民族が形づくられ、やがて国家を擁するに至り、最終的に世界に散らされるという一連の物語です。加えて、最後には選びの民が再結集する未来をも見越しています。この叙述はいたって真剣に歴史を描こうとしたものです。しかし、科学的な目で歴史の事実を記録・収集するのではなく、語り継がれた物語を忠実に書きとめ、新しい時代には王国の書記たちが記した資料に信仰的な評価を加えながら、一連の物語へと結集させたものです。

もう一つ念頭に置くべきことは、書かれている通りの聖書を注意して読めば、そこには様々な形式を備えた書物が集められていることが分かります。全体で一連の歴史を描いているとしても、創世記と列王記では文体が異なりますし、預言書や詩篇、箴言など、それぞれに固有の文学的形式を備えています(専門的にはこれを「文

学類型」と呼びます)。私たちの身の回りでは、こうしたことは自明であって、手紙には手紙独自の文体がありますし、小説や新聞記事、短歌や俳句など、一見してそれと分かる文のつくりになっています。ヘブライ語やギリシャ語で書かれている聖書には、そうした生活環境に則した様々な形式を備えた文書が集められていて、今日の私たちはそれをまずよく吟味しないと、聖書を正しく読み解くことができません。聖書の記す歴史を理解するためにも、まず、本文の性格を弁えた上で、その歴史的要素を判断することが求められます。つまり、語り継がれた物語には歴史を記すにも文学的に表記された部分が多数見受けられますから、それを正確な記録であるかのように受け取ると間違いを引き起こし、つじつまの合わない数字の勘定に頭を悩ますようなことにもなります。この辺りの解釈に関わる問題は、神原康夫先生の『聖書読解術』という優れた手引書が昔からよく用いられていますので参照してください。(つづく)



## 信仰の継承 (第1回)

教会学校教師の多くは契約の親でもあり、日夜、我が子の信仰告白を祈り求めつつ奉仕を重ねておられることと思います。時に焦り、不安になることもあるでしょう。その時こそ、神の約束を明るく信じ、熱心に祈り求めて参りましょう。「信仰の継承」と題して、第一回は親の立場から。先輩たちの証しから、励ましと慰め、また反省をも促されたらと思います。

### 信仰の継承について

梶浦和由

私は、非キリスト者の家庭で生まれ育って、20歳の時に洗礼を受けた一代目のキリスト者ですが、二代目の子供たちが、教会に繋がっていることをまづもって神様に感謝いたします。私が何か特別なことをしてきたわけではなく、むしろ迷いと失敗の連続でした。しかしそれにもかかわらず、神様は私たち家族を憐れみと祝福をもって導いてくださり、救いの群れの中に留めてくださいました。これは真に神様の恵みによるものであり、それ以外では決してないと思っています。

少し振り返って見ることにいたします。その当時私の両親はキリスト者ではありませんでしたし、私も一代目キリスト者として弱い存在であり、勇気もありませんでしたから、家庭礼拝を守ることが出来ませんでした。本当に悔やまれる最大の反省点です。このことは今でも引きずっているのですが、取り返しが着きません。仕事の関係で、比較的朝も早く、夜も遅くなることもあって、食事もなかなか子供たちと共にすることができず、また疲れもあって家庭礼拝を疎かにしてしまったのです。

代わりになるかどうかは分かりませんが、私は、子供たちの前に、良いキリスト者の父親として、お手本を示そうとがんばって行くことにしました。自らは、日毎によく聖書を読み、祈り、進んで教会の様々な働きをしてきました。

主の日には、もちろん毎週欠かさず、子供たちを連れて教会に行き、礼拝を守り続けました。礼拝に行くことが当たり前のこととして育てました。子供たちはいやがることもなく、一緒に着いてきてくれました。自分の後ろ姿を見て、着いてきて欲しいと願っていたものです。

少し大きくなってからは、日曜学校から参加させ、そのために朝早く自転車で出掛ける姿は、結構評判になりました。母親が赤ちゃんを背負い、父親が三輪自転車に子供を乗せたり、親の後に子供が続く情景があったからです。そしてある時考えました。子供に信仰を教え伝えていくことを、他人任せにしておくことは出来ない、と。自らも日曜学校の教師となり、子供たちに信仰を教え伝えていくことへの責任を負うことにしたのです。もちろん家庭の中でも、家庭礼拝は先に述べたような事情で行いませんでしたが、信仰の話しや神様に聴き従うべき姿勢は、事ある毎に語り教えてきました。しかし決して十分ではありませんでしたから、教会の日曜学校できちんと教えて行きたいと思ったのです。それに契約の子らに、信仰教育を行って、やがて信仰告白へと導いていくのは、両親だけではなく、教会の務めでもあると思ったからです。

契約の子らの信仰継承は、現代に限らず、昔から叫ばれて久しいと思いますが、なかなか実を結ばないどころか、むしろ後退しているように見受けられます。各々の教会の中でも、幾つかの家庭の契約の子らが、教会から離れ去っているのが現状です。その子らが教会に留まって

いてくれたら、教会はもっと充実していたであらう……と考えさせられてしまいます。

なぜ信仰継承がうまく行かないのでしょうか。その原因の一つは、親が子供の信仰教育に責任を持たず、自らが信仰のお手本としての歩みをしていないからではないかと思うのです。子供は神様から預かっているのです。親の所有ではありません。神様から預かった子供を、神様の子となるようにちゃんと育てるよう、教育を託されているのです。親の都合によって、託されている務めを疎かにし、いい加減にしておいては行けないのです。昔、私も子供のしつけを、優しくすべきか厳しくすべきかを真剣に悩んでいたときに読んだ本の中に、とても印象に残る言葉がありました。“子供は、しつけなければ死んでしまう”というものです。神様の子となることを考えるときに、例え肉においては生きていたとしても、霊において死んでしまっただけでは、神様に申し訳が立ちません。子供の永遠の命が掛かっているのです。そのためには、子供の時に、神様の子として守るべきことをきちんと教えておく必要があるのです。しかもむりやりではなく、怒らせないように、諭し教えることが求められています（エフェソ6:1, 4）。

子供に厳しくするとき、当然のこととして子供は反発してきます。それに対し、安易に妥協しないことが必要ではないでしょうか。もちろん子供の言い分を聞いてあげ、配慮することは必要ですが、子供に妥協して、譲れないものまで譲ってしまうことがあってはならないのです。信仰とはそんなものか、と思われてしまうからです。子供を信頼して向き合い、親の弱さも見せながら、よく話し合い、十分に説明して納得させる必要があるのです。そうして最も相応しい対応を祈り求めて行くのです。その中で試行錯誤しながら実行し、最後は神様に委ねて行きます。自らの最善を尽くす姿勢こそ尊く、それを神様は顧みてくださると信じています。私はそのようにして歩んできました。何度も子

供のことで眠られない夜を過ごしてきました。しかし最後は神様を信頼し、委ねてきましたし、神様はそれに答えてくださいました。振り返れば感謝なことでした。

家庭のことは〔それが信仰教育であっても〕、あまり教会で話し合われることはないようですが、こういうことこそ、子供を持つ家庭の親たちは、真剣に話し合い、お互いに教え合い、注意し合い、祈り合って行くべきなのでしょう。そして牧師や小会の指導も受けながら、教会と一緒にあって、信仰教育に取り組んで行きたいものです。それぞれの家庭においても、教会においても、あらゆる手段を用いながら、全力で取り組んで行くことだと思っているのです。

日本の教会が伸び悩む一つの大きな理由は、この信仰継承にあると思います。信仰を自分のことだけにして、子供に受け継ぐことができているからです。子供の霊的命を他人事しているのです。また子供に、自分の信仰生活を見せながら信仰の道を教え伝えられないで、どうして他人を教え導けるのでしょうか。まず自分の子供の信仰継承に、真剣に取り組むことこそ、重要課題だと思っています。もちろん、それでも必ずしもうまく行くとは限らないとは思いますが、そういう真剣な取り組みがなされていけば、神様は必ず何らかの答を出してくださると私は信じています。

かつての旧約時代に、神様の教えを子供に伝えて行くときの姿勢は、今の時代においても見習うべきものだと私は思っています。すなわちあらゆる機会に、あらゆる方法で、語り伝え、教え、また守らせるべきである、ということなのです（申命記6:7～9、32:46, 47）。

最後に反省を込めながら、キリスト者家庭においては、出来る限り家庭礼拝を守るようにしていただきたいし、そのための努力を惜しまないでいただきたいと願いつつ、終わりにしたいと思います。（津島教会長老）

## 証し—信仰の継承

草野勝男

私はノンクリスチアンの家庭で育ち、青年期に新聞折込の伝道集会案内で教会に出かけたことがキリスト教との出会いです。その後、教会の求道者会を通して洗礼に導かれました。両親は私が教会へ行くことに特に反対せず、むしろ安心していたようでした。父は若い頃東京にいて、路傍伝道でキリスト教に接し、そこで歌われていた「ただ信ぜよ」という賛美歌を覚えていて、時々口ずさんでいました。母もキリスト教に好意的でした。一方、妻の家庭は両親の理解があって小学一年生の頃から兄弟姉妹揃って教会学校に行き、イエス様のお話を聞いて育ったそうです。もしも私たちの家庭が反キリスト教的なものであったのであれば、私たちが教会に行くことはできなかったでしょう。こう考えるとき、私たち夫婦が、ある意味では、信仰の継承の恵みの中においていただいたと言えるのであります。

私たちの子供たちの出産時には、牧師ご夫妻が産院に駆けつけてくださいました。その時お祝いにいただいた子供向け聖書物語は三人の子供たちの良い信仰教育テキストとなり、綴じ目がはずれるまで読み返し、それは、今は孫たちへと読み継がれています。

私たちは未信者の両親との同居生活でしたが、子供は三人とも生まれて一ヶ月目から家族揃っての礼拝に出ることができました。子供たちにはキリスト教信仰をしっかりと持たせたいと願い、神様に知恵を下さいと願い続け、他の宗教には接しないように努めました。私たちの町は地域ごとの祭り行事でしたから、自分のところで祭りがある時は他の地域におられる教会員の姉妹達を訪ねて、祭り行事を避けたりしました。

主日の礼拝を守ることを大事にしていたから、日曜日の幼稚園行事のときは困りました。長男のときはあまり気にしないで礼拝前の時間

まで幼稚園にいて教会へ戻りました。しかし、長女のときの「父の日」参観などは可愛そうな気がして親は心配しましたが、担任の先生にお話に行きますと、先生は、「淳子ちゃんが『うちのおとうさんはきょうかいがあるからきません』と言っていますよ」と言われ、ほっとしました。地域とのかかわりでは、礼拝時間にかからない公園や側溝掃除などには積極的に参加しました。地域の役員も、宗教行事には参加できないことを了解してもらったうえで引き受けました。

家庭礼拝は子供たちが小学生までは家族全員で続けましたが、中学生になりますとそれぞれの生活パターンが違ってきて、私も仕事が忙しく深夜帰宅などもあり、全員揃うことはむずかしくなりましたが、夕食後9時頃に妻と子供たちが集まり、お茶の時間を持ってその時に短い祈りをしました。

子供たちの信仰教育にとって最も重要なのは、やはり「教会学校」です。CS礼拝の中で「主の祈り」、献金することと献金感謝の祈り、聖書のお話を聞いて聖書の世界に導かれること、イースター、花の日、母の日、夏期学校、クリスマスなどの行事で、また当番やオルガン奉仕などで、子供たちが主体的に教会学校へ参加することを通して信仰が培われていくのです。

将来の教会の奉仕を願ってピアノを習わせていた娘は、二人とも小学高学年からCS礼拝で奏楽をさせていただいたことで、後の大人の礼拝での奏楽奉仕のための訓練ともなりました。

中学生になりますと、どうしても日曜日の部活動がCS出席の障害となります。我が家の子供たちも礼拝出席と部活の選択で苦しい思いをしていたのですが、こんなことがありました。長男は部活でバレーを選びました。バレーはチームプレーですから日曜日に練習を休むことは辛いのですが、試合の時以外は礼拝を守ることを約束していました。ある時ちょうど長男が礼拝に出て部活を抜けていたとき、部活の仲間

たちが面白半分で学校近くのチョコレート工場の壊れた塀から忍び込んだことがわかり、大騒ぎとなりました。翌日このことを知った長男は、悪いことに加わらないように神様が守ってくださったと喜び、感謝したのです。しかし、連帯責任で部員全員が、今後決してしませんと作文を書かされたとのこと。

契約の子の最後の仕上げであります「信仰告白」へのステップは、なかなか一概にはこうと言えないものであると思います。個々の子供たちの個性や環境によって違ってくるでしょう。私たちも長男が高校生になったとき信仰告白についてどのようにすべきか悩みました。神様に良い知恵を下さいと日々祈る中で忠海聖恵授産所が示されました。

聖恵授産所所長の井原牧生先生をお願いして夏休みの一週間、同所の中においていただきました。その間井原先生より心のこもった言葉をかけていただきました。

聖恵授産所から帰ってすぐに言った言葉は「信仰告白します。大学にもいきます」でした。信仰を持って働いておられる同所の先生方や職員の皆様、そしてそこで懸命に障害と闘って仕事に取り組んでおられる多くの方々の方に感動したのでしょうか。そして大きな信仰の確信とチャレンジが与えられたのでしょうか。その年のクリスマスに信仰告白をしました。

二人の娘たちは、教会での信仰告白準備会を経て高校時代に信仰告白へと導かれました。ここまでにいる道において多くの方々からご指導と励ましそしてお祈りをいただいたことを覚えて心から感謝申し上げます。

契約の子への最大の遺産は信仰の継承であると言われます。親はそれを願いますが、信仰を与えられるのは神様です。また、子供たちが親の信仰生活から何を学んだかは、子供に聞くしかありません。子供は親の弱さや破れをより強く感じたのではないのでしょうか。そのような親の弱い信仰をも乗り越えさせて信仰告白を与え

てくださった神様の大きな愛の御心に感謝するほかはありません。

子供たちが学校を卒業して社会へ出た後の信仰の歩みは子供自身の信仰によることですから、親は祈りの内に見守るしかありません。しかし、それぞれの子供が人生の大きな選択をするとき、共に考え神様の御心を祈り求めることができることは信仰の家族の幸であります。長男が大学時代のときに、神学校への道を考えてみるように一度だけ言いましたが、そのときは「自分はお父さんのように長老として教会に仕える道を考えている」と申しました。しかし、その後、実社会での様々な職業を辿り、最後には牧師への道に向かいました。

長女は卒業後、旅行社で働きながら主日の礼拝は忠実に守りましたが、同じ会社のノンクリスチャンの男性と結婚したいと言ったときは、親は途方にくれました。しかし本人の決めた道を進ませるしかありませんでしたが、相手の方には娘から教会生活を取り上げることは娘が無に等しくなることであることを申し上げて、必ず教会生活を守らせてくださいとお願いいたしました。幸い娘婿は、その後一緒に礼拝に出席し、孫たちには幼児洗礼を受けることを認めて、契約の子として教会で守り導いていただいております。

末娘は卒業後ダンスの道に進み、インストラクターとして教室生の指導と公演準備に追われる毎日で、主日礼拝出席もままならない日々を続けていました。しかし、礼拝の奏楽奉仕だけは都合をつけて教会にでてきました。彼女は、「奏楽の奉仕を与えてくださった神様に感謝します。そのおかげで教会の敷居がまたげます」と申しておりました。子供たちがそれぞれの道を子供たちや配偶者と共に歩んでいます。私たちは、孫たちが契約の子として信仰の子としての道を心豊かに力強く歩んでくれることを神様にお願いし祈る毎日であります。

(那加教会会員)



## 家庭における信仰教育

町野正三

この度、「家庭における信仰教育」というテーマで原稿を依頼され、大変戸惑っております。なぜなら、正直に申しますと信仰教育なるものを殆どしてこなかったからであります。私の家は、私が小学校へ入る年から父が商売を始めて以来、四人家族の長男として家業を手伝い、忙しさの余り家庭での温もりを味わえぬままに20歳を過ぎたのがそもそもの教会へのつながりとなったのであります。以来40年余りの信仰生活を主に守られ今日に至りました。

その中で思うことは、第一に同じ信仰の伴侶を与えられたことが最大の恵みであったことです。家業が忙しくて教会生活が困難と思われた時も、妻が犠牲になって夕拝、祈禱会にも余程のことがないかぎり出席することができたのは同信の伴侶があつてこそそのことでした。

私には長女と長男の二人の子どもがあります。二人共、1歳の時に幼児洗礼を授けられ、長女が6年生になるまで二人共教会学校へ連れて行きました。その後、長女は中学、高校と部活のために教会から離れて行きました。長男には、中学になつても特に教会に行くの強制した記憶はありません。高校時代もなぜか教会から離れず、大学もミッション系に生まれ、やがて同信の伴侶が与えられて、今では二人の子どもを連れて教会生活を守っております。

私はそんなつもりはなかったのですが、長女が後から申しますのは、私の教会生活が厳しくて日曜日に自由がなかったのもつらかったようです。また、私自身内外に戦いがあり、教会生活を守るのがやつとでありましたので、ご期待に沿えず申し訳ありませんが、これと言った信仰教育はしておりません。もし子どもに影響があつたとすれば、出来る限り主の日の礼拝をは

じめ他の集会を守ってきたことが原因かも知れません。そして何より大切なことは聖霊によって働いてくださる御言葉の力です。入信当時覚えた聖書の言葉は幾多の困難などきどんなにか力になったでしょう。今、教会学校で子どもたちが喜んで御言葉を暗記している姿を見てこの子達がこれから経験するであろう様々な試練に大きな力となって行くと信じて祈るものです。

〔私の信条〕 順不同

1. 真の悔い改めこそ信仰生活の原点であること  
自覚すること。目の見えない人が目のない見えない人を導くことは出来ない。
2. 自分の全てを有りのままに受け入れること。  
キリストは十字架の上で有りのままの私を受け入れてくださったばかりでなく、命をも捨ててくださったことを自覚すること。
3. 否定的な言葉を言わないこと。相手（家族）を有りのままに受け入れること。
4. 自分の物差しで計らないこと。
5. 人の評価を気にしないこと。誉められても自分の価値が上がったわけでもないし、けなされても価値が下がったわけでもない自分は自分と自覚すること。
6. 自分を一番評価してくれる家族の前でこそキリスト者としての真価が問われると自覚すること。
7. あれやこれやと聞くこと（例、勉強したの、ご飯食はべたの、と干渉しない）は奪うことと自覚し、与えること、良い情報を伝えること。
8. 困難を御言葉に聞くこと。
9. まず他人の考えを反対せず受け入れて見ること。そのほうがうまくいく場合が多い。
10. 礼拝、夕拝、祈禱会（牧師を励まし育てる大きな力）が伝道の原点と考え、でき得る限り守ること。これは義務でなく恵みである。

（恵那教会長老）

# 副読本のご案内

## 『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円

著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集員・神戸改革派神学校講師)

ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

### ● 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に連れ始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときたまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の問1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつぶやくようにおっしゃいました「わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えたこともありませんでした、と。」

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのとでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを禱にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなものです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の問1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の問1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

---

テキスト 創世記 12章1～9節

創世記は12章からアブラハムの召命の物語が始まります。もっとも彼の名がアブラハムと言われるのは創世記17章5節以下です。それまではアブラムで、最初にその名が記されるのは創世記11章26節です。そこからアブラムについては、誕生、サライ（後にサラと改名）との結婚、カルデアのウルからカナンに向かう旅、その途中ハランの父テラの死が記されています。ハランを出発したときすでに75歳となっておりましたが、まだ子供もなく、父とも死別し、家もない、一介の旅人でした。実に彼の生涯は旅人です。12章以下に彼の人生の節々にたどった大切な地名が出てきます。ハラシ、カナン、シケムの聖所、モレの檜の木のと、西にベテル東にアイを望む所、ネゲブ地方、エジプト、さらにヘブロン、マムレの檜の木のかたわら、ベエル・シェバ、モリヤの地、そしてマクベラの洞穴に葬られる（創世記25:9）まで、不安定な旅人・寄留者でした。彼の地上の生涯は、「天の故郷を熱望」（ヘブライ11:16）する日々だったと、ヘブライ人への手紙の著者は言います。聖書巻末の地図をたどるとともに、ヘブライ11章8節以下を読んでいただきたいと思ます。まさに天路歷程の歳月でした。私たちもこの世にあっては、どんなにか行く末の見えない旅人・寄留者であることでしょうか。私たちの信仰の生涯は、何を望み、何に向かったの歩みなのでしょうか。

このいかにも不確かに思われる天路歷程のなかで、アブラムにはもっとも確かな神の言葉が与えられます。その最初の言葉が創世記12章1節以下の召命の記事です。いまは旅人にすぎないアブラムは、「大いなる国民に」され「名を高める」、さらに「あなたの子孫にこの土地を与える」との約束をいただくのです。その時アブラムには一片の土地もなく、すでに75歳という老境に入っていたのに、一人の子供もいませんでした。しかしこ

の約束はアブラムの生涯を通して、徐々に確かなものとなっていくのです。約束の中心は土地と多くの人々に関することでした。この創世記12章の約束は、13章14節以下、15章4節以下、17章1節以下、18章17節以下、22章15節以下で繰り返して語られます。そして、この約束の完成、完全な実現は天国にあると、ヘブライ人への手紙は言います。アブラムにこの約束が語られたのは、たび重なる彼の人生の危機のときでした。もっとも望みの薄いと思われるとき、もっとも不確かな歩みのなかで、もっとも確かな神の約束として繰り返して語られたのです。私たちも、ひとり、家でこの神の言葉を聞きます。また、何よりも主の日の礼拝においてこの約束が新たにされます。それはしばしば私たちの危機のときかもしれません。アブラムの生涯は、幾度も経験した恐れ・不安のなかでも、圧倒的に迫り、彼を包みこむ神の約束の確かさの証しでした。私たちの信仰の生涯もこのような証しの日々でありたいものです。

アブラムはその旅路の節々で「主のために祭壇を築き」ました（12:7, 12:8, 13:8, 22:9）。もちろんこれは「主の御名を呼ん」で礼拝をささげるためでした。彼の人生は旅人としての日々でしたが、礼拝をささげ続ける歩みでした。礼拝こそは不確かに思える日々の歩みを確かなものにし、いよいよ確実にされる「天の故郷を熱望」させるものです。礼拝が天国の先取りといわれる所以です。もちろんそこでは神からの御言葉がありました。アブラムは祭壇を築くとともに、与えられた神の御言葉に従ったのでした。「アブラムは、主の言葉に従って旅立った」（12:4）のです。礼拝は神からの恵みの語りかけ・召しとともに、信仰者の従順な応答によって成り立ちます。神の約束の御言葉に対して、たえず応答し従う人生、これが私たちの礼拝的人生です。それはなんとという幸いな人生でしょうか。（中根汎信）

テキスト 創世記 12章1～9節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問70

### 〔単元のねらい〕

アブラハムの召命について記す今朝の聖書箇所は、信仰に生きる者の原点をシンプルに指し示していると言えよう。それゆえ、わたしたちもおりおりにここにたちかえり、このみ言葉に聞き直さねばならないであろう。み言葉に従って旅立つ者は、何があっても祝福される。この事実を子どもたちにも確信をもって伝えたい。

## 「み言葉に従って」

わたしたちはだれもが、自分の命と人生が幸せなものとなるように、また祝福に満ちたものとなるようにと願うでしょう。では、幸せな人生を生きる鍵はどこにあるのでしょうか。

それは、神さまのみ言葉に聞き従うことです。神さまは、わたしたち人間のために、命の道を備えてくださっています。そしてみ言葉をもってその道に導いてくださいます。わたしたちがみ言葉に従ってその道を歩むなら、神さまはわたしたちの命と人生を豊かに祝福してくださるのです。

そのことを、アブラハムの召命を通して学びましょう。

神さまはあるとき、アブラハムをお呼びになって、こう言われました―「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」(2)。

わたしはあなたから子孫を生み出す、その子孫は海辺の砂、空の星のように数え切れないほどに増え広がる―そう神さまはアブラハムに約束してくださったのです。アブラハムよ、あなたの命は豊かに祝福される。そしてあなたから増え広がった子孫は大いなる国民となって、幸せに生きる。これはこの上ない祝福の約束です。

ただし、神さまはこの約束とともに、アブラハムにひとつのことをお命じになりました―「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい」(1)。

神さまがアブラハムにお求めになったのは、この大いなる祝福の約束を信じて、神さまのみ言葉に従って旅立つことでした。神さまの召しにこたえて、神さまがさし示される地を目ざして、信仰の旅路へと歩み出すことでした。

ただ、神さまのこの命令は、アブラハムにとっては信仰の試みでもありました。

第一に、神さまは「わたしが示す地に行きなさい」とおっしゃいましたが、それがどこなのか、またその地にたどりつくまでにどのようなことが待ち受けているのか、そうしたことはいっさい教えてくださいませんでした。

第二に、この命令に従うためには、長く慣れ親しんでいた生まれ故郷を離れなければなりません。家族とも別れなければなりません。日々の仕事や生活の土台をも捨てなければなりません。

第三に、神さまからこの召しを受けたとき、アブラハムは七十五歳でした。こんなおじいさんになってから、行く先も知れない旅へと出ていかねばならないことは、やはり厳しいことであつたと思います。

そういういくつかのことがありましたから、アブラハムはきっと悩んだと思います。そのことを聖書は記していないのですが（そして聖書に書いていないことをあまりおしはかるのは正しいことではないかもしれませんが）、アブラハムは何日間か、深く思い悩んだかもしれません。神さまを

信じることをしない人、自分の知恵や判断をよりどころとして生きている人であれば、おそらくそのような旅に出るなどということはしなかったはずで

す。けれども、聖書はアブラハムがしたことをただ一言で記しています。「アブラム（アブラハムのもとの名）は主の言葉に従って旅立った」（4）。

アブラハムは神さまを信じたのです。わたしはあなたを、そしてあなたの子孫を祝福する—神さまのこの約束にまちがいはない。そう信じてすべてをゆだね、信頼して旅立ったのです。そして「わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように」—このみ言葉はアブラハムの生涯においてまさに

そのとおりに実現したのです。

わたしたちの地上の歩みが幸せなものとなること、祝福されること、そのために求められることは何でしょうか。

それは神さまに信頼することです。そして、神さまのみ言葉に従うことです。そのとき、神さまはわたしたちを祝福し、わたしたちの人生の歩みを見手をもって切り拓いてくださるのです。

もちろん、神さまに従う道の途上にもさまざまなことが起こります。さまざまな試練も待ち受けています。それでも、信仰によって歩む人の歩みは祝福されます。「主の言葉に従って旅立」—これこそ、わたしたちの人生にとっていちばん大切なことなのです。（木下裕也）

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 12章4節前半

アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

---



## 〈ねらい〉

分級では物語を通して、子供たちが神さまのことと信仰者のことを心に留めていければと思います。

この分級展開例では物語の文章だけ記しましたが、それぞれ紙芝居やエプロシアターなどのシナリオとしてお使いいただければと存じます。そして、毎回短い暗唱聖句を蓄えていければと願っています。

今日の箇所では、子どもたちが、主の言葉に従って旅立ったアブラムと同じように、自分も歩みたいと思ってくれればよいと思います。

## 〈暗唱聖句〉

アブラムさんは、「主の言葉に従って旅立ち」しました。

## 〈展開例〉

①ノアさんのこどものこどものこども、そのまごのまごのまごのこどもに、アブラムさんという人がいました。アブラムさんは75歳のおじいさんでしたが、子どもはいませんでした。でも神さまを信じる正しい人でした。

②ある日、神さまがアブラムさんに声をかけて言いました。「アブラム、あなたは生まれた家を離れて、私が言うところに行きなさい。そこで私はあなたを幸せにし、たくさんの家族を与え、立派な人にします」。

③アブラムさんは考えました。神さまは「私が言うところ」と言われたけれど、そこはどこだろう。どんなところなのかぜんぜん分からないな」。

④また、アブラムさんは迷いました。神さまは「家と離れて」と言われたけれど、家族やお友達と別れるのはさみしいな。それにここには立派な家も仕事もあるし、どうしようかな。

⑤また、アブラムさんは心配しました。わたしはもう75歳のおじいさんなので、旅なんてとてもできるかな。途中で倒れたり病気になったりしたらどうしよう。

では、アブラムさんは神さまの言うことに従わないで旅に出なかったのでしょうか。

⑥いいえ、アブラムさんは、「主の言葉に従って旅立ち」しました。もちろん、まだどこに行くのか分かりません。でも、アブラムさんは思いました。どこに行くのか私には分からなくても、神さまは知っておられる。また、みんなと別れるのは悲しいことです。でも、神さまと一緒にいてくださるからきっと楽しいよと思いました。それに自分の力ではできなくても神さまが支えてくださるから大丈夫と安心しました。

⑦この旅がどんな旅になるのか分かりません。でも大丈夫。神さまが行く道を教え、ともにいてくださり、支えてくださる旅だから。そう神さまを信じてアブラムさんは「主の言葉に従って旅立っていきました」。

## 〈お祈り〉

アブラムさんが旅立つことができてありがとうございます。アブラムさんのように、神さまの言葉を信じて、旅立っていけるよう勇気を与えてください。アーメン。



## 〈ねらい〉

どんな時にも神様に信頼することを覚えよう。

## 〈はじめに〉

7月に入りました。夏休みが近づいています。日曜学校では、夏期学校やお楽しみ会など、計画が進んでいると思います。今から、クラスのこどもたちが喜んで参加できるよう祈り、こどもたちにも夏の行事があることをお知らせしましょう。こどもたち同志が互いに誘い合えるよう、また、しばらく休んでいるお友だちにも連絡をとり、お誘いしましょう。

## 〈御言葉に聴きましょう〉

- ①神様は、アブラムにどこに行きなさいと言われましたか？
- ②アブラムは神様の言葉に従いましたか？
- ③アブラムは何歳でしたか？
- ④アブラムの奥さんの名前はなんですか？

## 〈展開例〉

みなさんは、初めてのこことって覚えていますか？  
小学校の入学式の朝のこと覚えていますか。初めての学校、先生、お友だち、ドキドキしましたか？  
初めて自転車の補助輪をはずして乗ったときは？  
初めてプールで泳いだときは？  
引っ越して新しい町に行った時は？  
きっと不安に思ったり、大丈夫かなあ、できるかなあ、この先どうなるのかなあって心配になったりしたでしょう。でもそんな時、きっと家族の人やお友だちや学校の先生、

教会の人たちが、そばに居て、励ましてくれたら、私たちは元気や勇気が出てきますよね。

今日のお話のアブラムさんは、どうだったでしょうか。アブラムさんは、神様から、ある日突然、「私の示す地に行きなさい」と言われました。今まで住んでいた所を離れて、全然知らない場所にお引越しすることになったのです。そこがどこなのか、どんな町なのか、どんな人が回りにいるのか、おいしい食べ物はあるのか、全然知りません。でもアブラムさんは、「はい」と言って、奥さんとそのほかの人を連れてお引越しをしました。

なぜ、そんなことができたのでしょうか。アブラムさんは心から神様を信じていたんですね。この神様の言われることは正しくて、必ず、お約束を守られる方、この神様は絶対に私たちを見捨てず、守ってくださる方だと知っていたんですね。だから、神様の言葉に「はい」と言うことができました。

このことは、「神様を信頼する」という言葉で言い換えることができます。私たちが信じている神様は絶対大丈夫、神様は必ず私たちを守ってくださる、とアブラムさんと同じように神様を信頼しましょう。神様を信頼する私たちが神様は祝福してくださいます。

## 〈お祈り〉

神様、あなたは私たちを愛してください、お守りくださるお方です。このあなたを信頼して、この一週間も歩めるようにしてください。そして、私たち一人ひとりに神様の祝福を与えてください。





## 〈ねらい①〉

「信じる」ことを貫く人生の確かさを伝える。

## 〈展開例①〉

「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召しだされると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」(ヘブライ11:8)。

「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです(ヘブライ11:1)。

みんなはドラえものの道具の中で、何が一番欲しいですか。先生は子どものころ、タイムマシンに憧れました。未来が見たかった。自分がどんな人間になっているのか、とても不安で、確認したかった。(でも今の先生を見たら、子どもの時の先生はがっかりするかもしれないね。)未来が見えないから、いつも僕たちは不安ですね。一秒後には死んでいるかもしれない。突然の災害、事故、事件……思いもかけないことが起こる。でもたった一秒先のことさえ、誰にも分からない。

でも今、先生はもう不安じゃありません。もしタイムマシンを持っていても、もう使いたいとは思わない。神様を信じているからです。どんな未来が用意されているのかと考え出すと、今でも怖くなる時があります。でも神様が共にいてくださいます。私のことを、イエス様を与えてくださったほどに愛して下さった神様が、悪いようになさるはずがない。そう信じるから、どれだけ怖くても、明日が来て欲しいと望みます。神様が、私に与えてくださる未来を楽しみにしているのです。

## 〈ねらい②〉

「召しに答える」必要を共に考える。

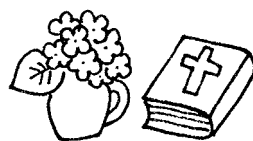
## 〈展開例②〉

「召命」という言葉を知っていますか。英語ではコーリング、神様から呼ばれるということです。アブラハムさんは、神様から「ここを出発しなさい」と呼び出されましたね。皆さんにも同じように、神様から呼ばれる時が、必ずあります。直接、神様の声が聞こえるわけではない。聖書を真剣に読み、牧師の説教を自分のための言葉だと思って聞いていれば、あなたを呼び出す神様の声がかきと聞こえる。

「わたしの栄光を表しなさい」と神様はみんなを呼び出しておられます。そして、栄光を表すために、一人ひとりに一番ふさわしい道を用意していただきます。牧師や宣教師に召される人もいれば、困っている人や貧しい人のために奉仕する仕事に召される人もいます。その他にも、学校の先生、大工さん、花屋さん、コックさん、サッカー選手……色々な仕方で、「神様の栄光を表すように」と、一人ひとりが呼び出される。だから、いつも耳をすましていてください。

## 〈祈り〉

神様、アブラハムのように信じる力を私たちにも与えてください。あなたを信じる、魂の平安を与えてください。神様、アブラハムのように、あなたの声に応える力を私たちにも与えてください。あなたが用意して下さっている道を、強く雄雄しく歩んでいくことができますように。



## 〈ねらい〉

自分への主の召しを覚え、主と共に歩む将来を期待する。

## 〈展開例〉

①今日はアブラハムの「召命」のお話。召命という言葉はキリスト教用語。もとの言葉は「呼び出す」という意味。つまり、アブラハムが神様に呼び出されたときのお話。

Q. 皆は誰に呼び出されて教会に来るようになったんだろう？ 教会の友だち？ お父さんやお母さん？ 日曜学校の先生？ アブラハムの場合、神様に呼び出されて、神様を信じる人生がスタートした。皆は色々な人を通して教会に来るようだけど、それは、そういう人たちをとおして、神様が皆を呼んでいるということ。じゃあ、神様はどんな思いで皆のことを呼び出したんだろう。

②皆が呼び出されたのは、神様が暇だったので、何となしに声をかけた、と言うのではない。「召す」っていうのは、国語辞典ではこんな説明。「上位者が目下の者を呼び寄せること」。王様やら社長から、用があって呼び出されるようなそんなイメージ。神様は意味もなく人とかかわろうとされる方ではない。神様は何か用事があって君を教会に呼び出した。

③アブラハムはどんなことのために呼び出されたのか。アブラハムには、命令と約束が与えられた。命令は「家を離れて」「示す地に行け」というもの（1節）。その理由はアブラハムを祝福し（2節）、そのアブラハムを經由して世界中の人々が神様から祝福される（3節）というもの。

一つのコップに水が注がれて、そこから水があふれて広がっていく、そんなイメージ。

④皆も同じ。神様はまず、君たちを大切にしたい。君たちを幸せにしたい。君たちを喜びで満たしたい。だから、お父さんやお母さん。友だちや日曜学校の先生をとおして、君たちを教会へと呼び出した。アブラハムから始まって、様々な人、様々な時代、様々な国を經由して、神様は君を呼び出した。神様と一緒に生きる人生をスタートさせるために。だけど、それだけじゃない。神様は君の人生が喜びで満タンになって、そこから嬉しさが溢れ広がるようにして、君の周りの人たちのことが祝福されるように望まれる。神様は、学校の友だち、家族、教会の人たちに、君の喜びが溢れ広がることを望んでおられる。

⑤そのためには、ときに神様を知らない人と距離をつくるように、神様から求められるときもある。慣れ親しんだ生活、人間関係。しかし、神様は君たちから宝を奪おうとされているわけではない。アブラハムは自分の財産をすべて抱えて旅だった（5節）。神様を一番にする人生の中で、本当の君の人生、本当の人間関係、こうしたモノはすべて与えられる。人生は旅のようなもの。皆も自分の将来をぼんやりと考えているかもしれない。具体的な行き先はそのうちに神様が教えてくれるだろう。ただ、君たちがどのような場所を目指して人生を歩むにしろ、一番に大事なものは、神様に従うということ。神様と共に、この広い世界を自由に生きていく君たちの将来のうえに神様の祝福があるよう祈りたい。

## 〈祈り〉

神様、私たちを呼び出してくださってありがとうございます。周りの人々に喜びが溢れるように、また、神様と一緒に生きていくために、毎日の中で、神様を一番にすることができるようになってください。アーメン。

テキスト 創世記 15章1～21節

旅人アブラムへの神の約束の御言葉は、創世記12章1節以下と13章14節以下に続いて三回目です。「恐れるな、アブラムよ」と主の言葉がありました。12章後半からエジプトで妻を妹と偽る生活、甥のロトとの別れ、周辺の諸部族の戦いに巻き込まれることなどが続きます。不安定な旅人アブラムには、内・外から押し寄せる危険や苦々しい経験がありました。広い土地と多くの子孫を与えるとの約束(13:14～17)はどうなったのでしょうか。神の約束への疑いもありました。アブラムは老齢の自分たちには子供は与えられないと思ひ、しもべエリエゼルが跡を継ぐものと考えました。15章は恐れや弱さの中にある人間アブラムにたいして、神の一方的な恩寵あふれる約束がテーマです。15章の約束も多くの子孫と広い土地についてでした。子孫については、はじめて夜空の星にたとえられます。公害のない古代社会にあっては、満天に輝く星はとても数えることができません。ついに「アブラムは主を信じた」のです。そして「主はそれを彼の義と認められた」のです(15:6)。

この15章6節は、新約聖書でパウロやヤコブが信仰義認を語るときに、引き合いに出される御言葉です(ローマ4:3, 9, 22, 23、ガラテヤ3:6、ヤコブ2:23)。ヤコブの場合は、ただ信仰によって義と認められたというその信仰は、行いを伴うものであると言います。これはパウロの信仰義認に対立するものではありません。いずれにしても「義と認められた」というのは「神とのあるべき関係にある」と、神が認めてくださることです。このときのアブラムの信仰がどれほど深かったのかとか、確信に満ちていたのかということとは記されてはいません。ただ信じたのです。「信じた」という言葉は、「アーメン」と語源を等しくするものです。真実であると確信する、信頼するなどの意味があります。神の約束の御言葉をアブラム

はこのとき受け入れ信頼しました。彼は恐れや弱さに取り囲まれ、自分自身にも周りの状況にも、より頼むものを持ちませんでした。ただ神の約束の言葉に信頼するしかなかったのです。私たち信仰者の行いが生涯にわたって罪の腐敗・汚れのもとにあるのと同様、私たちの信仰もさまざまな弱さをもち続けます。ただ真実なことは神の御恵みです。

そういうアブラムに、神は約束のより確かな保証を与えられます。それがアブラムと結ばれた「契約」(15:18)でした。アブラムに対して初めて「契約を結んで」と言われましたが、その内容は創世記12章1節以下や13章14節以下の約束と同じものです。ただ未来に実現することの確かさと、契約実行の保証という点で際立っています。15章13節の「異邦の国」はエジプト、そこでアブラムの子孫は寄留者となり400年間の奴隷生活を送ります。出エジプト12章40節には430年とありますが、400年間というのは概数と考えてよいでしょう。その間、神の約束通りアブラムの子孫は、天の星のように(15:5)、大地の砂粒(13:16)のようになりました。契約実行の保証ということで、15章9節以下に記されている奇怪にも思える儀式に示されました。雌牛、雌山羊、雄羊を二つにきり裂き、山鳩と鳩の雛も並べるように言われました。暗闇に覆われた頃、神の臨在の印としての、煙を吐く炉と燃える松明が二つに裂かれた動物の間を通り過ぎていきました。これは当時のオリエント世界の契約締結の儀式でした。その意味は動物の間を通る者が、もし契約を破ったならば、私はこの裂かれた動物のようにされてもよいということを表すものでした。驚くべきことにそこを通ったのは、アブラムではなく神ご自身でした。神の側の一方的な契約に対する誠実さ・真実さの現れでした。これはなんと驚きでしょうか。

(中根汎信)

テキスト 創世記 15章1～21節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問28

### 〔単元のねらい〕

「アブラハム契約」について学ぶ。旧約のアブラハムとの間に契約を結ばれた神は、イエス・キリストの父なる神である。恵みの契約において示された神の驚くべきへりくだり、またそこに示されている神の大きいなる愛を心深く覚え、子どもたちとともに神をほめたたえたい。

## 「神さまのへりくだり」

聖書にはたびたび「契約」という言葉が出てきます。というよりも、「旧約聖書」「新約聖書」の「約」は「契約」の「約」です。つまり、聖書そのものが契約の書物であると言ってよいのです。

では契約とは何でしょうか。聖書では、契約とは神さまと人間との愛の交わりを言います。造り主なる神さまはわたしたち人間を深く愛してください。わたしたちもまた神さまの愛にこたえて、神さまを愛して生きています。この愛の関係そのものを契約の関係と言うのです。

ただ、よく考えてみると神さまと人間との間に契約が成り立っていること、すなわち神さまと人間が出会い、おたがいに交わりを持つことができるというのは、不思議なことです。なぜなら、神さまは人間をはるかに超えておられるからです。神さまは天におられますが、人間は地にあるからです。天と地の間は、目もくらむほどにへだたっているはずですが。

それなのに、なぜ神さまと人間との間に契約の関係が成り立つのでしょうか。その可能性はふたつです。ひとつは、人間が天高くのぼって、神さまと同じところに立つことです。けれども、人間にそんなことはできっこありません。

もうひとつの可能性は、神さまのほうで人間の低さにまでくだってくださることです。実は、神さまはこのことをなさいました。神さまはへりくだって、低くなられました。それゆえに、人間との間に契約を結ぶことがおできになったのです。そして、それは神さまが人間を深く愛してお

られたからこそなのです。

そのことを、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約をとおして確かめてみましょう。

先週も見たように、神さまはアブラハムの子孫を海辺の砂、空の星のように増やすことを約束してくださいました。アブラハムとその子孫を豊かに祝福し、大きいなる国民とすとおっしゃったのです。これが、神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約の中身です。

そしてそのとき、アブラハムに次のようにお命じになりました—三歳の雌牛と雌山羊と雄牛をふたつに切り裂きなさい。そして、向かい合わせに置いておきなさい。

アブラハムがみ言葉のとおりになると、神さまはアブラハムを深い眠りに落とされました。日が沈み、あたりが暗闇に覆われたころ、突然煙を吐く炉と燃えるたいまつが現れました。聖書では火は神さまがそこにおられるということのしるしですから、この炉とたいまつは、神さまご自身をあらわしています。

そして、その炉とたいまつが、アブラハムがふたつに切り裂いた動物の間を過ぎていったのです。すなわち神さまが通り過ぎていかれた、ということです。

これが神さまがアブラハムとの間に結ばれた契約のしるしです。不思議だな、どういうことなのかな、と思うかもしれませんが、けれども、このし

るしにはちゃんと意味が込められています。

つまり、神さまはアブラハムにこのように誓われたのです—アブラハムよ、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を増やし、大いなる国民とすると約束した。わたしはこの約束を必ず果たす。もしもわたしの側でこの約束を破るようなことがあったなら、わたしはあなたの手でこの動物のようにふたつに切り裂かれてもかまわない。

神さまの驚くべきへりくだりです。そして驚くべき、人間に対する真実です。このとき、このように誓われたのは神さまのほうだけで、アブラハムには何も求められませんでした。アブラハムは深い眠りに落ちていたのですから。

これほどまでの真実さで、神さまはわたしたち人間の命と人生とを祝福してくださるのです。そ

れはわたしたちを愛しておられるからです。

アブラハムとの間に契約を結ばれた神さまの大いなるへりくだりは、ひとり子のイエスさまをまことの人となして世にお遣わしになったことに、さらに鮮やかに示されています。イエスさまにあって、まことの神さまはまことの人となられました。そして罪人のひとりに数えられ、十字架に死なれ、三日目に復活されました。それは神さまがみずからわたしたちの罪を贖い、わたしたちに永遠の命を与えてくださるためでした。

神さまはわたしたちへの愛ゆえに、へりくだってわたしたちのところに来てくださいました。わたしたちとひとつとなってくださいました。そしていつまでもわたしたちとともにいてくださるのです。 (木下裕也)

---

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

---



## 〈ねらい〉

アブラハムのように、なかなか信じられないときでも、神さまの約束を信じて、期待することができるように。

## 〈暗唱聖句〉

アブラムさんは、「主を信じた」。

## 〈展開例〉

今日もアブラムさんと神さまのお話です。

- ①「主の言葉に従って旅立ったアブラムさんはカナンというところにつきました。すると神さまが現れて、「ここが約束の場所だよ」と言われました。アブラムさんは嬉しくて、そこに礼拝する場所を作りました。
- ②しかし、そこにはカナン人たちが住んでいたのので、アブラムさんたちはさらに旅を続けました。その旅は厳しいものでした。飢饉があったり、戦争になったり、さらには「さらには一緒に旅をしていた甥のロトと分かれたり」と、心が休まる時がありません。
- ③でも、アブラムさんは神さまに従っていったので、まわりの王さまたちからも尊敬され、大金持ちになりました。
- ④しかし、そんなアブラムさんには心配していることがありました。それは、アブラムさんには子どももいなかったのので、「神さまはわたしを幸せにすると言ったのに、子供がいなくて財産がどれだけあったって幸せではない」。アブラムさんはそう考えていました。
- ⑤ある日、幻の中で神さまが現れてこう言いまし

た。「恐れるな、アブラムよ。私はあなたを守る盾。あなたをかならず幸せにする」。でも、アブラムは悲しそうに言いました。「子どもがいなかったら、どんなにたくさん財産があっても、わたしは幸せではありません」。

- ⑥悲しい顔をしているアブラムさんを、神さまは外に連れ出して言われました。夜の空にはたくさん星が輝いています。神さまはやさしくアブラムさんに言われました。「アブラム。空を見てごらん。星がいくつあるか数えられますか」。アブラムさんは、「いいえ、とても数えられないくらいたくさんあります」。「そうだろ。わたしはあなたに約束する。あなたの子孫はこのようにたくさんになる」。
- ⑦アブラムさんはびっくり。まだ一人も子供がいらないのに、こんなにたくさんの子孫が生まれるなんて信じられない。アブラムさんもそう思いました。でもアブラムさんは神さまの約束を信じました。神さまはそんなアブラムさんを見て、正しいことだと言って喜んでくださいました。
- ⑧それから、何度も空の星を見るたびに、アブラムさんは神さまの約束を思い出しました。そして、いつ神様はお約束をかなえてくださるだろう。そう思うと毎晩が楽しくなりました。

## 〈お祈り〉

アブラムさんの旅を守ってくださってありがとうございます。アブラムさんは神さまの約束を信じました。私たちも神さまの約束を信じていることができるように信仰を与えてください。アーメン。



**〈ねらい〉**

神様の約束の意味を知り、神様は必ず約束を果たされるお方であることを感謝する。同時に、私たちも神様に従う子どもとして歩む。

**〈はじめに〉**

日曜学校の奉仕者のために祈りましょう。もしかしたら、奉仕者がもっと与えられたいと願っておられる日曜学校もあるのではないのでしょうか。主に祈り求めましょう。主は必ず、必要な新たな奉仕者を与えてくださいます。共に子どもたちのために祈り、教え、救いに導くために労する方が与えられますように。すでに、共に奉仕している日曜学校教師の為にもお互いに祈り合い、支え合っていきましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①アブラハムには子どもはいましたか？
- ②神様はアブラハムを外に出して空を見るように言われました。そして、何を数えることができるかと言われましたか？
- ③夜空にある星を全部数えることはできますか？
- ④神様はアブラハムに星のようなたくさんの何を与えになるとお約束されましたか？
- ⑤アブラハムはその約束を信じましたか？

**〈展開例〉**

お友だちとのお約束を毎日私たちはしていますね。学校でもお約束があります。お家でもあると

思います。どんなものがありますか。もし、その決めたお約束を守れなかったとしたら、どうしますか。何か罰がありますか。

今日のアブラハムさんは、神様からのお約束が与えられました。これまでもアブラハムさんは、まだ見ていないところへのお引越しや大変なことがたくさんありました。でもアブラハムさんは神様を信じてきました。今日の聖書では、普通に考えたら、絶対無理と思うような出来事、アブラハムさんもサラさんもおじいさんおばあさんになっているのに、これから星の数のようにあなたがたに子どもを、またその子どもをたくさん与えますよ、という神様のお約束をアブラハムさんはいただいたのです。その神様のお約束に今度もアブラハムさんは「はい」と言って信じました。6節「アブラムは主を信じた」とあります。そして、土地を与えて子どもに継がせると約束されました。また、そのお約束が本当ですよ、神様は必ずこのお約束を守りますよ、というしるしを神様の方から、アブラハムさんに良く分かるように見える形でくださいました。神様は人間の本当かな？心配だな？という気持ちをよく分かっておられる方ですね。

神様という方は、お約束を必ず守る方であることに信頼しましょう。何よりもイエス様をお与えくださったほどに私たちを愛してくださっている方だからです。

**〈お祈り〉**

神様、あなたを賛美します。私たちひとりひとりを愛して下さりありがとうございます。神様に信頼する思いを今週も私たちの心のうちにつくってください。



## 〈ねらい①〉

神の約束に基礎付けられた、信仰者の希望を伝える。

## 〈展開例①〉

「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです」(使徒言行録2:38～39)。

私たちは、イエス様を信じるだけで、罪赦され、永遠の命を与えられます。絶対です。世界中のすべての人が、そんなこと赦さないって言ったって、ひっくり返ることはありません。だって神様が、聖書にはっきりと約束してくださっているからです。私たちの希望は、ただ神様の約束にだけあります。天地が崩れ去るときもありましょう。私たちの弱い心が、神様を信頼できずに揺れ動くこともありましょう。でも神様の約束は絶対に変わりません。

「約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう」(ヘブライ10:23)。

## 〈ねらい②〉

説教展開例に従い、契約を結んでくださった神のへりくだりのありがたさを伝える。

## 〈展開例②〉

先生の子どもの頃は、友だちと何かを約束する時に、「絶対？ 命かける？」と聞くのが流行っていました。今でも言いませんか？ いつもは冗談で、「おう、かけるよ。命かける」って、みんな軽く言っていました。でもある時、一人の友だちがとっても深刻なお話をして、その秘密を守って欲しいとお願いしてきました。そして「絶対？ 命かけてくれる？」と聞くのです。その時は、先生も他の友だちも、「うん、命かける」とは言えませんでした。真剣な約束だったからです。

神様が私たちと結んでくださった約束、つまり「イエス様を信じる者を救う」という約束は、真剣な約束の中でも、一番真剣なものです。僕たちが永遠の救いを得るか、永遠の滅びを味わうかが、この約束にかかっている。こんな大事な約束。「絶対、命かける」なんて簡単には言えません。でも神様は、この約束は絶対だと言われます。それを証明するために、命かけるどころか、一番大切な独り子イエス様の命を私たちに差し出してくださいました。私たちのために、いと高き神様がそこまでしてくださったのです。それほど誠実が込められた約束なのです。

## 〈祈り〉

神様、あなたが命をかけて、救いを約束してくださったことに感謝をします。あなたの約束に、ひたすらより頼んで、いつも恐れず歩むことができますように。





## 〈ねらい〉

契約に込められた神様の愛に感謝する。

## 〈展開例〉

①先週はアブラハムの召命から、神様が私たちを呼び出したのは、私たちを祝福したかったからだと知った。今日は、神様がどれほどに私たちを祝福したいと思われているかについて覚えてい。

Q. 先週から「祝福、祝福」と言っているが、皆は、その意味を知ってるだろうか？ 祝福ってどんな意味？ 「祝福」というのは「神様の愛によって恵みを与えられる」という意味。だから「皆が神様から祝福される」とは「皆が神様の愛によって恵みを与えられる」ということ。

②小さいときから教会に来ている人は、ひょっとしたら「神様は君を愛している」という言葉に慣れっこになっているかもしれない。だけど、本当はこれはあり得ないこと。世界のトップスターがいきなり「君と友だちになりたい。そのために君と友だちになる約束を交わそう」、こんなことを言ってきたら君は戸惑うだろう。神様が君と愛し合う関係を求めているというのは、それよりも遥かにあり得ないこと。

③今日の説教で神様はアブラハムと契約を結んだ、と言われていた（18節）。契約というのは神様が皆のことを大切に、接し続ける、という約束。なんで、神様は皆のことを大切にしようとするのか。理由なんかない。神様が君と一緒に生きていこうと決められたから。ただそれだけ。トップスターと友だちになるには、君がどれだけ願ったとしても相手がやって来なかったら永遠に、相手と知り合いになることはない。嵐やAKB48が君たちと友だちになりたいかどうかは知らないが、神様は人間と一緒に生

きていくことを望まれた。そのためには神様の方から君たちに近づくしかなかった。そして、人間と神様が、そんな途方もない関係を持っているということの証拠として、契約を下された。

④これだけでも、あり得ない話だが、これだけじゃない。神様が君たちと一緒に生きていきたいという思いは、その契約の儀式に、これまたあり得ない形で現わされた（9節～10節。17節朗読）。これは、当時の習慣で「約束を破ったら自分が真っ二つにされても仕方ない」という強い誓いを現わす儀式。神様はこれほどの思いをもって君たちを祝福することを願っている。そして、神様は自分の愛する独り子であるイエス様を犠牲にしてまでも、君たちと一緒に生きて、君たちを祝福することを求められた。君たちが教会で聞き続けている「神様は君を愛している」という言葉は、あり得ない相手のあり得ない歩みよりとあり得ない思いによって成り立っている、あり得ない約束だということに、驚きと感謝を覚えたい。

⑤ただ、神様は君たちを幸せにする仕方にこだわりを持っている。それは、神様が約束し、相手がそれを信じて従うというプロセスを踏むこと（6節）。神様はこういう方法も込みで、君たちと幸せを満喫することを願われている。「神様はその独り子をお与えになったほどに君を愛された。」それは「独り子を信じる君が減びることなく、永遠の命を得るためである」この驚くべき愛の約束を信じて、祝福された一週を求めたい。

## 〈祈り〉

約束をくださり、それを守ってくださる神様。あなたの約束を信じて、あなたの祝福に感謝してあなたと毎日を過ごせますように。アーメン。

テキスト 創世記 19章1～29節

## 〈ソドムに住んだロト〉

アブラハムとロトは別れて暮らすことになり、ロトはヨルダン川流域のよく潤っている低地に住み、天幕をソドムに移していた(13:10～13)。ソドムとゴモラは、ともに死海の南にあったとされるが、現在は海中に没していると思われる。

ソドムの人々は非常に悪徳で主に対して罪を犯していたので、主はこれを滅ぼそうとしておられた。しかし、ソドムに住むロトと一緒に滅ぼされないようにととりなしたアブラハムの願いを主は聞いておられた(18章)。もしソドムに10人の正しい人がいたら町を滅ぼすことはしないと主はアブラハムに約束しておられた。

## 〈ソドムの滅亡とロトの救い〉

18章でアブラハムに現れたのは三人の人であったが、その内の二人(御使い)は先にソドムに向かって(18:22)。町の門の所では、売買や裁判が行われたので(ルツ4:1～4、アモス5:10、詩編127:5)、人々がたむろしやすく、旅人がそこで世を過ごすことは危険であった。ロトは、旅人を危険から救うために見張っていたということも考えられる(ペトロニ2:8参照)。

ロトは、この二人の様子を見て特別な人々であると察知したのかもしれない。二人の御使いを迎え入れたロトのもとに、町の人々がおしかけてきたが、悪徳な人々はこのようなことを常としていたわけで、ロトとのやり取りの中に、ロトが彼らとは一線を画す生活をしていたことが明らかである。しかし、ロトは旅人を助けるために娘を差し出すことさえ提案する(士師記19:24参照)。ロトは正しいと言われるが(ペトロニ2:8)、その行いが完全であったわけではない。窮地に追い込まれていたとしても、これは悪しき提案であっ

た。「一つの悪で他の悪をあがなうことは非難なしではすまされない」(カルヴァンの同箇所注解)。このようなことが家庭に深い傷を残す(19:30以下)。アブラハムとサラについても同様→12, 20章)。御使いたちは、彼女らを守った。

ロトは町からの脱出を迫る御使いの言葉を聞いてもなおためらっていた。ロトは、町が滅ぼされるということを現実的に受け止められなかったのかもしれないが、直ちにこれまでの一切を捨てることを躊躇していた。そのようなロトではあったが、主は彼に憐れみを施された。これはもはやロトの正しさなどによるのではなく、アブラハムを御心に留めて、彼の願いを聞き入れられた主の一方的な憐れみによることであった(29節)。信仰者は時に、主によって手を取られて力づくで今いるところから引き出されることもある。

命がけで逃れよ、山へ逃げよ、という御使いの命令に対しても、ロトはなお、消極的な応答しかないが、主はその願いを聞き入れて近くの町へ逃れることを許された。

## 〈塩の柱〉

ロトの妻は、警告に逆らって後ろを振り向いたので塩の柱になってしまった(26)。主イエスは、世の終わりの時にどのように備えるかを教えるにあたって、この出来事を思い出すようにとお語りになった(ルカ17:32)。

「後ろを振り返ってはいけない」(17)という一言の警告であったが、ロトの妻はそれを重く受け止めていなかった。今日の私たちにとっては、神の国かこの世か、という選択を迫られる時がある。同じく主イエスの警告を心に刻まなければならない(ルカ9:62)。(久保田証一)



テキスト 創世記 19章1～29節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1, 2, 17～21  
ウェストミンスター小教理 問1, 2, 14～20  
ウェストミンスター信仰告白 第33章

### (単元のねらい)

18章16節以下において、主はアブラハムに対して、ソドムとゴモラを罪の故に滅ぼすことを語られました。しかしアブラハムの訴えにより、主は正しい者がいるならば、「その町を滅ぼさない」ことを約束してくださいました。

今回与えられた御言葉では、ソドムの町で行われる主の裁きとロトの家族の救いが語られます。ここにおいて語られていることは、ノアの洪水と共に、終末に行われる最後の審判を指し示すことです。主による罪人の滅ぼしは完全に行われます。子供たちに対して、主の裁きの厳しさを恐れずに語ることが求められます。

しかし同時に、主に従い神の子とされた者は一人残らず救われ、永遠の生命が与えられます。主に従い行く者に与えられる主の愛が、子供たちの耳に届けられることが、主の裁きの厳しさを語る以上に重要なことです。

## 「主の裁きと主の救い」

おはようございます。教会学校では、神さまがアブラハムさんを救ってくださり、多くの恵みをお与えくださる約束が与えられたことを聞いてきました。しかし、「救われるために神さまを信じなさい」と語られるのは、なぜだと思いますか。

神さまを信じなければ、神さまによる裁きによって、すべての人が滅びるからです。

神さまに逆らい、罪を犯し続けていたソドムとゴモラという町がありました。神さまは正しいお方であり、罪を見逃すことができません。そのため、神さまはソドムとゴモラの町をすべて滅ぼすことをアブラハムさんにお語りになりました。アブラハムさんは、「まことにあなたは、正しい者を悪い者と一緒に滅ぼされるのですか」(18:23)と語ります。正しい人が、50人、いや45人、40人、30人、20人、10人しかいなくても、神さまは「滅ぼさない」(18:32)とお語りくださいました。

さて、神さまが滅ぼすと語られたソドムの町に

は、アブラハムさんの甥ロトさんが家族をもって住んでいました。最初、アブラハムさんとロトさんは、一緒にカナンに入ってきていました(12:5)。しかし、アブラハムさんもロトさんも、神さまによって祝福され、多くの財産を手にするようになり、ロトさんはアブラハムさんから別れて、このソドムの町に住んでいたのです。

このソドムの町を、神さまは滅ぼすと語られていたのです。しかし同時に、神さまは「正しい者のために滅ぼすことはない」ことをアブラハムさんに約束してくださっていました。そのため、神さまは、正しい人であるロトさんと家族を救うために、二人の御使いをロトさんのところに遣わされました。

けれども、この時、ソドムの人たちは、よそ者が二人ロトさんのところに来たことを知ると、若者も年寄りもみんなロトさんのところに行き、二人の客人を連れ出し、暴力を振るおうとするのです。まさに、神さまが語っておられたとおり、ソ

ドムの人々は、隣人を殺す（傷つける）罪を犯すのです。だからこそ、神さまはソドムを滅ぼそうとされるのです。

神さまは最初から正しい人たち、つまり神さまを信じている人たちをお救いくださることを約束してくださっていました。だからこそ、御使いたちは、ロトさんとその家族を救うために、主なる神さまによってロトさんのところに遣わされたのです。御使いたちは、ロトさんが家族の人たちを集めて、逃げるように勧めました。

ロトさんは、神さまが遣わされた御使いの言葉を信じました。そしてロトさんは、二人の娘たちが結婚した婿の家に行きます。しかし婿たちは、冗談だと思ったのです。そのため、ロトに従ったのは、ロトさんと、妻と二人の娘たちの四人だけとなりました。

主はさらに「命がけて逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。……さもないと、滅びることになる」(17)と言われました。ロトさんは、小さな町を見つけ、そこへ逃げるにより救ってくださるようにと、主なる神さまに願い(20)、神さまはロトの願いを受け入れてくださいました(21)。ロトさんたちは、一生懸命に逃げました。ロトさんたちは助かりました。

しかし、ソドムとゴモラの町は、自分たちの罪のために、主なる神さまからの裁きとして、硫黄の火が降り、全住民、地の草木にいたるまでもろともに滅ぼされていきます。主なる神さまに例外はありません。主の裁きによって滅ぼされた中には、主から託されたロトの言葉を信じなかった二人の婿たちも含まれています。また、一度は助かっ

たものの、後ろを振り向いてしまったロトの妻も塩の柱となって、一緒に滅ぼされました。ソドムとゴモラの人々に比べて、主の言葉を信じなかった婿たちや、主の命令を守りきることができなかったロトの妻の罪は小さいように、私たちは思ってしまう。しかし、神さまにとっては、犯罪を犯すことも、神さまを信じることなく、神さまの御言葉に聞き従わないことも、同じように大きな罪なのです。だからこそ神さまは、ソドムとゴモラの町を滅ぼされた時、ロトの婿たちも、ロトの妻も滅ぼされたのです。

神さまは、神さまの言葉を信じて、従ったロトとロトの二人の娘たちは救ってくださいました。神さまは正しい人が10人どころか、わずか3人でも救ってくださったのです。

つまり神さまは、正しい人＝神さまを救い主として信じる人は、誰ひとり残らず、罪を赦し、救ってくださいます。しかし、それも、本当ならば、罪の故に神さまによって裁かれるべき私たちを、神さまは救ってくださったのです。行いにおいて、言葉において、心の中で罪を犯し、また神さまを疑ったり、信じなかったりする私たちを救うために、神さまはイエス・キリストをこの世にお送りくださいました。主イエス・キリストが、本当ならば神の裁きにあわなければならぬ私たちに代わって、十字架にお架かりくださったのです。だからこそ、私たちは、罪人でありながらも、神さまを信じることによって、「正しい人」とされ、神さまによって罪が赦され、救われるのです。私たちを愛して、救ってくださった神さま、ありがとうございます。(辻 幸宏)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 3章23, 24節

人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、  
ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、  
神の恵みにより無償で義とされるのです。



## 〈ねらい〉

神さまは正しい方で、悪を滅ぼされるが、たった一家族の正しい者の為に、救いを用意されていることを知る。

## 〈暗唱聖句〉

「わたしは滅ぼさない」。

## 〈展開例〉

- ①「イサクさんが来年生まれますよ」と伝えた神さまと二人の御遣いたちは、アブラムさん連れてソドムという町を見下ろすところにきました。そこはアブラムさんのおいのロトさんが暮らす町です。
- ②そのとき神さまは、アブラムに言われました。「あなたにはすべてを語ろう。ソドムから毎日のように弱い人が泣く声や、貧しい人が悲しむ声が聞こえてくる。今から行って確かめ、本当に悪い町なら滅ぼそうと思う」。そう言われると、二人の御遣いたちはソドムに向かいました。
- ③しかしアブラムさんは、神さまにお願いしました。「神さま、あなたは正しい方です。もしあの町に50人正しい人がいたら赦してくださいませんか。」「分かった。あの町に50人正しい人がいたら、あの町を滅ぼさない」。
- ④アブラムさんは続けて言いました。「神さま、45人ではどうでしょうか。」「分かった。45人いれば、わたしは滅ぼさない」。
- ⑤さらにアブラムさんは続けます。「もしかすると、30人しかいないかもしれません。」「30人いるなら、わたしは滅ぼさない。」「いや、もしかすると20人かもしれません。神さまはやはり赦されて、「その20人のために、わたしは滅ぼさない」と言われます。
- ⑥アブラムさんは最後のお願いをすることにしました。「神さま怒らないで、もう一度だけ言わせてください。では、10人ならどうでしょうか。」「その10人のために、わたしは滅ぼさな

い」。そう言われると、神さまは去って行かれました。アブラムもロトが助けられることを願いながら、自分の家に帰りました。

- ⑦さて、二人の御使いは夕方になってソドムの町に着きました。ロトさんはすぐに気づいて言いました。「今晚はわたしの家にお泊まりください。そして明日の朝早く、町を出発してください。ここは危険です」。ロトさんがどうしても言うので、二人は彼の家に泊まることにしました。
- ⑧しかし、夜になって、町中の男の人がロトさんの家に押しかけてきました。「今夜お前のところに来た連中をここに出せ。痛い目にあわせてやる」。ロトさんは必死になって町の人をなだめようとしますが、ますます乱暴をします。「止めるのなら、お前から痛い目にあわせてやる」。そう叫んで戸口を押し破ろうとしたそのとき、
- ⑨二人の御遣いは、目潰しを食らわして町の人動きを止め、ロトに言いました。「あなたは悪に味方しませんでした。今すぐ、家族で町から逃げなさい。ここは悪い町だから、神さまが今夜滅ぼされます。けっして後ろを振り向いてはけませんよ」。
- ⑩ロトたちの家族は必死になって逃げました。そして近くの小さな町についたとたん、ソドムの町に硫黄の火が降ってきて、町は人も木も草もすべて滅ぼされました。そしてロトの妻は、途中で振り返ったので塩の柱になってしまいました。でも御使いの言うことをロトと二人の娘は、アブラムの願いどおり滅ぼされず救い出されました。

## 〈お祈り〉

神さま。あなたは正しい方で、悪を滅ぼされます。でも滅ぼすことを喜ばれず、アブラムさんの願いを聞き、ロトさんを守ってくださいました。私たちも神さまを信じて、正しくいられますようにお守りください。アーメン。

**〈ねらい〉**

神様は罪を嫌う方であるから、私たちが罪を憎み、神様に従うこどもとなる。

**〈はじめに〉**

日常生活の中で、子どもたちは「ありがとう」「ごめんなさい」がちゃんと言えるようにと、学校でも家庭でも教えられます。神様に対してでもそうです。礼拝の中で「ありがとう」は、賛美であったり、祈りであったり、献金であらわします。「ごめんなさい」は、罪の告白であったり、祈りであったりします。日曜学校の礼拝の中でも子どもたちが神様に対して素直な応答ができるよう促しましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①町のなまえは何ですか。
- ②ソドムの町の門に座っていた人のなまえは何ですか。
- ③二人のお客さんは、この町に何をするために来たのでしょうか。(13節)
- ④神様はロトに何と言われましたか。(17節)

**〈展開例〉**

アブラハムさんと奥さんのサラさんは、すっかりおじいさんとおばあさんになってしまいました。神様がアブラハムさんになされた約束を覚えてますか。子どもをたくさん与えますよというお約束でしたね。そのお約束が本当になることを告げる三人のお客さんがアブラハムさんの所に来

て、「子どもがもうすぐ生まれますよ」と言われました。そして、そのお客さんはこれから「ソドムの町」を滅ぼしに行くと言いました。アブラハムさんはとても心配しました。そこには、最初一緒に神様の約束の地を目指して旅に出たロトさんとその家族が住んでいたからです。ソドムの町は、神様のことを信じない人々、神様のいうことに従わない人々がたくさんいて、悲しい町になっていたのです。

アブラハムさんは、神様にロトさんとその家族を助けてくださいと一生懸命お願いしました。そしてある日、天使がロトさんの前に現れて、すぐにこのソドムの町から離れなさいと言いました。ロトさんもその家族もためらいましたが、町を出て行くことにしました。その時、絶対に後ろを振り返ってはいけなと言われてきました。怖い気持ち、どうなってしまうんだろうという不安な気持ち、急がなくちゃという焦る気持ち、いろんな気持ちがあったでしょう。でもひたすら前だけを向いて、逃げなくてはいけなかったんです。

でも一人、後ろを振り向いてしまった人がいたんですね。ロトさんの奥さんでした。ロトの奥さんは塩の柱になってしまいました。神様のことを信じない町ソドムとゴモラは空から火が降ってきて全部なくなってしまいました。

神様はアブラハムさんの願いを聞いてくださり、ロトさんとその子どもたちを助けてくださいました。

**〈お祈り〉**

神様を信じる私たちを、神様から離れてしまう罪からいつもお守りください。



**〈ねらい〉**

正しくない者を裁かれる神への恐れと、その正しくない者をなお愛し、救いに入れてくださる神の愛の深さを伝え、「正しい人」イエスに従うことへと促す。

**〈展開例〉**

「では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。次のように書いてあるとおりです。『正しい者はいない。一人もない。悟る者もなく、／神を探し求める者もない。皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もない。彼らののどは開いた墓のようであり、／彼らは舌で人を欺き、／その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、その道には破壊と悲惨がある。彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への畏れがない』」（ローマの信徒への手紙3:9～18）。

ソドムの町に10人でも正しい人があるなら滅ぼしはしないと、神様は約束してくださいましたね。でも本当は、神様は知っておられるのです。正しい人間なんて一人もないということ。ソドムの町の人たちの邪悪さを聞きましたね。ロトさんはその中で、神様の言葉を信じたという点でだけ正しい人だったと聞きました。でもそのロトさんも、娘さんを差し出そうとするような間違った心を持っています。神様の前では、まったく不合格な正しくない罪人です。そんなソドムの人間の罪を、神様は決して見逃すことができずに滅ぼされました。

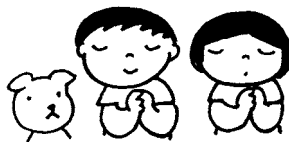
私たちもソドムの人々と同じように、永遠の滅びに定められていた者たちです。みんなの心にも、同じ邪悪がある。弱い人をみんなでよってたかっていじめて、なぶり殺しにして、気分をスカッとさせよう……あなたの中にもそんな思いがあることを神様は知っておられる。でもそんな邪悪な、正しくない私たちなのに、神様は愛してくださるのです。神様の敵である私たちのために、神はイエス様という救い主を与えてくださって、身代わりの犠牲にしてくださいました。

イエス様は、ただひとり完全に正しい人でした。ソドムの人間とは違う、愛に満ちた人でした。その正しい人が、正しくない私たちのために死んでくださいました。ソドムに10人の正しい人がいるなら……と言ってくくださった神様は、今やこのたった一人の正しい人であるイエス様がいてくださるから、邪悪な私たちを赦してくださいます。滅ぼさないと言ってくださいます。たった一人の正しい人であるイエス様が、私たちの間違いを全部帳消しにしてくださいまして、神様と仲直りさせてくださったからです。

そのイエス様が、今度は私たちをイエス様に似た「正しい人」にしようと、私たちの内に生きてくださいます。イエス様のようになりたくないと願い始めるならば、イエス様はこの正しくない私たちを、正しい人に必ず造り変えていってくださいます。

**〈祈り〉**

神様、ソドムの人たちと同じような正しくない私たちです。どうか、イエス様のあがないのゆえに、罪を赦してください。滅ぼさないでください。そして私たちも、正しい人であるイエス様に似る者としてください。邪悪と戦わせてください。



## 〈ねらい〉

ロトを救う神の導きと、裁きの厳肅さを覚える。

## 〈展開例〉

①今日はアブラハムの時代の神様の裁きの話。悪に染まった町、ソドムとゴモラの腐敗に神様は目を留められた。アブラハムはこの町に住む甥のロトのこと、また、その土地の人々のために「神様に正しい者が少数でもいるならば、その町の裁きを見送って頂けないか」と願う。神様はこれを聞き入れ「10人の信仰者がいればこの町を滅ぼさない」と約束され、御使いを町へと送り出した。結果、この町には10人すら信仰者はおらず、町は滅ぼされる。だが、神様はアブラハムの執り成しを聞かれ、この町に住むロト一家を救われた。しかし、娘の婿たちと、ロトの妻は御使いの忠告に従わずに破滅する。

②今日の話には様々な人たちが出てくる。特にロトという人は皆も共感するところの多い人ではないかと思う。まず、ロトという人は本当の神様を知りながらも、アブラハムと一緒に居続けようとはせず、道徳の乱れた悪の町に惹かれながらも、悪人になりきることもできない、そんな優柔不断な信仰者であった。皆の生きる現代も似たようなところはないか？ ソドムという町は、それぞれが欲望のままに生きる町だった。皆は、頭では善いこと悪いことを知りながら、どこかで悪いことに惹かれる、こんな思いを抱くことはないか？ 悪いことを平然と楽しむ人たちにどこかで惹かれていることはないだろうか？

③神様はこの優柔不断なロトを滅びの未来から救出された。迫る裁きを前にして、ロトには御使いの言葉に従う信仰が与えられた。

Q. 皆はどうだろうか？ 君たちもまた様々な目に惹く悪の文化のただ中で生きている。人の欲

望が弱者を虐げる世界は君たちから遠くない。神様はやがてこの世界を裁かれるという。君はこの神様の言葉を信じることができるだろうか？

④御使いはロトに身内を連れ出すための猶予を与える。しかし、ロトの説得は全ての身内に聞かれたわけではなかった。欲望の町に暮らすロトの婿にとって神様がこの町を滅ぼすなどということはまったくの絵空事、冗談以外の何ものでもなかった。「『神様はこの世界をやがて裁かれるが、神様の言葉を信じるならば救われる』。そんなことを言ったところで真面目に取り扱う人はいないんじゃないか？」皆もこんな思いを覚えたことはないだろうか？ 確かにロトの婿たちは信じることができなかった。しかし、娘たちはロトと共に滅びの町から救い出された。

⑤滅ぼされて当然の悪の世界であっても、神様はアブラハムの執り成しを聞かれ、ためらうロトの手をとりながら、神様の言葉に聞き従うとする人々を救われた。ギリギリの信仰者であっても、神様の命令を聞こうとして悩むロトを神様は見捨てられない。同じ神様が、君たちの心を見つめておられる。神様から与えられている命は責任を伴う命である。ロトの婿たちは彼らの責任で、救いへの招きを拒絶した。誘惑の多いこの世界で、どれだけそれが眩く見えても、神様に従うことに葛藤することを忘れないでほしい。

## 〈祈り〉

欠けの多いロトを導き救われる神様。同じように私たちをも救ってください。そしてアブラハムのように、救って頂きたい人たちが私たちにもいます。どうか、あなたが破滅から救い出してくださいますように。アーメン。



テキスト 創世記 21章1節～8節

**〈サラの信仰〉**

「イサクが生まれたとき、アブラハムは100歳であった」(5)。

このとき、妻のサラは90歳でした(17:17)。二人とも高齢であったにも関わらず、子供が与えられたことが強調されています。誰もが信じられない出来事でした。そして、サラも神の約束を聞いて、嘲笑しました(18:12)。このとき、サラは、自分の目で判断し、神の力を侮っていました。けれども、それが実際にアブラハムとサラの間に子が与えられることにおいて、この嘲笑は、6節以降の心からの喜びの「笑い(イサク)」へと変化します。

「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い(イサク)を共にしてくれるでしょう」(6)。

後半の新共同訳を見ると、「聞く者は皆、わたしと笑いを共にしてくれるでしょう」と、一緒になって共にイサクの誕生と成長を祝うように訳されています。しかし、後半の部分を直訳すると、「聞く者は誰でもわたしのために笑うでしょう」となります。また同時に、「イサクは、わたしのもの」といった含みもあります。つまり、誰が私たちの老齢出産を嘲笑しようと、「イサクはわが子である」という意味が含まれており、サラ自身の、この子をどんなことがあっても育てるといった覚悟が暗示されているということになります。

アブラハムにお告げがあったとき(18:1～15)、サラ自身、神の力を疑い、一瞬、信じようとしませんでした。これが嘲りの笑いでありました。けれども、今や神の約束が目に見える形となって、

喜びの笑いとなりました。ここでは、嘲りの笑い と喜びの笑いが対比されていることに気がきます。おそらく、サラは、その事実をよく知った上で、「今、周囲から嘲笑を受けようとも、それはかまわない」といった覚悟を示したのでしょう。また、その中には主に対する悔い改めの思いがあったと思われます。悔いて、改めてサラの心からの喜びが言い表されているのではないのでしょうか。周囲から来る逆境を乗り越えて子を育てていく信仰が言い表されていると思われます。

**〈主の約束とその祝福〉**

しかし、ここで聖書がとくに強調しているのは、1,2節です。「主は、約束されたとおりサラを顧み、……神が約束されていた時期であった」です。

アブラハムの神である主が、アブラハムとサラを憐れんだ。その憐れみ方は、「神が約束したとおりに」でした。ここでは、主の主権性と恩寵性が述べられています。また、ここでの「時期」とは、「時機(機会、チャンス)」という風に言ってもよいかもしれません。そこから、私たちの信じる神は、勝手気ままな憐れみをなさるお方ではなく、その人にとって一番よい仕方で憐れまれる主なる神であるということを私たちに教えているのではないのでしょうか。その中で、イサクが誕生したのです。アブラハムとサラは高齢であったが、イサクがこのときに誕生したのは、アブラハムとサラにとって一番よい時機であったということ。そのような祝福を与えてくださる主なる神を私たちは信じるのです。(潮田 祐)



テキスト 創世記 21章1節～8節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問1

### 〔単元のねらい〕

「あなたは多くの国民の父となる」という約束と「男子は割礼を受けよ」という契約を神から告げられたアブラハムは、「百歳の男に子供が生まれるだろうか、九十歳の妻に子供が産めるだろうか」と笑った。神はその事実を覚え、約束によって生まれる男子を「イツハク（彼は笑う）」と名付けるよう命じられた（創世記17章）。人の不可能を可能になさる神は、苦笑（嘲笑）に支配された者のために笑いを造られる。しもべの不信仰と主の真実を知らされる笑みである。

## 「笑いを造りだす神さま」

笑いがとまらない。顔いっぱい笑みをたたえる。あなたとわたしが、お互いにはほほ笑みをかわす。そんな毎日だったら、そんなおうちだったら、そんな学校だったら、どんなに幸せでしょう。腹の底から笑いがわきあがってきて、頭でとめようと思っても、どうしてもとめられない。喜びをかくしておくことができなくて、目尻がさがり、口元がほころび、鼻歌まで出てきてしまう。嬉しさを分かちあいたくて、ほほ笑んでくれる誰かをさがしている。ありがたいの気持ちをつたえたくて、ところからのことばをその人にとどけようとする。そんな自分を、そんな相手を、とても大切におもえる。そんな温かいあいだを、親しいまじわりを、お互いに敬うきもちを、かけがえのないものに感じる。それは……自分の内側に、そして相手の内側にも、なくなることはない尊い思いがあるからです。生きたまじわりを生みだす、ほんものの笑いがあるからです。

それが無いのは、本当にさびしいものです。なんとか笑いを造りだそうとします。自分の内側はからっぽなのに、外側を笑いでかざろうとする。自分は幸せなのだと思わせるために、誰かの不幸せを見つけだして、うす笑いを浮かべる。自分は賢いのだと自分をあざむくために、誰かのことをばかにして、あざ笑う。自分は偉いのだと自分をつくりあげるために、誰かのことを見下げて、鼻で笑う。そんなことをしている自分に気が

ついて、にが笑いする。そんな毎日になっていませんか。そんなお家や学校になっていませんか。もしもそうだとしたら、今日の聖書のおはなしをよく聴いてください。神さまがほんものの笑いをくださるでしょう。

「アブラムよ、あなたは生まれ育った土地を去りなさい。父の家を離れなさい。わたしが示す土地へ行きなさい。わたしはあなたを祝福して、大いなる国民とする」。そう仰せになった神さまの言葉に従って旅立ったとき、アブラムは75歳でした。「恐れるな、アブラムよ。天を仰いで星を数えてみるがよい。あなたの子孫はこのようになる」。そう仰せになった神さまの約束をアブラムは信じましたが、その時まで、彼には子供がいませんでした。神さまの示された土地に入っても、アブラムの妻サライには子供が生まれず、年月は過ぎてゆきました。

そんなある日のこと。「アブラムよ、わたしは全き神である。あなたはわたしに従って、全き人になりなさい。あなたはアブラムではなく、アブラムと名乗りなさい。あなたを多くの国民の父とする。あなたの妻をサライではなく、サラと呼びなさい。わたしは彼女を祝福し、彼女によってあなたに男の子を与えよう。彼女はもろもろの国民の母となる」。そう仰せになった神さまの前に、アブラムはひれ伏しました。ところがこのときに、彼は笑ったのです。心のなかでつぶやいたの

です。「100歳の男に子供が生まれるだろうか。90歳のサラに子供が産めるだろうか。ツァハーク！これが笑わずにいられようか」。アブラハムのすがたは、神さまを信じて従う姿勢でした。しかし彼のこころは、神さまのお言葉を笑っていたのです。この笑いは、戸惑いの笑いでした、疑いの笑いでした、嘲りの笑いでありました。神さまはアブラハムのすがただけでなく、こころを見ておられ、こう仰せになります。「あなたの妻サラは、あなたとの間に男の子を産む。その子をイツァハーク（彼は笑う）と名づけなさい」。アブラハムが笑ったことを、神さまは見抜かれました。そして彼自身そのことを、これからもずっと忘れないようにと、神の約束の子の名をイサク（笑い）とお定めになったのでした。

ほどなくして、ある暑い日のお昼のこと。三人の客人がアブラハムの家を訪れます。彼らが神のみ使いとはつゆ知らず、アブラハムとサラは客人をもてなします。すると彼らはこう告げるのです。「来年の今ごろ、あなたの妻サラに男の子が生まれているでしょう」。それを耳にしたサラは、客人の顔を避け、ひそかに笑います。「夫はすっかり老人になってしまいました。私もとっくに子供を産める望みはなくなってしまいました。ツァハーク！笑うしかありません」。この笑いは、悲しい笑いです、あきらめの笑いです、絶望の笑いなのです。するとそのとき、彼らは言うのです。「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずはないと思ったのか。主なる神にできないことがあるか」。サラが笑ったことを、神のみ使いは見抜きました。しかし彼女を叱るのではなく、その悲しみを受け留めてくれたのです。神にできないことはないのだと励ましてくれたのです。

神さまは、アブラハムに約束なされた通り、彼の妻サラをみこころに留められました。人間には絶対できないことを、主は成し遂げてくださいました。90歳のサラがお腹に子を宿し、100歳のア

ブラハムに男の子を産んだのです。それは、あの三人の客人、神のみ使いたちが訪れた日から、ちょうど一年後のことでした。

アブラハムは、サラの産んだ男の子をイサク（彼は笑う）と名づけました。名づけ親は、神さまでした。一年前、神さまのお言葉を笑ってしまったことを思い起こして、アブラハムは胸が痛んだでしょう。その痛みとともに、腹の底から笑いがこみ上げてきて、嬉しくてしかたがありませんでした。自分の力で得たのではなく、ただ神さまの約束と祝福によって生まれた、その子を自分の子供として与えられたからです。サラは言いました。「神さまは私のために、笑いを造りだしてくださった（イサクを与えてくださった）。そう聞く人は笑うでしょう（イサクをとともにしてくれるでしょう）。」

神さまの祝福とは、こういうことなのです。人間が自分の能力で子供を得ること、そのことが祝福なのではありません。そうではなくて、人間にはどうして不可能なことを、神さまが可能としてくださる、これこそ祝福なのです。あるいは、しもべが自分の行いによって主のお約束を実現すること、そのことが祝福なのではありません。そうではなくて、もはや神の約束を信じるほかに道はない、しかしそう信じることさえ笑ってしまうほど難しく悲しい、そんなしもべを主が憐れんでくださる、赦してくださる、顧みてくださる、これこそ祝福なのです。

アブラハムとサラを祝福してくださった神さまは、今ここにいてあなたを祝福してくださいます。十字架で死んだイエスさまを復活させた神を信じるなら、あなたもアブラハムの子供となる。この約束を神さまが成し遂げてくださるのです。から笑い、うす笑い、あざ笑い、にが笑い。そんな笑いに縛られているあなたに、アブラハムの神さまは、ほんものの笑いを造りだしてくださいます。あなたを「イツァハーク＝笑い」と名づけてくださるのです。 (二宮 創)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 9章8節

肉による子供が神の子供なのではなく、  
約束に従って生まれる子供が、子孫と見なされるのです。

---

## 〈ねらい〉

自分の力ではなく、神さまにはできないことはないことを、イサクの誕生物語から知る。

## 〈暗唱聖句〉

「神さまにはできないことはない」。

## 〈展開例〉

- ①みんなは神さまがアブラムさんにしてくださったお約束のことを覚えていますか？ 空のたくさんの星を見ながら、「あなたの子孫をこの星のようにたくさんにする」とお約束してくださったのだったね。でもその約束はなかなかかなえられず、アブラムさんは99歳のおじいさんに、サラさんも89歳のおばあさんになっていました。
- ②神さまのお約束のことも半分忘れかけていたころ、神さまはアブラムさんに現れて言われました。「あなたとサラの間に男の子を与えよう」
- ③しかし、アブラムさんは思いました。「もうすぐわたしは100歳に、サラは90歳になろうと言うのに、そんなことあるわけじゃないですか。わたしにはそんな力はありませんよ」。アブラムさんは呆れて、ふっと笑いました。
- ④しかし、神さまは言われました。「わたしの約束は必ず実現します。あなたとサラとの間に生まれた男の子にイサクと名付けなさい」。そう言われると、天に昇って行かれました。
- ⑤「本当にそんなことがあるのかな。でも神さまが約束してくださるのなら、神さまにはできないことはない。そう信じよう」。アブラムさんはそう固く決心しました。

⑥しばらくたって、三人の人がアブラムさんを訪ねました。神さまと二人の御使いでした。彼らのひとりが、「奥さんのサラはどこにいますか。来年の今頃、サラに男の子が産まれているでしょう」と言いました。

⑦サラはそれを聞くと、「もうすぐわたしは90歳に、アブラムは100歳になろうと言うのに、そんなことあるわけじゃないじゃないですか。わたしにはそんな力はありませんよ」。サラさんも呆れて、ふっと笑いました。

⑧それを見た神さまは言われました。「あなたが今笑ったのは、自分にはできないと思ったからでしょう。でも、神さまにはできないことはありません。来年の今頃、確かに男の子が産まれます」。サラは自分が神さまの約束を信じないで笑ったことが恐ろしくなりました。

⑨それから一年が経って神さまの約束された時期に、サラに男の子が生まれました。神様の言いつけどおりに、アブラムさんは、その子を「イサク」と名付けました。

⑩サラは思いました。私は神さまの言われることを信じないで笑ったのに、神さまは私に笑いをお与えくださった。神さまにはできないことはない。みんないっしょに喜び、笑おう。

## 〈お祈り〉

アブラムさんとサラさんにイサクを与えてくださった神さま。あなたにはできないことはありません。わたしたちも自分の力では、神さまを正しく信じることはできませんが、神さまが私たちを信じることができるようにしてください。アーメン。

**〈ねらい〉**

神様は必ず約束を守られるお方であること信じる。神様の祝福について考える。

**〈はじめに〉**

いよいよ夏休みが始まりました。子どもたちが分級のお部屋に入ってくる顔も違うのではないのでしょうか。この夏の子どものスケジュールが守られ、全ての危険から一人ひとりが守られて元気に過ごすことが出来るよう祈りましょう。子どもたち同志もお互いに誘いあって日曜学校来ることが出来ますように、励ましましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ① アブラハムさんとサラさんに生まれた赤ちゃんの名前は何かですか。
- ② イサクさんが生まれたとき、アブラハムさんは何歳でしたか。
- ③ サラさんは、神様はサラさんに何をとお与えになったと言いましたか。

**〈展開例〉**

先週は、神様に従わない人たちを滅ぼしてしまうという、悲しいお話でしたが、今日は、明るいお話ですね。神様のアブラハムさんとサラさんに「子どもを与えるという」お約束は本当でした。なんと、アブラハムさんは100歳、そしてサラさんは90歳というおじいさんとおばあさんになってから、このお約束が実現しました。

アブラハムさんとサラさんはどんな気持ちで

ずっとずっとこのお約束を待っていたと思いますか。待ちくたびれたり、もうダメかもしれないと思ったり、神様の方法ではなくて自分たちでこうしたらいいかも？ と一生懸命考えたり、もう忘れようと思ったことが何度あったでしょう。でも、神様はこのお約束を忘れていなかったんです。忘れていないどころか、神様は「この時に」と神様のご計画がちゃんとあったのですね。私たちは、まだ見えないことやどんなに考えてもありえないことを信じることは難しいけれど、必ず神様はどんなときにもお約束は守られる方なのです。

生まれた赤ちゃんの名前はイサクさんでした。アブラハムさんもサラさんも赤ちゃんが生まれることを聞かされたとき、そんなことがあるのでしょうか？と思わず笑ってしまいました。イサクさんの名前の意味は「笑い」ですね。

私たちはどんな時に笑いますか？ うれしい時、おかしい時、照れ笑い、苦笑い、いろんな時にみんなの顔はいろんな顔に変わります。神様を心から信じて、神様に従っていくとき、悲しい時も、苦しい時も神様は私たちに笑顔をくださいます。私たちには分からないけど、神様は全てご存知で、この神様について行こうと決心した時、私たちのお顔はきっと明るいと思います。神様の祝福を信じて歩める私たちは何と幸いです。

**〈お祈り〉**

神様、今日も神様の祝福を私たちにくださってありがとうございます。神様の祝福をいただいて、今日から始まる一週間も笑顔で過ごすことが出来ますように。



**〈ねらい〉**

「不信仰の父」でありながら、やはり「信仰の父」であったアブラハムの信仰にならう。

**〈展開例〉**

アブラハムさんは「信仰の父」と呼ばれました。「神様を信じる」とはどういうことであるか知りたいなら、この信仰の父を見ればいいのです。でもアブラハムさんはずっとずっと神様を、ぶれることなく信じ続けることができたのかというとそんなことはありません。私たちと同じように、神様を信じるのできない弱さも持っていました。いくら神様でも、そんなこと不可能だ……と言ってしまう不信仰を抱えていました。

創世記17章17節。開いてください、旧約22ページ。「アブラハムはひれ伏した。しかし笑って、ひそかに言った。『百歳の男に子どもが生まれるだろうか。九十歳のサラに子どもが産めるだろうか』」。

アブラハムは神から星の数ほどの子孫を祝福されるという約束を与えられていました。でも次第に年を取り百歳を超えました。でも神はこのような現実にもかかわらず、アブラハムにむかって、前とまったく同じ約束を繰り返されるのです。それを聞いて思わずアブラハムは笑ったのです。相手の言うことを「笑う」、これほど失礼なこともないでしょう。絶望しきって「そんなこと信じられるわけがない」ってあきれてるのですから。神様に対する最も失礼な態度です。神様は、命をかけて約束してくださっているのに、笑ってるのですから。神様への暴言や文句よりも、もっとものすごいものが、この笑いです。

そんなアブラハムさん。「信仰の父」というよ

りも、「不信仰の父」のようですね。でも神様は、そんなアブラハムを祝福してくださいました。そしてアブラハムは、そんな神様にすべてをお任せして歩きました。子どもを与えてくださるといふ神の約束など、もうとても信じられない。これまで神様の言葉をよく聞いて生きてきたけど、全部無駄だったじゃないかとやけくそになってしまってもおかしくない。でも彼は、決して後ろを向かなかった。神様から離れようとはしませんでした。私たちと同じように、信じきれない心を抱えながらも、でもそんな自分のままで、神様と共に歩み続けた。そんなアブラハムだからこそ、「信仰の父」と呼ばれるのです。

ローマ4章18節に、このアブラハムのことが書かれています。「彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、『あなたの子孫はこのようになる』と言われていたとおりに、多くの民の父となりました」。望むことができないのに、なおも望みつつ信じた。それがアブラハムの信仰です。色んな困難や苦しみの中で、「そんな不可能だ」と思わず言ってしまうことはあるさ。でもそんな時も、なおイエス様を見上げ、神様の愛を信じて生きる。そんな私たちに、神様はアブラハムと同じような祝福を満たしてくださいます。心からの「笑い」を与えてくださいます。

**〈祈り〉**

神様、あなたの真剣な約束を笑ってしまうような、私たちの不信仰を赦してください。どんな時も、神様とともに生きることができるようしてください。どうか、弱い私たちを祝福してください。



## 〈ねらい〉

不思議な神様の約束への嘲笑を、喜びの笑いに  
変えてくださる神様に感謝する。

## 〈展開例〉

Q. みんなは聖書の約束の中で「それは無理だろ  
う」とか「それはあり得ないなあ」と思うこと  
はないか？ 慣れ親しんでる言葉かもしれない  
が「神様が君に永遠の命をくれる」とか「君の  
人生はイエス様によって光輝く」とか、冷静に  
考えればあり得ない約束を君たちは聞き続けて  
来たことと思う。皆は中学生。人によりけりだ  
が、小さな頃から聞かされ続けてきたことに疑  
問が湧き出すのも自然な年頃。神様が聖書でな  
されることは、驚くことが多い。これを素直に  
「おお！ 神様すげえ！」と驚くか、「ええ?! そ  
れはないだろう？」と驚くかで、神様へ向ける  
気持ちはまったく違ったものになる。

① 今日の話では「ええ?! それはないだろう？」  
と神様の約束をどこか小馬鹿にしたアブラハム  
と妻サラの姿が記されている。冷静に考えれば  
アブラハムの思いはもっとも。もし君たちが「来  
年の今頃、あなたの身長は絶対に50cm伸びる」、  
こんな約束をされても、信じられないのが普通。  
成長期なら可能性はゼロじゃない。でも、ア  
ブラハムが約束されたのは、それよりあり得ない  
話。100歳と90歳の夫婦に子どもが与えられる。  
そりゃ、当然、鼻で笑いたくもなる。

② しかし、これはどんなことでも実現する力のある  
神様からすれば失礼な話。神様は、人間が自  
分の力では諦めるしかないほどの喜びを与えよ  
うとしているのに、恵みの受け取り手である当  
の本人が本気で相手をしていない。

③ もし、君たちに何か聖書の約束への疑いがある  
のだとしたら、それはこの時のアブラハムと似  
ているかもしれない。神様の方は君の人生が一  
番輝くように準備万端整えて、手ぐすね引いて  
君を幸せにしようとしている。それなのに幸せ  
をもらうはずの君が神様の約束を本気になって  
聞かないなら、こんな失礼なことはないだろう。

④ だが、神様の凄いところは、人間が信じること  
のできない、笑うしかない冗談みたいな約束を  
実現してくださるところ。神様は嘲笑うアブラ  
ハムに、子どもの名前は「彼は笑う」としなさい、  
と言われた。神様の本気を突きつけられてア  
ブラハムの乾いた笑いは一気に凍りついた  
かもしれない。少なくともサラは恐ろしくな  
った。神様の約束を小馬鹿にして笑う心を神様は  
見逃さない。「冗談かどうか、あなたに思い知  
らせてあげよう」。神様はまったくの本気で君  
にも同じように言われるに違いない。もし、全  
能の神様が君にこう言っているとしたら、君の  
笑いもサラと同じように恐れのもとに凍りつか  
ないだろうか。サラは、すっとボケる形でだが、  
確かにその後の態度を改め、神様の言葉を真剣  
に受け止めた。

⑤ 嘲笑は、神様の言葉にかき消され、神様の言葉  
を真剣に受けたサラに待っていたのは喜びの笑  
いだった。君の嘲りの笑いも神様は叱られる。  
それは、神様が真剣に君に喜びを授けようと  
しているから。この神様の本気をいつでも真剣に  
受け止めて感謝できるようあって欲しい。

## 〈祈り〉

私たちの疑いを確信と喜びへと変えてくださる  
神様。その真剣さに感謝します。私たちもあなた  
に対して真剣に応えられますように。アーメン。



### 〈アブラハムの信仰は敬虔さからくる〉

この物語は、アブラハムが息子であるイサクを神に献げるが、主がそれを止めて、主を礼拝したという物語です。1節、「神はアブラハムを試された」という出だしによって、聖書は、この物語が、アブラハムの「試練」であることをあらかじめ私たちに明記しています。

試練とは、人の心の中の隠れたものが何であるかを調べるために試すことであり、苦難や迫害によって人を練りきよめること（詩編26:2など）でもあります。そのため、試練は、信仰の成長において必要不可欠なものであり、驚き怪しむべきではなく（ペトロ4:12）、この上もない喜びであり、幸いである（ヤコブ1:2,12）ことを覚えるべきです。また、その根拠として、試練について、神が耐えられないような試練にはあわせることはない（コリント10:13）とも述べられています（『新聖書辞典』、いのちのことば社、「試練」の項目を参照）。

6節を見ますと、アブラハムは、火と刃物という危険なものはイサクに持たせず、自ら持って行きます。このような、アブラハムの父としての配慮の気持ちとそれらを使ってイサクを生け贄にしなければならぬ気持ち、その複雑な思いが描かれています。さらに「二人は一緒に歩いて行った」という表現によって、その緊張が高められています。7、8節では、親子の対話が書かれていて、その間の6、8節で「二人は一緒に歩いて行った」ということで、沈黙から対話へ、そしてまた沈黙へと、心理的緊張感が高められていることが分かります。

その緊張感の中で、11、12節、天から主の御使いが現われ、「その子に手を出すな。……あなたが神を畏れる者であることが、今、分かったからだ」という声が聞こえてきます。「今、分かった」とは、神が分からないでおられ、試して分かった

という意味ではなく、神は知っておられたが、それが明らかになった、証明されたということ、そして「神を畏れる者」としてのアブラハムの敬虔さが現れた、という意味です。つまり、単に神の存在のみを畏れているということだけではなく、礼拝や律法などを守って神を畏れているという、積極的な畏れを意味しています。この信仰の敬虔の現われを聖書は私たちに示し、メッセージとして伝えていきます。

### 〈我らの主なる神は必要なものを

#### 備えてくださる主である〉

アブラハムの「焼き尽くす献げ物の小羊は、きつと神が備えてくださる」（8）という言葉に対して、主なる神は、それに応えて「ヤーウェ・イルエ（主は備えてくださる）」とされました。必ず私たちに相応しい形で備えてくださる全能の神であることがここで明らかにされています。そして、「今日でも『主の山に、備えあり（イエラエ）』と言っている」と語って、ここが後にエルサレム神殿が建てられた場所（歴代下3:1）であることを暗示しています。

ここではアブラハムが敬虔であったから主が備えてくださったというように結果的にはなっていますが、主がアブラハムになされた、アブラハムに与えられたという神の主権性がたたえられているように思われます。

アブラハムが敬虔であったから主が備えたという相互互惠ではなく、またここではアブラハムが主語ではなく、主なる神が主語であり、その中で、アブラハムを神が憐れんだ、という主権性を聖書は私たちに伝えていきます。しかもその神の主権性は、すべての人にとって益となるような主権性であるということを信じることを教えているので

（潮田 祐）



テキスト 創世記 22章1～19節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問4

### 〔単元のねらい〕

主の真実はしもべに信仰を要求する。神の約束によって生まれた男子は、アブラハムとの契約が真実であることの証しであった。契約の恵みに与かるアブラハムは、神の御心に従うことを徹底して求められる。神の御前に罪ある人間は死ななければならない。その人間を生かすために、神は代償の死を人知れず備えておられる。神の備えを予め知らされないまま、その日その時に示される神の御意志に、ひたすらに従ってゆく。信仰はそのように鍛えられ、練られる。

## 「信仰を鍛練する天の父」

お誕生日おめでとう。そんなあたたかい言葉を、いちばんはじめにかけてくれたのは、やはりお母さん、そしてお父さんでしょう。あなたがこの世に生まれ得るためなら、どんな苦しみや痛みもおそれない。あなたが神さまと人々から愛される人になるためなら、どんな犠牲をはらってもかまわない、自らの命をさしだしてもおしくない。そんな、けだかい心によって、あなたは生まれたのです。そして育つのです。

命をもらい、お乳をもらい、食べ物をもらう。生きてゆくために、要るものは与えられ、要らないものは取りさらされる。求めなくても与えられる恵みがあり、求めても与えられない恵みもある。愛されるために、しなければならぬことを教えられ、してはならないことを諭される。しなければならぬことをせず、してはならないことをして、叱られることがあり、懲らしめられることもある。こんなふうにして、あなたは養われ、育てられているのです。

ときどき、欲しいものをなかなか与えられなくて悲しくなったり、欲しくないものをいきなり与えられて困ってしまったり。したいことがいっこうに許されなくてウズウズしたり、したくないことをむりやりさせられてイライラしたり。そんなとき、わたしは愛されているのだろうか。お父さん、お母さんは、わたしを愛しているのだろうか。そんなふうには、考えこんでしまうこともあります

ね。そんなときこそ、今日の聖書のみことばに耳をかたむけてください。あなたを養い育てるために、お父さんとお母さんを定めてくださった、神さまのみこころを知ることが大切です。あなたの親は、神さまのみこころを行う責任があるからです。

アブラムが99歳のとき、主が現れてこう仰せになりました。「わたしはまったき神である。あなたはわたしに従って、まったき人になりなさい。あなたはもはや、アブラムではなく、アブラハムと名のりなさい。あなたを多くのくにたみの父とするからである。わたしは、あなたとの間に、そしてあなたの後を継ぐ子たち孫たちとの間に、永遠の契約を立てる。わたしは、あなたとあなたの子孫との神となる。あなたがいま旅をしているカナンの土地のすべてを、あなたとあなたの子孫に、永久の住みかとして与える。このように、わたしの恵みは確かなのだから、わたしの契約を守りなさい。あなたとあなたの子孫、そして共に暮らす人々について、男子はすべて割礼を受けなさい。それによって、わたしの契約は、あなたの体に記されて、永遠の契約となる」。

この約束を聞いたアブラハムは、すでに年老いていて、子供はひとりもありませんでした。しかし神さまは、御自分の約束を果たし、アブラハムに恵みを与えてくださいました。人間にはどうしてできないことを、神さまはなしとげてくださっ

たのです。アブラハムが100歳のとき、90歳の妻サラは身ごもって、男の子を産んだのです。その子は、人間のちからで生まれた子ではなく、神さまの約束によって生まれた子でした。神さまはその子に、「イツァハーク（彼は笑う）」と名づけます。アブラハムもサラも、神さまの途方もない約束を聞かされて、思わず心のなかで笑ってしまったからです。神さまのみこころは、人間には計り知れないほどに恵みふかく、どうてい信じられないほどに力づよいものなのです。

しばらくして、神さまは再び語りだされます。「アブラハムよ」。その声は、よく聞き覚えのある神さまの声、紛れもない主の呼びかけです。今度はどんな恵みを与えてくださるのだろう。そんな期待に胸をふくらませて、アブラハムは返事をします。「はい!」。すると、主なる神さまは、こう仰せになるのです。「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れてモリヤの地へ行きなさい。わたしが命じる山に登り、わたしを礼拝するために、その子を生け贄としてささげなさい。イサクをあなたの手で殺し、焼き尽くして、その命をわたしにささげなさい」。

信じられないみことばです。アブラハムは息をのんで、何も言えなくなって、考えこんでしまいます。「なぜだ?」。そのひとことが、彼の頭のなかを駆けめぐります。「いやだ!」。その思いが、彼の心のなかで暴れだします。そんな彼を見つめながら、神さまは沈黙なさいます。

「なぜだ?」。アブラハムの混乱は当然です。イサクは神の約束の確かさ、神の恵みの揺るぎない証しだと信じて感謝しているのに、その恵みの契約を神さまが台無しになさるとは、とても信じられないからです。「いやだ!」。アブラハムの抵抗も無理はありません。独り息子を殺して焼き尽くすなど、子を持つ親にできるわけがないからです。しかし、紛れもない主のみことばには、従わなければならないのです。

アブラハムは、とにかく主の仰せのとおり、行

動を開始します。薪を拾ってイサクに背負わせ、自分は刃物と火種を持って、出かけてゆきます。「お父さん、ささげものの小羊はどこにあるのですか」。そう問いかけるイサクに、アブラハムは心かきむしられる思いで答えます。「小羊は神が備えてくださる」。思いつめた父の表情と言葉に、息子は何も言えなくなります。いよいよその場所につき、祭壇を築き、薪を並べ、イサクを縛って、そこに寝かせます。「100歳の男と90歳の女に子供を与えてくださった神さまなら、たとえこの子が死んだとしても、死者の中から生き返らせてくださる。神にできないことは何ひとつない」。そう信じて、刃物を振り下ろそうとした、その時です。「アブラハム! アブラハム!」。天の御使いの声です。「その子に手を下すな! 何もするな! よく分かった! あなたは自分の独り息子さえ主にささげることを惜しまなかった。もうそれでよい」。後ろを見ると、木の茂みに一匹の羊が角を取られているではありませんか。アブラハムは、神が備えてくださった羊を捕まえ、息子イサクの命の代わりに、その羊の命をささげて、主を礼拝したのでした。

主は、アブラハムの信仰を試されたのです。彼の息子イサクが神の約束の子であることを忘れさせないためです。神の恵みはアブラハムの持ち物ではなく、神が与えることも奪うこともできると心に刻ませるためです。たとえ神の恵みの契約に入れられたアブラハムとその子孫であっても、神の前に罪ある人間であることに変わりはなく、その報いとして死ななければならない。その事実を目の当たりにさせるためです。そこで神さまは、アブラハムとその子孫との永遠の契約を成し遂げるために、彼らの命を救うための身代わりの死を、彼らの知らないところで備えておられる。その恵みを示すためです。

あなたの親は、アブラハムと同じ信仰を求められているのです。そしてあなたは、イサクと同じ従順を求められているのです。 (二宮 創)

---

[今週の暗唱聖句]      へブライ人への手紙 12章5, 6節

わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけない。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。

---

## 〈ねらい〉

主は、私たちの思いを越えて、すべてを備えていてくださることを信じる信仰を、イサクの奉献物語から知る。

## 〈暗唱聖句〉

「きっと神さまが備えてくださる」。

## 〈展開例〉

① アブラハムとサラのたった一人の子供、イサク。大事な愛する子供、イサク。イサクは大切に育てられました。家ではいつもイサクを中心にして笑いが絶えませんでした。

② そんなある日、神さまがアブラハムさんに声をかけられました。「私が命じる山に登って、あなたの愛するたった一人の息子イサクを犠牲の献げ物としないさい」。

③ アブラハムさんはびっくりしました。だって犠牲の献げ物ということは、祭壇で命をとるということだからです。アブラハムさんは苦しみ悲しみしました。「なぜ神さまはそのようなことを私に命じられるのだろうか。私はどうしたらよいのだろうか」。でも、アブラハムさんは決心しました。「神さまのご命令どおり、年老いた私にイサクが与えられた。だから今度も神さまのご命令どおりにしよう」。アブラムさんはすぐに旅の支度をして、イサクを連れて山に登りました。

④ 「ねえ、ねえ、お父さん」。「ここにいるよ。私の子イサクよ」。「山には何をしに行くの」。「礼拝をしにいくのだよ」。「ふ～ん、だから火と薪

はここにあるのだね。でも犠牲にする小羊がいませんよ。ねえ、ねえ、お父さん。どうするの」。

⑤ 「私の愛する子イサクよ。私たちには分からなくても、きっと神さまが備えてくださるよ」。そう言って、二人で並んで歩いていきました

⑥ 神さまが命じられた場所に着くと、さっそくアブラハムさんは祭壇を築き、礼拝をささげる準備を始めました。そしてイサクを縛って祭壇の上ののせました。そして刃物をとってイサクに手をかけようとした、そのとき、

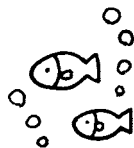
⑦ 「アブラハム、アブラハム」。神の御使いの声がしました。「アブラハム、もうよい。あなたが神さまのことを心から信頼し、その言葉に聞き従うことがよく分かった」。

⑧ 見ると、後ろの木の茂みに、一匹の雄羊がいました。アブラハムとイサクはその雄羊を犠牲にして礼拝をささげました。

⑨ アブラハムさんはイサクに言いました。「な、神さまは私たちに必要なものを前もって備えてくださっていただろ。これからも神さまは私たちの必要のすべてを与えてくださるよ」。

## 〈お祈り〉

天のおとうさま。あなたは私たちを愛して、いつも必要なものを与えてくださいます。ときどき他の人のものが欲しくなったり、自分のものを人に与えるのが嫌になったりして苦しいですが、どうかそのような苦しみから助け出してください。アーメン。



**〈ねらい〉**

神様は私たちを愛し、神様の子どもとしてふさわしく成長することを願っておられる。神様の言葉に従う子どもとして歩む力をいたごう。

**〈はじめに〉**

この4月から新しく日曜学校の教師としての奉仕を始めた方もおられるかもしれません。あるいは、何年も奉仕を続けてこられたベテランの方もおられるでしょう。数ヶ月続けてみて、難しさやとまどいを多く感じられているでしょうか。ベテランの先生方に何でも質問しましょう。あなたが、今感じていることはベテランの方も同じことを感じて、同じ道をとおって来られたかもしれません。奉仕者が連絡をよく取り合って、気遣いあうことが必要でしょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①神様が、アブラハムよ、と呼びかけたとき、アブラハムさんは何と答えましたか。
- ②神様は、アブラハムさんにイサクさんを連れて、どこに行きなさいと言われましたか。
- ③アブラハムさんは、その通りにしましたか。

**〈展開例〉**

アブラハムさんとサラさんに、神様のお約束どおりイサクさんが与えられました。イサクさんは、アブラハムさんとサラさんに大事に愛されて、神様を心から信じるりっぱな人に成長しました。

ある夜のことで。神様は、アブラハムさんに、突然、びっくりするようなことを言われました。

イサクさんを山に連れて行って、殺して、神様に献げなさい、というのです。アブラハムさんは、どんなに驚き、どんなに悲しんだことでしょう。100歳になるまで待って、待ってやっと与えられたイサクさんを神様にお献げしなさい、というのです。でもアブラハムさんは自分の思いではなく、神様の言われることを一番にしました。これまでずっとしてきたように、この時も神様に従いました。嫌だと言ったり、疑ったり、文句言ったりしなかったんですね。

アブラハムさんはイサクさんを連れて、モリヤの山に三日間かけて登りました。そして、祭壇を作って、本当にイサクさんを殺そうとした、その時に、神様の「殺してはいけない」という声を聞きました。イサクさんはアブラハムさんのもとへ返されました。

これは、神様がアブラハムさんを試される出来事でした。そして、アブラハムさんが神様を心から愛して従う人であることが十分わかりました。アブラハムさんも神様に十分愛されていることを知りました。

私たちも神様から愛されている子どもです。神様は私たちが「なぜ？」思うことを、時としてなされることがあります。でも心配いりません。神様はいじわるな方ではありません。私たちが神様をもっと知ることができるように、もっと愛することができるようにと成長をお与えくださるので

**〈お祈り〉**

神様、神様をいつも信じ、神様の言われることを一番にできる子どもにしてください。



## 〈ねらい①〉

人間的な希望の限界を超えていく、神の救いのご計画に信頼して生きる、信仰者の希望を伝える。

## 〈展開例①〉

「わたしの思いは、あなたたちの思いと異なり／わたしの道はあなたたちの道と異なると／主は言われる。天が地を高く超えているように／わたしの道は、あなたたちの道を／わたしの思いは／あなたたちの思いを、高く超えている」(イザヤ書55:8～9)。

神様の救いのご計画は、いつも私たちの思いをはるかに越えています。

私たち、弱く、目の前のことしか見えない人間は、困難なことがあるとすぐに希望が見えなくなって、パニックになります。「どうしてこんなことが起こるの?」「なぜわたしだけこんな目にあうの?」そして、誰もがこう言います。「神様は何を考えておられるのか……?」

イサクをささげよと言われたアブラハムさんも、パニックになったことでしょう。しかし、アブラハムは神様に従うことを選びました。自分には今見えない希望の未来を、神様が見てくださると信じているからです。私たち以上に私たちのことを知っていてくださる神様が、いつも私たちのために一番よいことを備えてくださるのです。

## 〈ねらい②〉

私たちにとって本当に必要なものは何か、「本当に大切にすべきもの」は何か、共に考える。

## 〈展開例②〉

アブラハムのように、神様にどこまでも従おうとする中で、自分にとって大切だと思ってきたも

のを失わなければいけない……と覚悟する時が、私たちにも訪れます。

例えば、礼拝で日曜日は友だちと遊べない。でも仲良しの〇〇くんが、遊べないならもう友だちじゃないよと誘ってくる。せっかく神様から与えられた大切な友だちなのに、神様に従おうとすると、だんだんと遊べなくなって、友だちじゃなくなっちゃうかもしれない……。そんなことを考える時もあるでしょう。(あなたの大切にしている礼拝を尊重してくれない友だちは、本当の友だちじゃないと、先生は思うけどね。)

一番大切なものを失ってまで、神様に従うなんて……。そんな迷いがあるかもしれません。でもね、神様は、あなたにとって本当に一番大切にすべきものを失わせることは決してありません。神様はあなたがそんな犠牲を払うことは、少しも要求されません。むしろ、犠牲を払ってくださったのは神様のほうです。一番大切な、絶対失いたくない独り子イエス様を、私たちのためにささげてくださいしたのは神様のほうです。

この神様が、お前の一番大切なものを捨てろなんて、絶対に言いません。あなたが本当に大切にすべきもの、本当にあなたにとって必要なものは、いつも神様が備えていてくださいます。神様に従う時に失わねばならないものは、いつも本当には必要でないものばかりです。時には、一番失いたくないと思っているものであっても、私の信仰の成長のために、神様は奪っていかれる時があります。「本当に大切にすべきもの」はなんなのか。よく考えてみましょう。

## 〈祈り〉

神様、私たちのために、必要なすべてのことを備えてくださるあなたを、もっと信じるができるようにしてください。



## 〈ねらい〉

試練の中で主が備えてくださることを知る。

## 〈展開例〉

① 今日の話はアブラハムの信仰の試練の話。皆は「試練」という言葉にどんなイメージを持っているだろう？「試練」という字は「試して」「練り上げる」と書く。「練る」とは純粋な金属や糸を作るために不純物を取り除く作業工程のこと。糸の場合は煮込む。金属の場合は火に入れる。信仰も、純度の高い信仰となるために、苦しいこと、辛いことをとおして、神様に練られることがある。そこでは、神様をまったく信じきる心が試される。「試される」という感じは「こころみる」とも読む。神様はまさに、人間が苦しみの中で神様に信頼する心を持つことができるように、その心を御覧になるのである。

Q. 皆は、神様を信じているという理由で「何で自分はこんな目にあうのだろう」こんな思いをしたことは無いだろうか？「何で自分の気持ちを犠牲にして、皆と違う生き方をしなくちゃならないんだ」、「神様は『するな』と言うけど、それでは、自分のやりたいことができなくなる」というとき。反対に「神様の命令なんか無視すれば、これができるのに」と思うとき。自分もそうだったが、中学生というのは反抗期のまっさかり。納得のいかないことに悲しみや怒りを大人以上に感じる時期。

② だからこそ、今日の聖書に目を向ける必要がある。皆が葛藤を覚える以上に、アブラハムは苦しみ悶えたに違いない。イラついたかもしれない。悲しんだかもしれない。しかし、彼は「自分の愛する独り息子を神様に献げる」という、およそ納得できようもない命令に対してすら、

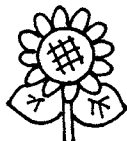
「たとえ何があっても神様は私の人生を祝福し、くださるに違いない」と考えた。このような「神様をまったく信頼する」という信仰を練り上げられていく。

③ 神様のくださる試練は、私たちをいじめて楽しんでいるわけでも、苦しむ様を眺めているのではない。始めに言ったように神様は、君たちが神様の命令と何かの間で葛藤するときに、「私を信頼しろ！」と、君が神様の方を選び取ることができるように強く望んでいる。アブラハムには契約が与えられていた。「私は彼（イサク）と契約を立て、彼の子孫のために永遠の契約とする（17章9節）」アブラハムは神様の命令と、自分の思いの間で葛藤した。しかし、最終的に神様を信頼したアブラハムは、神様が約束どおりにイサクを生かし、自分を祝福される方であることを思い知ることとなる。

④ 皆に与えられている契約はイエス様によって結ばれた新しい契約。神様が独り子を十字架につけてまで、君を祝福しようとされる約束である。色々なものが嘘くさく思える反抗期の毎日の中で、神様に従うことに苛立ちや迷いを感じる時に、これだけは信じ続けて欲しい。君のために愛する子をさえ惜しまない神様は、そのイラつきの中で、その戸惑いの中で神様を選び取る君を、絶対に悪いようにはしない。絶対に裏切らない。神様を選び取る君に、神様は君が納得して感謝して喜ぶようなエンディングを確実に備えていてくださる。

## 〈祈り〉

試練の中で祝福の結末を用意し、そこに導いてくださる神様。心に葛藤を覚えるときに、あなたを選び取ることができますように。アーメン。



### 〈エサウとヤコブの誕生〉

双子の兄弟エサウとヤコブは、イサクが六十歳のときに生まれた。彼らの誕生は主がリベカの祈りに答えてくださった結果であったが、主は兄(エサウ)が弟(ヤコブ)に仕えることもリベカに予告しておられた(25:19～26)。そしてイサクはエサウを愛し、リベカはヤコブを愛した(25:28)。

### 〈祝福のゆくえ〉

高齢になったイサクは、長子であるエサウに祝福を与えようとする。祝福は一人に対して、しかも一度与えられれば取り消されないものとされている。主はイサクに対し、その子孫によって地上の諸国民はすべて祝福を得る、と約束された(26:4)。イサクは長子であるエサウ一人に祝福を与えようとするが、後にヤコブは十二人の息子たちそれぞれにふさわしい祝福を与えている(49:28)。

イサクは、リベカへの主の約束を聞いていたであろうが、祝福自体は長子であり自分の愛するエサウに与えたいと願ったのであろう。逆にリベカは、兄が弟に仕えるという主の約束があったので、祝福も弟が受けるものという考えから、何とかして愛するヤコブが祝福を受けられるように企んだと思われる。アブラハムとサラの場合もそうであったが、主に従う夫婦の足並みが揃わない時に、家庭がどのような状況になるか、という現実を私たちは見せ付けられる。

リベカもヤコブも、もしイサクにこのことがわかれば、祝福どころか呪いを受けることを承知の上でこの計画を実行した。

イサクは、一度は本当にエサウが来たのかどうかを疑いながらもついにヤコブに祝福を与える。アブラハムに与えられた祝福の約束が、イサクへ、そして次の者へと伝えられていくことになるが、

それは、だまし取るという仕方で行われた。主のご計画は必ず実現するが、それが実現してゆくに当たって、実際に行動する人間の様々な思惑が絡み合い、策略まで用いて息子と妻が父であり夫である者をだますということすら起こってきた。

ヤコブはエサウの恨みを買ひ、逃亡生活に入らなければならなくなってしまう(28章以下)。

だますこと自体は悪であるがゆえに、ヤコブはその報いを受ける。リベカもヤコブを送り出さなければならなかった。この後、ヤコブとリベカの再会の記事はない。それぞれ、この世の生活では離別の悲しみと、故郷を離れて人に仕えるという労苦を忍ばなければならなかった。そして自分もラバンにだまされるという経験をするようになった(29:25)。

しかし、イサクは、ヤコブがだまし取った祝福だから無効であるとはしなかったし、主ご自身も、ヤコブを祝福を受け継ぐ者として認められた(28:14)。故郷を旅立ったヤコブに対して、主は夢の中でヤコブに祝福の約束をお与えになり、どこにいても共にいることと、再び主が故郷に連れ帰ることを約束してくださった(28:13～15)。

イサクは、祝福を求めるエサウに対して、その後の歩みの厳しさを予告する(27:39, 40)。しかし、後にヤコブと再会したエサウは、物質的経済的には恵まれていた(33:9)。ヘブライ書は、イサクはエサウのためにも祝福を祈ったと記す(11:20)。しかしヤコブの受けた祝福は単に物質的なものではなく、霊的なものであった。エサウは「ただ一杯の食物のために長子の権利を譲り渡した」者であり、彼のようなみだらな俗悪な者にならないようにと読者に警告している(同12:16, 17)。エサウ自身も自分の行いの報いを受けたのであった。(久保田証一)

テキスト 27章1～40節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13, 14, 17～19  
ウェストミンスター小教理 問11  
ウェストミンスター信仰告白 第5章

### (単元のねらい)

父のイサクに愛され、父の命令に従い、父の祝福を得ようとしている兄エサウ。一方、父の祝福をだまし取る弟ヤコブ。人間的な感情において語れば、弟ヤコブの卑怯さと兄エサウへの同情となります。

しかし、この箇所を説教するにあたって忘れてはならないことは、主の計り知れないご計画と、歴史に現れる摂理の御業です。そして主のご計画は、私たちにとって祝福に満ちたものです。主の秘められた愛が忘れられてはなりません。

また、エサウへの同情が語られる時、エサウの不信仰（ヘブライ12章14～17節を参照）も確認しなければなりません。主が求めておられることは、神である主を愛することと、隣人を自分自身のように愛することの両方を満たすことであり、信仰によって生きることが疎かになってはならないのです。

## 「一番大切なもの」

年老いたアブラハムさんに、ようやく与えられたイサクさんでしたが、そのイサクさんも、40歳にしてリベカさんと結婚しました(25:20)。そして60歳にして初めての子ども、それも双子の兄弟が与えられていました(25:26)。兄の名前はエサウ、弟の名前はヤコブです。生まれてくる時、弟は兄のかかと(アケブ)をつかんで、先に出てきたため「ヤコブ(かかと)」と名付けられたのです。

二人は大人になり、兄エサウさんは狩人となり、ヤコブは家の周りで仕事をしていました(25:27)。父イサクは狩りの獲物が大好きなため兄エサウを愛していましたが、母リベカは弟ヤコブを愛してました。

ある日のこと、エサウが狩りをして、疲れきって野原から帰って来ました。お腹がすいてペコペコです。エサウが家に近づくと、美味しそうなスープの匂いがします。ヤコブが赤いスープをつくっていたのです。エサウはヤコブに言います。「ヤコブ、もうお腹がすいて死にそうだよ。そのスープを食べさせてくれ」。すると、ヤコブはこの時とばかりに、「いいですよ。けれども一つ条件が

あります。長子の権利を譲ってください。」「いいよ、今はお腹がすいていて、死にそうなんだ。そんなもの譲ってやる」。するとヤコブは、「では、今すぐ誓ってください」と迫り、兄エサウはすぐに誓い、長子の権利を弟ヤコブに譲ってしまいました(25:27～34)。

さて、それからまた年月がたち、父イサクも年をとり、目がかすんで見えなくなっていました。そのため、イサクは、今のうちにアブラハムから与えられた神さまの祝福を、兄エサウに受け継がせようと思いました。そのため、イサクはエサウを呼び、エサウが取ってきた獲物で美味しい料理を食べさせて欲しいと願い、その後、祝福を与えることを約束しました。

この話を聞いていたりべかは、ヤコブが可愛く、ヤコブがイサクから祝福を得るべきであると思いい、イサクをだますことにしました。はじめヤコブは、エサウとの違いがイサクに分かり、逆に呪われるのではないかと怖じ気づきます。しかし、それでもヤコブは、リベカに言われるまま、エサウを装い、子山羊の毛皮を肌にかけて、イサクのところに行きます。



そしてヤコブは、エサウの声色を真似して、「わたしのお父さん」と呼びかけます。イサクは、声を聞いても、誰なのか分かりません。「誰だ、お前は」。ヤコブは答えます。「長男のエサウです」。イサクは信じられません。イサクはエサウに狩りに行き、獲物を取ってくるように命じましたが、非常に早かったからであり、エサウの声とは少し違うかなと思ったのです。そしてイサクは、直接触るとエサウかどうか分かるはずだと思い、「近寄りなさい。わたしの子に触って、本当にお前が息子のエサウかどうか、確かめたい」と語ります。目が見えなくなっていたイサクは、子山羊の毛皮を着けているヤコブに気がつかず、エサウだと思い、もう一度「お前は本当にわたしの子エサウなのだ」と確認をして、ヤコブが持ってきた料理を食べ、父イサクは弟ヤコブに祝福を与えました。リベカとヤコブは、まんまとイサクをだますことに成功したのです。

さて、弟ヤコブが父イサクから祝福を受けるとすぐに、兄エサウが狩りから帰って来て、料理を作り、イサクのところに持ってきました。イサクは非常に驚きました。体を震わせます。ヤコブにだまされたことに気がついたのです。神さまから与えられた祝福を、すでにヤコブに与えたのであり、取り消すことはできませんし、あらためてエサウを祝福することもできないのです。エサウは「わたしにも祝福をください」と願いますが、それはできません。エサウは、ヤコブに、最初は長子の権利が奪われ、今度は父からの祝福が横取りされました。「なぜ？ おかしい。ヤコブは卑怯だ」と思ったことでしょう。

みなさんも、神さまはなぜ、このようなことをお許しになるのだろうかと思うでしょう。人を騙すことは、神さまが禁じておられます。そのため、父からの祝福を受けたヤコブでしたが、自分の罪のために、長い間、エサウから逃げて、苦しまなければなりませんでした。

けれども、エサウさんが正しかったのかを考え

なければなりません。神さまは、私たちが救ってください、神の子としてくださいました。そして、神さまは、神の子としてふさわしく生きることを求めておられます。救い主である神さまに感謝し、礼拝すること、そして隣人を愛することです。どちらも神さまが求めておられることであり、大切なことです。しかしエサウは、神さまから与えられた長子の権利をおろそかにして、お腹がすいただけで、弟に譲ってしまいました。このことは、神さまの御前に大きな罪です。このことがエサウは理解できなかったのです。

一方、ヤコブのしたことも許されませんが、長子の権利を得たい、お父さんからの祝福を得たいという熱心な思いは、神さまからの恵みを大切にしようという思いから出てきています。神さまによって愛され、神さまによって救われているみんなも、神さまを礼拝し、神さまによる恵みをいっぱいいただくように、熱い思いを持つことが、求められています。

神さまは、このような人間の悪いたくらみをも用いて、神さまの御業を成し遂げられます。主イエス・キリストが、私たちの罪の償いのため、十字架にお架かりくださった。それは、ユダヤ人の悪いたくらみによってであったことを知っているでしょう。けれども、そのたくらみをも用いて、神さまは御業を成し遂げられました。このように、神さまの御計画が実現することを「摂理」と言います。私たちにとってはなぜだろうと思われることであっても、神さまにとってはもっとも素晴らしいこととして、実現していきます。

神さまによって愛され、神さまの子として救われている私たちは、神さまを愛し礼拝すること、そして隣人を愛することが求められています。目の楽しみに心が揺さぶられることなく、私たちにとって本当の喜びである神さまに愛されるために、神さまを礼拝し、隣人を愛し続けましょう。

(辻 幸宏)

---

[今週の暗唱聖句]      ヘブライ人への手紙 12章14節

すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。

聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません。

---

## 〈ねらい〉

神さまの御心が実現することを知る。

## 〈暗唱聖句〉

リベカさんは、「主の御心を尋ねるために出かけた」。

## 〈展開例〉

①イサクさんは大きくなってリベカさんと結婚しました。二人にはなかなか赤ちゃんができませんでしたがお祈りすると双子の赤ちゃんが与えられました。リベカはお腹の中の赤ちゃんのことで、神さまの御心を尋ねるために出かけました。そんなリベカさんに神さまは言われました。「この二人は争うことになる。そして兄が弟に仕えるようになる」。これが神さまの御心でした。

②さて、二人のうち、赤くて全身が毛むくじらの兄をエサウと名付け、兄のかかどをつかんで出てきた弟をヤコブと名付けました。そして二人は成長し、エサウは野原で狩人になり、ヤコブは天幕の周りの畑で働くようになりました。

③ある日、ヤコブが煮物を料理していると、エサウが疲れて帰ってきて言いました。「お腹がすいて死にそうだ。それを食べさせてくれ」。「だったら、お兄さんが受け継ぐはずの神さまから祝福を受ける権利を譲ってください」。エサウはあまりにもお腹がすいていたので、そんな権利くらいどうでも良いやと思いました。そしてパンとレンズ豆をもらう代わりに、神さまの祝福の権利をヤコブに譲ってしまいました。

④またエサウは、神さまのことを知らない人と結婚しお父さんとお母さんを悩ました。

⑤やがてイサクさんは年をとったので、兄のヤコブに神さまの祝福を譲ろうと思いました。「どうか私のためにおいしい料理を作っておくれ。それを食べたなら、お前に神さまの祝福を譲ろう」。エサウは喜んで狩りに行きました。

⑥さて、それを聞いていた母のリベカさんはこまりました。エサウは神さまのことを軽く考えているので、きっと家族に災いをもたらすに違いない。そこで弟のヤコブに、お兄さんの代わりに神さまの祝福を受けるように言い、おいしい料理とエサウの着物を渡し、毛むくじらの毛の代わりに毛皮をつけさせてイサクのもとに送り出しました。

⑦リベカさんの計画通りに、イサクさんは、エサウだと思って神さまの祝福をヤコブに与えました。ヤコブが立ち去るとすぐ、エサウが帰ってきましたが、もうすでに後のまつりです。エサウには祝福は残っていませんでした。エサウは悔しがつて、ヤコブを憎み、いつか必ず殺してやるとまで心の中で思うようになりました。イサクさんは言いました。「お前はこれから暴力に頼っていくだろう。しかしやがてお前は弟に仕えるようになるだろう」。

⑧お兄さんの怒りを知ったヤコブは、すぐに逃げることにしました。その道はとても厳しい道です。でも神さまが用意してくださった道を、神さまの祝福と一緒に歩いて生きていきます。

## 〈お祈り〉

不思議な方法でヤコブに祝福を与えられた神さま。あなたの御心だけが実現します。どうか私たちの歩みも神さまの御心にかないますように。アーメン。



**〈ねらい〉**

神様には、私たちには知り尽くすことができないほど大きな救いのご計画があり、そのご計画は神様の大きな愛の中で実行されることを信じる。

**〈はじめに〉**

暑い毎日が続きます。子どもたちは元気に日曜学校に来ているでしょうか。休みが続いている子どもはいないでしょうか。来ている子どもたちと一緒に、分級の少しの時間を割いて、カード・ハガキを書いてみてはいかがでしょうか。旅行中のお友だち、病気のお友だち、家庭の事情で来られないお友だち、様々な事情の中に置かれている子どもたちを祈りの中で覚えましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①年をとり、目が見えなくなってきたおじいさんの名前は何か。
- ②上の息子の名前は何か。
- ③エソウの弟の名前は何か。
- ④お母さんのリベカはエソウに「お父さんのところにお父さんの大好きな料理を持っていきなさい」と言いました。エソウは何と答えましたか。

**〈展開例〉**

イサクはリベカと結婚しました。そして双子の子どもが生まれました。お兄さんのエソウは元気で野原をかけめぐって、動物を捕まえるのが大好きでした。弟のヤコブは優しくて畑のお仕事や、

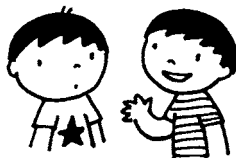
羊のお世話をするのが大好きでした。お父さんのイサクはエソウを、お母さんのリベカはヤコブをかわいがりました。

イサクがすっかり、おじいさんになったある日、イサクは、エソウを呼んで、「動物をとってきて、私の好きな料理を作っておくれ。私が死ぬ前にあなたを祝福しよう」と言いました。それを聞いた、お母さんのリベカはこっそりをとヤコブに言いました。「私がおいしい料理を作るので、エソウになりすまして、持って行きなさい」。ヤコブはエソウのように毛深くみせるために腕や首に動物の毛皮を巻きつけて、お母さんの言うとおりにしました。お父さんはもう目が見えないので、ヤコブの腕を触って、エソウだと思ってしまって、ヤコブを祝福しました。ヤコブは長子の権利を自分のものにしてしまいました。

リベカやヤコブはイサクにうそをつきました。人をだますことは神様は喜ばれません。でも神様は人のわるだくみや、神様に喜ばれない思いや行いをも、神様の大きなご計画に用いられることに私たちは驚きます。私たちも生まれる前から、神様のご計画の中にあることを覚えましょう。神様は私たち一人ひとりを用いて、神様の救いのご計画を進めていかれます。私たちの周りにはまだ神様を知らない人がたくさんいます。神様が私たちを祝福してくださっていると同じように、神様を知らないお友だちや家族が祝福をくださる神様を知ることが出来るために私たちが用いられますように祈りましょう。

**〈お祈り〉**

今週も神様の祝福の中で歩めますように。



**〈ねらい〉**

一連の族長物語の中に、現在の私たちの姿と重なり合う、悲惨に満ちた罪人の生を見抜く。

**〈展開例〉**

(第41回全国学生会修養会における吉田隆先生の講演レジュメより、多く参考にさせていただきました。)

イサクは神様の奇しい導きによってリベカと結ばれました。そのような美しい結婚をしたはずなのに、その夫婦が築いた家庭は、まるで昼ドラマでも見ているかのように、ドロドロの家庭崩壊劇でしたね。(説教において示された聖書物語をなぞるだけで十分でしょう)。

こんなのが、神様を愛するクリスチャンホームなの!? って言いたくなりますね。うちの家はこんなことないよ、だって神様を信じる人たちの家だもん。お父さんだって、お母さんだって、ぼくだって、わたしだって、こんなにひどくない!! 本当にその通りならすばらしいですね。でも本当にそうでしょうか。日曜日だけは、教会でいいかっこうしてるけど、おうちに帰ると実は……なんてことはありませんか? パパとママが夫婦ゲンカしたり、ぼくたちわたしたちも兄弟ゲンカしたり。あれ? 考えてみると、なんだかヤコブの家とそっくりだなと思う時もあるのではないのでしょうか。

**○イサク**

お父さんのイサクは、食べ物とスポーツのことばかりに夢中の典型的な中年オヤジで、神様を愛し、家族を愛し、父親として立派に子どもたちを育て上げることがおろそかだったように思います。家族崩壊の根源は、このあたりにあるようです。

**○リベカ**

リベカは、夫に愛想をつかして、息子(ヤコブ)

のことばかり溺愛して、息子だけが生きがいになっています。こういうお母さんも、今多いですね。息子を愛していると言いながら、実際は自分のエゴイズムを満たしたいだけ。こういう子への歪んだ愛から、引きこもり、家庭内暴力などの悲劇に陥ることが、残念ながら多いようです。(子どもたちの中には、実際にこういう問題に直面している方もいるかもしれません。十分な配慮をお願いします。)

**○エサウ**

単純細胞のマッチョなエサウは、目の前の喜びだけを追いかける消費型の人間とも言えます。人生を根源的などころで支えてくれる神様の愛と祝福よりも、目の前にある快樂のほうを大事にしてしまう。ゲームやケイタイなどで、日々の快樂を追いかけることに夢中で、またそうしないと置いていかれるという悲しい危機感に追われてしまっている、現代っ子に通じます。

**○ヤコブ**

ずるがしこいマザコン息子のヤコブは、エゴイズムに満ちた母親に育てられて、同様におぞましいまでに自己中心です。目的の実現のためには手段を選ばず、神の喜ばれないような嘘まで平気でつきます。「そこまでして神の祝福を自分のものにしたい」、それは神への熱心と言えないことはないでしょう。でも、歪んだ熱心です。兄弟を愛することのない者は、本当に神を愛したことにはなりません(ヨハネ4:20)。

**〈祈り〉**

神様、ヤコブの家とそっくりな私たちの罪をお赦しください。そんな私たちの愚かさまで用いられて、救いのご計画を成し遂げられるあなたの御業の不思議に驚き、あなたを賛美します。

## 〈ねらい〉

神の摂理の内にある人の自由と責任を覚える。

## 〈展開例〉

- ①今日は「神様の摂理」についてのお話。聖書は、ヤコブとエサウの話をおして、神様は世界に起こる様々なことを、一つの計画のもとに、実現される（摂理）ということを教えている。今日の話の登場人物たち。エサウは神様からの恵みを軽んじ、ヤコブは兄の恵みをかすめ取り、リベカはヤコブと共謀し、イサクは祝福の相手を自分勝手に変更し、と皆、ダメさ丸出しの人たちであり、スッキリしない人間関係が描かれる。だけど、これは信仰者の集まりを示すリアルな人間模様ではないだろうか？
- ②皆は、神様が契約を守られるということをアブラハム物語から続けて聞いてきた。神様が人間と愛し合って生きる世界、人間同士もまた愛し合う世界。そんな世界を目指して、神様は皆を祝福する計画を実現させていく。でも、それは一人ひとりの個性とか特徴を無視して魔法のように実現するんじゃない。神様は、人間が善いことをしようが、悪いことをしようが、そうしたものも、ひっくるめてリアルな人間模様が無くなるように計画を立てておられる。人間の特徴である自由を壊さないで、神様は計画を実現させる。もし、正しい人や方法しか神様が用いられないとしたら、世界で正しい方はイエス様だけ。皆と神様との接点はゼロになってしまう。神様は人間が悪い思いを抱くことも知った上で、神様のスバラシサを見せてくれる。
- ③「なーんだ。じゃあ俺らは自由にやってればいいんだ」。こんな風に思うかもしれない。ある意味正解。君たちは自由に生きて良い。ただ、自由というものは責任を伴う。「最後は神様が

良いようにしてくれる。だから結果オーライ」とはならない。もし君たちが「自由」を「好き勝手」と勘違いして、神様が嫌がる、神様との付き合いを無視した、お金や財産だけを求める人生を生きたとする。君の仕事っぷりで社会は潤い、社会の福祉事業で弱い人たちが助けられることが起こるかもしれない。君の行動で誰かが助かるという善い結果が生まれることはあり得る。だけど、君が神様を無視した事実は変わらない。悪いことの結果に善いことが起きたとしても、それは神様のお手柄。君に突きつけられるのは、そのために悪いことを行ったという事実と責任。

- ④神様の計画は君たちがどんな失敗をしたとしても、パーにはならない。だから君たちは「神様のために何かをしよう！ 誰かのために何かをしよう！」と思うとき、失敗を恐れなくてよい。皆が失敗しても、神様の計画がこけることは無い。だけど同時に、できる限り神様が喜ばれるような方法を考えて欲しい。神様が喜ばれる道を気持ちよく選び取ることができること。この選択の自由こそ、聖書の示す自由です。
- ⑤ヤコブは神様の恵みを求めた。これは見習いたい心意気。だけど、その方法は褒められたものじゃない。せっかく神様を求めるのなら、イエス様がほほ笑んでくださるような、そんな仕方、神様が世界中を祝福されるという、壮大な神様の御計画に参加してもらいたい。

## 〈祈り〉

世界を祝福へと導かれる神様。あなたの悲しむ仕方ではなく、あなたの喜ばれる仕方、あなたの祝福を受け、それを広げることができるようにしてください。アーメン。

## 〈ローマの信徒への手紙における「平和」〉

旧新約聖書の中心主題を「神の国」としてとらえることは、私たちになじんだ理解ですし、正しいことです。神の国とは、「平和の源なる神」の「平和」(14:17)が実現する場です。つまり、「平和」が中心主題と言うこともできます。それを地上に実現してくださったのは、主イエス・キリストにほかなりませんから、このお方こそ「主」、「平和の主」です。そして、この知らせを、「平和の福音」(エフェソ2:17)と呼ぶことは、まさにふさわしいことです。第1章7節に記された、何気ない祝福の挨拶は、実は極めて重要です。

使徒パウロは、この手紙によって、神の平和の実現の筋道を鮮やかに示し、読者である教会にこれを信じることによって豊かにあずかせようとしているのです。したがって、神との和解を受けた私たちには、この福音を宣べ伝えることによって、平和の神のビジョンを地上に拡大し、結実させる務めが与えられているのです。「恵みと平和があるように！」と宣言すること、これこそ、私たちの伝道の行為そのもの、目標そのものなのです。

多くの聖書学者が、ローマの信徒への手紙をひもとく「キーワード」として、第1章16節を挙げます。そこには、福音の本質が、ユダヤ人だけではなくギリシア人をも救う神の力であることが明らかにされています。

これまでユダヤ人にとってギリシア人は神と関わりのない異邦人であり、愛の対象ではなく、むしろ敵でした。しかし、「こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ばされました」(エフェソ2:15~16)。

「一人の新しい人」は、キリストの体なる教会の形成として具現されました。今や、神の国にお

ける平和と喜びとは、地上の教会において始められています。この現実性、確かさは、その新しい共同体に、平和が構築されていることにおいて鮮明になります。教会が、平和の共同体として建て上げられていることが、神の国の地上における現れをはかる、「ものさし」となります。

多くの学者たちは、8章までの議論、つまり主イエス・キリストの真実(信仰)による神の義、つまり、罪人を義とする信仰による義認(宣義)の教えを、この手紙の中心主題としてとらえています。確かに、救われるということは、私たちが神の前に義とされ、敵対関係から和解へと転換されることです。この救いの教えがどれほど大切であるかは、明らかです。

しかし、パウロにとってそれは、第9章以降の教えの根拠、前提として記したものです。(信仰義認の教理に集中するのは、ガラテヤの信徒への手紙です)。第9章以降は、イスラエルの救いの問題、キリスト者・教会の形成、世界宣教の課題が記されています。神の救いのご計画、つまり、神の平和にあずかせるご計画(世界の完成)の全貌が示されています。

イスラエルの不従順は、ついに神の究極の裁きを受けることとなりました。ところが、イスラエルの「残りの者」(9:27)であるユダヤ人イエスにおいて、イスラエルの救いは成就しました。そればかりか、ギリシア人(異邦人)の救いも、もたらされました。彼らが捨てられたことが、「世界の和解」(11:15)を実現し、つまり、ユダヤ人とギリシア人との間にも平和がもたらされたのです。まさにパウロと共に私たちも、神の知恵の深さに、「ああ」(11:33)と感嘆せざるを得ません。神の主権的支配は、貫徹されているのです。

神の平和を告げ、地上に平和を造り出すこと、ここに教会の本質的な使命があります。

(相馬伸郎)

テキスト ローマの信徒への手紙 1章7節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問24

### 〔単元のねらい〕

本日は、敗戦記念日です。毎年、このときを記念するため、「平和」を主題に特別のカリキュラムを立てています。日本キリスト改革派教会にとってまさに、まさに出発（創立）の原点であり、原点とすべきときです。かつて、戦時中の日曜学校教案誌は、キリストの御名において、子どもたちを天皇の「赤子」とし、戦地へと駆り立てるお話をしました。戦争を阻止するどころか、それに加担した罪責は、キリストを知らない人々と比べられないほど重いと云わざるを得ません。この悔い改めを欠き、それを深める営みを怠ったところでの私どもの宣教、教会形成は真実ではありえません。この国で「まともな」キリスト者として生きるためには（その時生まれていようがまいが）、この原点にこだわるのが不可欠です。しかし、私たちが犯した罪は、キリストの血で贖われました。私たちは今、主の犠牲に感謝し、二度と同じ過ちを犯さないだけでなく、この地に平和を造り出すために、子どもたちに平和の福音を教え、これに共に生きようと呼びかけたいと思います。

## 「世界を平和にする方法」

今日は何の日ですか。今日は特別の日曜日です。「シュウセン記念日」と答えてくれたお友だちもいます。65年前のちょうど今日、日本がアジアの国々と人々を侵略した戦争、アメリカと戦争をして負けた日です。ですから、正確に言うと「敗戦記念日」です。

負けることは、嬉しくはないですね。それならなぜ、負けた日を大切に記念するのでしょうか。

負ける前の日本は、「大日本帝国」と言っていました。帝国というのは、天皇の支配する国、天皇の国という意味です。しかし、今は、「日本」ですね。日本は、どんな国になったのでしょうか。この国に住んでいる人々の国になったのです。それを「民主主義」と言います。そしてもう二度と、戦争をしないこと、戦争するための武器は持たないことを世界の人たちに、もちろん自分たちにも約束しました。また、人間は、ただそれだけで価値があり、大切にされなければならないことも確認しました。それらは、日本国憲法という一番、大切な法律によって定められました。ですから、この憲法は、僕たち私たちはもちろん、この国に住む人たちにとって、どれほどすばらしく、大切

なものかが分かると思います。65年前の今日、それまでとは180度違うまったく新しい国、良い国になるように、方向を換えることになったその出発の日なのです。

ただ、それは自分たちの力や考えでそうしたものではありませんでしたから、実は、65年経ってもまだまだ、本当の意味では根付いていません。身に着けるためには、努力しなければならないのです。

さて、今朝、聴いた聖書の御言葉をもう一度、聴きましょう。「神に愛され、召されて聖なる者となったローマの人たち一同へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように」。この手紙を書いたパウロ先生は、「天のお父さまとイエスさまからの恵みと平和が、ローマにいるキリスト者、ローマの教会の皆さんにありますように！」と心を込めて祝福を祈り、祝福の挨拶を書き記しました。

時間があつたら、今日の分級か、あるいはお家に帰って調べてみてほしいのですが、パウロ先生が書いた手紙の最初にある言葉って、どんな

言葉でしょうか。ローマの信徒への手紙第一章、その次は、コリントの信徒への手紙一そして二、ガラテヤの信徒への手紙、エフェソ、フィリピ、コロサイ、テサロニケの信徒への手紙一そして二、テトス、フィレモン……、その第一章には、実は、今読んだ、同じ挨拶の言葉が記されているのです。

パウロ先生の手紙には、神さまの恵みがどんなにすばらしいものなのかを知らせ、その恵みを受けたなら、そこには必ず平和が与えられるのだよ、と書いてあるのです。そればかりか、ペトロの手紙やヨハネの黙示録にも書いてあります。ってことは、パウロ先生だけではなく、聖書には、平和がありますように、あなたに平和が実現しますようにということがどれほど大切にされているかが分かりますね。聖書の神さまは、真の神さまは、平和を造り出してくださる神さまなのです。

それなら、平和とはどんなことを指すのでしょうか。多くの人たちは、平和の反対は戦争と考えます。人と人が憎み合い、敵となって戦い、殺し合うことです。世界中では今もどこかで、戦争が行われています。いつでも戦争ができるように準備をしています。皆さんは、もしかすると自分たちのこととは思わないかもしれませんが、友だちと、兄弟とけんかをすることがあります。けんかするとその人との間には、平和がありません。小さな戦争ではないですか。

平和、それは、第一に、神さまと僕たち私たちとの関係のことなのです。神さまと人間との正しい関係のことなのです。人間はアダムによって、神さまの御言葉を破って罪を犯しました。すると、ただちに、エバさんとけんかをはじめてしまいました。そしてその二人の子ども、カインは弟のアベルを殺してしまいました。これが戦争のはじめと言ってもよいかもしれません。人が人の命を奪い、人の血を流してしまったのです。それから後、20世紀には、何億という人間の大切な命が、人

間の手によって奪われてしまいました。自分のことばかりを考える、自分を中心にしかすべてを考えられない、そんな人間になってしまったからです。

そんな人間の心の中には、いつも不安があります。神さまの前に罪を犯して、神さまのお怒りを受けなければならないという思いが、人間を不安にするのです。神さまと戦争しているからです。神さまの敵になってしまったから、心に不安があるのです。もしも、神さまと仲直りしないままでいれば、人間はいつまでも不幸です。人間は人間の敵となって、いつまでも争いあい、不幸のままです。

けれども、そんな人間のために、神さまの方から手を差し伸べてくださいました。神さまの方から、まるで「ごめんね」と謝るようにして、イエスさまを十字架につけて、僕たち私たちに、「このイエスさまを信じて、罪を赦されなさい。わたしの平和を受けなさい！」と手を差し伸べてくださったのです。それを恵みと言います。今朝あらためて僕たち私たちは、「はい、信じます。心から感謝します」と返事をしましょう。

そのとき、神さまの平和が僕たち私たちに実現します。造り出されます。そのとき、僕たち私たちは、お互いの間にも仲直りしたい、仲良くしたい、平和を造りたいという強い思いがわいてくるのです。

パウロ先生は、この平和をこの地上に造り出し、広げるために、世界中に、イエスさまを宣べ伝えました。そして、イエスさまの教会を建てて行きました。僕たち私たちも、イエスさまを信じ、イエスさまをお友だちに伝え、この教会のために奉仕ができるようになりたい。そうやって世界を平和にする神さまの子として、用いられたいですね。

(相馬伸郎)

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 15章33節

平和の源である神があなたがた一同と共におられるように、アーメン。

---



## 〈ねらい〉

「平和」という言葉が親しみのあるものになって、イエスさまに求めたくなるように願っています。

## 〈展開例〉

今日は「平和」という言葉を聞きました。「平和」ってどういうことかな？ 戦争がないこと。けんかがなくて、いじめられる子もなくて、毎日ご飯が食べられて、世界中の人とお友達になること。そうだね。みんなが仲良しでいて、安心して暮らせることだね。

では、みんなに質問です。

戦争がなくなればいいと思う人？

——でも、戦争は今でも世界のどこかで起こっています。

私たちの周りにいじめられる子が一人もいなくなればいいと思う人？

——でも、私いじめられているという人が、毎日いるんだって。

あるいは世界中の人が毎日ご飯食べられるといいと思う人？

——でも、何日も何週間もご飯が食べられない人が世界中にはたくさんいるんだね。

それから、世界中の人とお友達になりたいと思う人？

では本当に世界中のすべての人とお友達になれ

ると思う人？

けんかする人がいなくなればいいと思う人？

ではわたしは決してけんかしないと考える人？

——でも、やっぱりけんかするときもあるよね。

このようにわたしたちは「平和」になったらいいなと思いながら、いつも「でも、平和は難しいな」と思ってしまうのですね。

じゃあ、「平和」はあきらめたらいいのでしょうか？ 私たちに「平和」は無理なのでしょうか？

しかしイエスさまは、お弟子さんたちにこう言われました。「あなたがたに平和があるように」。

今は平和がないかもしれないけれど、お弟子さんたちに平和を与えます。イエスさまが与えてくださいます。そうおっしゃってくださったのですね。そしてイエスさまを信じるすべての人にも「あなたがたに平和があるように」と言ってくださいます。

「平和」ってとても難しいけど、イエスさまを信じれば、イエスさまは「平和」を私たちにも与えてくださるのだね。みんなにもイエスさまが平和を与えてくださるように、お祈りしましょう。

## 〈お祈り〉

イエスさま。私たちに平和をください。世界中の人がイエスさまを信じて平和をもらえますようにしてください。アーメン。



**〈ねらい〉**

イエス様の十字架の贖いを通して、神様と人の間に平和が与えられたことの喜びを知ろう。

**〈はじめに〉**

日曜学校の夏の行事は終わってしまったでしょうか。喜んで参加したお友だち、来ることができなかったお友だち、初めて参加したお友だち。一人ひとりにふさわしいフォローを考えましょう。今、目の前に与えられている、神様がこのクラスに送ってくださった子どもを大切に祈りの中に覚えましょう。

**〈御言葉に聞きましょう〉**

- ①コリント人の信徒への手紙一 1章3節を読みましょう。
- ②ガラテヤの信徒への手紙1章3節を読みましょう。
- ③エフェソの信徒への手紙1章2節を読みましょう。
- ④この三箇所と同じ言葉をさがしましょう。

**〈展開例〉**

今日は8月15日。日本中で、毎年この日は大切に覚える大事な日です。これは、みんながまだ生まれていないずっとずっと前、今から65年前に起きたことを、今も忘れないで、これからも忘れないで大切にしましょうという日です。何を忘れない日なのでしょうか。何を大切にしたい日で

しょうか。何をこれからみんなが大人になっても、新しく生まれてくる人たちに伝えてほしいのでしょうか。今日はそのことをみんなで考えましょう。

8月15日は、「敗戦記念日」「終戦記念日」と言います。日本というこの国が戦争に負けた日、そして戦争が終わった日なのです。それまで、国と国が戦って、たくさんの人たちが死にました。もうそんな戦争はやめましようど決めた、大切な日なのです。戦いは神様は悲しまれます。人を殺すことは神様は嫌われます。

私たちには、大きな罪があります。実際に人は殺さなくても、心の中で、あんな人きらい、いなくなったらいいのにと思ったりしてしまいます。小さいいじわるをしたり、のけ者にしたり、悪口を言ったりします。これが大きくなると国と国とのけんか、戦争になってしまうのです。神様は私たちの心の中まで全てご存知です。この神様に嫌われる罪を持ったままでは天国に行けません。でも私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださったイエス様の赦しによって、神様から私たちは平和をいただきました。イエス様を信じる私たちは、平和に神様と人と生きることができるようにされました。平和を造る人として生かされています。平和を伝える子どもとして生かされています。

この日、もう一度、平和を造る子どもとして歩むことを、みんなで確認しましょう。

**〈お祈り〉**

神様、私を平和の器としてお用いください。



## 〈ねらい〉

説教展開例に従い、「平和」が旧新約聖書を貫く中心主題の一つであることを、子どもたちと共に確認する。私たちの平和は、ただ聖書の神への信仰と服従により実現する。

## 〈展開例〉

「わたしは神が宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように」（詩編85:9）。

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう」（イザヤ2:4-5）。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる」（イザヤ9:5～6）。

「山が移り、丘が揺らぐこともあろう。しかし、わたしの慈しみはあなたから移らず／わたしの結ぶ平和の契約が揺らぐことはない／あなたを憐れむ主は言われる」（イザヤ54:10）。

「わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである」（エレミヤ29:11）。

「わたしは彼らと平和の契約を結ぶ。それは彼らとの永遠の契約となる。わたしは彼らの住居を定め、彼らを増し加える。わたしはまた、永遠に

彼らの真ん中にわたしの聖所を置く」（エゼキエル37:26）。

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る／雌ろばの子であるろばに乗って。わたしはエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ／大河から地の果てにまで及ぶ」（ゼカリヤ9:9～10）。

「平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ5:9）。

「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」（ローマ12:18）。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました。キリストはおいでになり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせられました。それで、このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです」（エフェソ2:14～18）。

「また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい」（コロサイ3:15）。

「すべての人との平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、だれも主を見ることはできません」（ヘブル12:14）。



**〈ねらい〉**

神との平和が恵まれるように願う。

**〈展開例〉**

①今日は、いつもの流れを中断して、「平和」ということを考えたいと思う。

Q. 質問。「平和だなあ」。もし、皆がこんなセリフを言いたくなるとしたら、それはどんなシチュエーションだと思う？ 例) 天気のいいとき。自由な気分を感じたとき。心あたたまるようなニュースを見たとき。戦争のような悲しいニュースが無くなったとき etc.

確かにこんなときは「平和だなあ」と言いたくなるかもしれない。世界、社会、家族、学校、こうした自分の周囲や、自分の心の中で、争いや迷いがなくなり、幸せ気分を感じる時には「平和だなあ」という言葉が口から出ると思う。

Q. じゃあ、反対に「平和じゃないなあ」っていうシチュエーションっていうのはどんなときだろう？ 例) 戦争や犯罪、物騒なニュースを見るとき。友だちや親、兄弟なんかとけんかしているとき。心に不安を感じるとき。

確かに、こういう状況というのがあったら平和とは言い難い。

②みんなが率直に思う平和についてのイメージを聞いたが、聖書が語る「平和」とは、神様との関係がちゃんとしている状態のことを言う。神様とちゃんとした状態というのは、神様と愛し合っている関係である。神様は私たちが人間同士で大切にされることを求められるから、神様と愛し合うということは、人とも愛の関係が築かれた状態である。神様から大切にされ、神様を大切にしている状態。そして、人を大切にしている状態。確かに、世界が神様とちゃんとし

た関係にあるとしたら、戦争はおこらない。毎日は世界中の喜ばしいニュースで飾られるのだと思う。社会全体が神様とちゃんとした状態なら、弱い人が虐げられことも、一部の豊かな人たちだけが甘い汁を吸うということもない。自分が神様とちゃんとした関係を持っていたら、ケンカも無いだろうし、心に不安もないことだろう。皆が「平和だなあ」というセリフを言えるシチュエーションが現実のものとなるためには、神様との愛の関係を持っているということが最重要事項である。ということは、神様との関係が壊れてしまうときに、「平和じゃないなあ」という事態が引き起こされる。戦争や犯罪、物騒なニュース、誰かとのケンカ。こうした事態に收拾を付けるためには、世界が神様との関係を正されていくという方法しかないわけである。

③みんなそれぞれに平和のイメージ、平和じゃないイメージというものがある。しかし、聖書は神様との平和がなければそれは平和じゃない状態。安心できない状態であるというのである。教会は、すべての平和を生み出す源、神様との平和を与えられている者たちの集まりである。そして、神様はこの平和を広めるように教会に命じられている。それぞれに与えられている環境の中で争いの中にいる人たち、不安の中にいる人たち、あるいは君たち自身の中にも戦いや不安はあるかもしれない。神様が下さる平和が世界のすべての場所に、世界のすべての心に広げられることを心から願いたい。

**〈祈り〉**

本当の平和を下さる神様。どうか、あなたの平和に満たされて、自分の周りにも平和を広げられるように祝福をください。アーメン。

**〈背景と文脈〉**

ヨセフ物語ほど神の摂理を確信させてくれるものはない。創世記37章から50章まではヨセフに関する記述である（ただし38章にはユダに関する記事が挿入されている）。一見、数奇な運命に翻弄されているかのような生涯であるが、神の摂理によって支配されていたことが、読み進めていくなかで見えてくる。ヨセフはヤコブ（ヨセフの父）の一族の命を救うための神の器だった。ヤコブは神の契約の民となったイスラエル民族の先祖であり、この民からメシア、イエス・キリストがお生まれになった。

37章は、50章まで続くヨセフ物語の序論であり、結論へ向けて伏線が敷かれている箇所である。

**〈ヨセフの家庭環境と兄たちの憎しみ (37:1～11)〉**

主人公ヨセフはヤコブとラケルの子であり、彼には同じ母から生まれた弟ベニヤミンがいた。兄たちはレア（ラケルの姉）、またラケルの召使ビルハ及びレアの召使ジルパとヤコブの間の子どもで、ヨセフにとっては異母兄だった。父イスラエル（ヤコブを指す別名）は、ヨセフが年寄り子だったので、彼を兄たちよりもかわいがり、彼には特別裾の長い晴れ着を作ってやった。これは高貴な人が着る衣服で、腕の先、また足のくるぶしまで覆うものだった。ヤコブの偏愛の象徴であったこの晴れ着が、異母兄たちの憎しみをかう原因になった。複雑な家庭環境と父ヤコブのヨセフに対する偏愛がこの物語の背景にある。

ヨセフが見た二つの夢も兄たちの憎しみを増した。畑でヨセフの束がまっすぐに立った時、兄たちの束がその束の周りに集まってきて、ヨセフの束にひれ伏した。また太陽と月と十一の星がヨセフにひれ伏した。これらが単なる夢ではなく、神が将来ヤコブの家族に起こることを、夢を通して啓示されたことは後に明らかになる。

**〈エジプトへ売られたヨセフ (37:12～36)〉**

ある日ヨセフはヤコブの言いつけで、羊を飼っている兄たちの様子を見るために家をあとにした。ドタンにいた兄たちが遠くからヨセフを見つけたとき、日ごろから心にあった憎悪が一気に噴出した。「あれを殺して、穴の一つに投げ込もう。……あれの夢がどうなるか、見てやろう」（20）との言葉から、彼らが、ヨセフの夢が単なる夢ではないと感じていたこと、またその夢の実現を阻む目的で殺そうとしたことがわかる。長兄ルベンがヨセフを殺す計画に反対した。彼は、ヨセフを彼らの手から助け出して、父のもとへ帰したかったからである（22b）。兄たちはヨセフの晴れ着をはぎとり、穴の中に投げ入れた。彼を奴隷として売ることをユダが提案した。それでイシマエル人によってエジプトに連れ去られ、ファラオの宮廷の役人、ポティファルに売られ、彼の奴隷となった。

兄たちは父ヤコブを欺くために、ヨセフが死んだように見せかけようとして、雄山羊を殺して彼の晴れ着に塗り、家に帰ってヤコブに見せた。ヤコブは、ヨセフが野獣にかみ殺されてしまったと思い、悲しみ嘆いた。この悲しみは、ヨセフがエジプトで生きていることを聞くまで続いたと思われる。ヤコブはかつて兄エサウから長子の特権を奪うために、子山羊の肉と毛皮で父イサクを欺いた（27:15～17）。いま彼は雄山羊の血によって息子たちに欺かれることになる。

ヤコブの家族間の確執はまさに罪深い人間の姿そのものである。しかし神は、人間の悪意や小賢しい知恵を超えて、ご自分のご計画を歴史をとおして間違いなく遂行される全能者であられる。ヨセフは波乱万丈の人生をとおして、器として整えられていき、神の救いの歴史の中で大きく用いられた。私たちが神の御手にゆだね信仰によって歩むならば、神のご計画のなかで用いていただける。

（後藤公子）

テキスト 創世記 37章1～36節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問11, 13

### 〔単元のねらい〕

神様の救いの歴史を子どもたちと共にたどりたい。神様の救いの歴史の中にヨセフ物語、特にヨセフの苦難を位置付けると、それは、今日の子どもたちに対してどのようなメッセージを発信するようになるのかを考えたい。苦しみは悪であると考えられがちな世の中で、このヨセフ物語の学びを通じて、神様の子どもに与えられる苦しみが、ついには神様の子ども救いにとって神様にあって善とされるという摂理の信仰が養われればと願う。

## 「神さまのお約束が実現するために」

愛する子どもたち、おはようございます。  
暑い毎日ですが、元気ですか。今週も、みんなの心と体が神さまによって守られますように。  
ところで、先生は、聖書を読むとき、つくづく思うことがあります。本当に神さまって、すごいなあ！と。だって、先生なんか、歳のせいでしょうか？きのう、誰かと約束したことも、今日になったら、その約束をもう忘れてしまっていることが多いのです。しかし、神さまは違いますね。何千年もの昔になさったお約束をちゃんとおぼえていらして、まさかと思うようなことを用いられて、お約束を果たされるからです。その一番の例が、最初の人間アダムさんとエバさんが罪を犯して、神さまに背いてしまったすぐ後で、二人を誘惑した蛇、悪魔を裁かれる中で、お約束して下さったこと、つまり、「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く」（創世記3:15）、そうです、全世界の救い主を送るというお約束ですね。神さまは、何千年とかけて、このお約束の内容をもっとはっきりとなさって、少しずつ実現するようになさったわけです。

さあ、神さまは、このお約束を実現なさるために、世界中のたくさんの人の中から、たった一人、まずアブラハムさんをお選びになって、そのアブラハムさんからイサクさん、そして、ヤコブさんへと続く血筋を選ばれました。きょうからは、そ

のヤコブさんの11番目の息子、ヨセフさんのお話となりますが、実は、神さまは、ヨセフさんのひいおじいさんのアブラハムさんにこんなお約束をなさっておられたのです。「主はアブラムに言われた。『よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、四百年の間奴隷として仕え、苦しめられるであろう。しかしわたしは、彼らが奴隷として仕えるその国民を裁く。その後、彼らは多くの財産を携えて脱出するであろう。あなた自身は、長寿を全うして葬られ、安らかに先祖のもとに行く。ここに戻って来るのは、四代目の者たちである。それまでは、アモリ人の罪が極みに達しないからである』（創世記15:13～16）。アブラハムさんの子孫が、どこかの国で四百年の間奴隷になるというお約束ですが、アブラハムさんの子孫にとっては、奴隷になることなんか、とても大変なことで、嫌なことです。しかし、神さまは、全世界の救い主を送るために絶対に必要なこととして、このようなお約束をなさったわけです。そして、いよいよ、ヨセフさんの時になって、このお約束が実現へと向かうようになったのです。しかし、誰も、そんなことは夢にも思っていないませんでした。また、私たちも、今朝の聖書箇所だけを読むならば、そのように話が進んで行くなんて思うことができません。だって、ここに書いてあることは、ヨセフさんにとっては、本当に災難だからです。

ヨセフさんが17歳の時のことでした。ヨセフさんのお仕事は、お兄さんたちと一緒に羊のお世話をするのでした。ところで、ヨセフさんは、ヤコブさんが歳を取ってから生まれた子どもだったので、お父さんにとてもかわいがられたのでした。それで、お兄さんたちは、弟が嫌いでたまりませんでした。また、ヨセフさんは、ヨセフさんで、お兄さんたちのことをお父さんにいちいち告げ口していましたから、そのことでも、お兄さんたちは、ヨセフさんのことが嫌いで嫌いでたまらなかつたことでしょう。そんなヨセフさんの態度からだと、これから起こることは、まったく予想できない災難ではなく、自分でまいた種が原因と言えるかも知れませんね。

ある日、お兄さんたちの憎しみが殺意へと変わることが起こったのです。ヨセフさん、妙な夢を見ました。畑で、お兄さんたちの束が、ヨセフさんの束にひれ伏したり、太陽と月と11の星が、ヨセフさんにひれ伏したりする夢です。お兄さんたちは、その夢のことを聞いて、何を意味しているのか、ピーンと来ました。お兄さんたちが、そればかりか、お父さん、お母さんも、ヨセフさんにひれ伏すということです。お兄さんたちは、この夢のことを聞いて、はらわたがにえくりかえるようでした。そして、ついにヨセフさんを殺して、野原の穴に放り込んで、お父さんには、野獣に喰い殺されたと報告しようと相談しました。しかし、長男のルベンさん、四男のユダさんは、ヨセフさんを殺すことに反対しましたから、ヨセフさんは殺されずに、生きてまま、野原の穴に放り込まれてしまいました。後になって、長男のルベンさんが、ヨセフさんを穴から助けようとして穴の所に行ったのですが、もう既にヨセフさんは奴隷とし

て売られて、エジプトに連れて行かれてしまっていたのでした。

エジプトへと連れて行かれたヨセフさんは、その後、どうなったのかというと、エジプトの王様にお仕えするお役人、ポティファルさんの奴隷となりました。ポティファルさんは、侍従長ですから、王様にお仕えするお役人の中でも一番偉い人です。そういう人の奴隷となったわけです。

さて、こうして、ヨセフさん、エジプトで、たった一人、奴隷としての生活を始めたのですが、当然、ヨセフさんは、神さまのお約束のために自分が用いられているなんて、夢にも思っていませんでした。もしかしたら、お兄さんたちに穴に突き落とされた時から、「神さま、どうして、一緒にいてくださるはずなのに、わたしを守ってくださらなかったのですか!」と、神さまに何度も何度も訴えていたかもしれません。しかし、決して、神さまは、ヨセフさんから遠く離れてしまわれたわけではありませんでした。神さまがヨセフさんといつも一緒だったからこそ、お兄さんたちに穴に突き落とされて、奴隷としてエジプトに連れて行かれ、エジプトの王様の侍従長ポティファルにお仕えするようになったのでした。すべては、ヨセフさんと一緒におられる神さまのお導きによることでした。神さまは、ヨセフさんの災難をも、ヨセフさん自身にとって、さらにはヨセフさんの家族のみんなにとって、さらには今の私たちにとって、ためになる善いこととしてくださったのです。全世界の救い主イエス様を送るために絶対に必要な準備としてくださったのです。この世界と時間のすべてをお考えのままにご支配なさる、神さまを心から賛美しましょう。(長谷川潤)

---

[今週の暗唱聖句] コリントの信徒への手紙 二 1章20節

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。

---



## 〈ねらい〉

ドラマチックなヨセフ物語のはじまりです。神さまがどんな時も守ってくださることを覚えて祈れたらと思います。

## 〈暗唱聖句〉

「父はこう言って、ヨセフのために泣いた」。

## 〈展開例〉

①ヤコブさんには12人の息子がいました。その中でもヨセフは年をとってからの子だったので、どの兄弟よりもかわいがりました。でも、兄たちにはそれがとても憎らしく、ヨセフとは話もしたくないと思っていました。そんなある日、ヨセフは兄たちに夢の話をしました。

②「兄さん、兄さん。私の夢の話を聞いてください。畑で私たちが束を結わえていると、突然私の束が起き上がり、兄さんたちの束がわたしの束の前に来てひれ伏しました」。それを聞いた兄たちは、もうかんかんです。「なに、お前が私たちの王になって、お前にひれ伏すというのか」。兄たちはヨセフをますます憎みました。

③また別の夢を見たときはヤコブさんにも話をしました。「お父さん、太陽と月と11の星が私にひれ伏している夢を見ました」。ヤコブさんは、ヤコブをしかりましたが、このことを心に留めました。

④ある日、遠くまで羊の群れを飼っていた兄たちの様子を知ろうと、ヤコブはヨセフに見てきてくれと頼みました。ヨセフは言われたとおり、兄たちのいるところまでやってきました。

⑤「あれはヨセフじゃないか。また我々を馬鹿に

するためにやってきたのか。いっそのこと殺してしまおう。そしてあれの夢がどうなるか、見てやろう。どうだ」。兄たちは相談しました。

⑥しかし、長男のルベンがヨセフを助けようとして言いました。「私たちが殺すのはよそう。それより、この井戸の投げ込んでしまったらどうだ」。他の兄たちもこの意見に賛成しました。彼らはヨセフがやってくると、服を剥ぎ取り、井戸の中に投げ込みました。でもルベンは、後で出て助け出そうと思っていたのでした。

⑦しかし、兄たちが食事をしている間に、井戸を通りかかった商人たちがヨセフを井戸から引き上げ、エジプトに売り飛ばしてしまったのです。ルベンはヨセフがいなくて気づくと嘆きました。兄弟たちは自分たちのしたことを隠そうと、ヨセフの服をやぎの血で染めて、父のところに持って行って、「この服は多分ヨセフのだと思いますけれども、きっと野獣に襲われたのです」と言いました。

⑧ヤコブは悲しみのあまり自分の着ている服を引き裂き、「私もあのところへ行く」と言って、ヨセフのために毎日泣きました。この後、エジプトに売られたヨセフさんはどうなるのでしょうか。またヤコブさんの悲しみはいやされないのでしょうか。大丈夫。神さまはヨセフさんと一緒におられます。それに神さまを信じる人が悲しんでいるのを神さまは必ずいやしてくださいます。

## 〈お祈り〉

天の神さま。どうかヨセフさんをお守りください。そして悲しんでいるヤコブさんをお守りください。そして私たちもお守りください。アーメン。





**〈ねらい〉**

神様のご支配に信頼する。

**〈はじめに〉**

夏休みも一ヶ月が過ぎました。夏休みの間のこのクラスはいかがでしたか？ 暑い中で分級の尊いご奉仕を感謝します。小学校は夏休みがありますが、日曜学校にはお休みはありません。欧米の教会ではお休みもあつたりしますが。教えるという奉仕にお休みはありませんが、奉仕者のリフレッシュを必要に覚えます。奉仕者同志、祈りに覚え、支え合い、教え合い、お互いに気遣いあいましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①ヨセフは、お父さんヤコブからかわいがられていましたか。
- ②ヨセフさんはどんな服を着ていましたか。
- ③他の兄弟のお兄さんたちは、ヨセフさんのことが好きでしたか。
- ④それは、なぜでしょうか。

**〈展開例〉**

アブラハムさん、イサクさん、そしてヤコブさんと旧約のお話がずっと続いています。私たちには、聖書が与えられていますから、一人ひとりが神様からどんな道を歩まされてきたか、全部知ることが出来ます。この先、この人にどんなことが起きるのか、どうしたのか、どんな失敗をしたのか、どんないいことがあったのか。

でも、今の私たちは、自分の明日のこと、一週間先のこと、一年先のこと未来のこと、何が起

るのか、自分はどうなるのか確かなことはわかりませんね。だから先のことを心配に思ったり、何でもこんなことがあるんだろうと悩んだりします。

今日のヨセフさんもそうです。ヨセフさんは17歳でした。みなさんより大きいですね。兄弟が上に10人、そして弟が一人いたので、全部で12人でした。でもお父さんヤコブが随分年をとってから生まれたヨセフさんはとてもとてもヤコブさんが大切にかわいがっていました。ほかの子どもたちを嫌っているわけではありません。でもヨセフさんは特別扱いだったのです。当然、上のお兄さんは面白くありませんよね。いつかいつか、ヨセフさんをやっつけてやろうと思ってました。

ある日、ヨセフさんは不思議な夢を見て、そのことをお兄さんに話しました。その夢の内容は、お兄さんたちの心をますます怒らせるような内容で、ヨセフさんにみんながひれ伏すというものでした。お兄さんたちの怒りは頂点で、とうとう、殺しはしませんでした。ヨセフさんを穴に突き落として、お父さんにはヨセフさんは動物に襲われたという、うその報告をしました。ヤコブさんの悲しみはどれほどだったでしょう。

ヨセフさんは、通りすがりのミディアン人に引き上げられエジプトに奴隷として売られてしまいました。でもヨセフさんはエジプトで一生懸命働きました。神様なぜこんな目にあうのですか、とヨセフさんは悲しい時もあったかもしれませんが、でもこれには、深い深い神様の救いのご計画があったのです。私たちにはすぐには分からないことでも、すべてご存知の神様が私の神様だということを知りましょう。

**〈お祈り〉**

私に神様を信頼する信仰を与えてください。



## 〈ねらい①〉

聖書において、神の摂理を教える最大のテキストはヨセフ物語ですが、その「教え」を抽出・精錬して生み出された箴言の言葉は、子どもたちにも必ずや深い印象を残すカテキスムです。

## 〈展開例①〉

人の歩む道は主の御目の前にある。  
その道を主はすべて計っておられる。

(箴言5:21)

主は御旨にそってすべてのことをされる。  
逆らう者をも災いの日のために造られる。

(箴言16:4)

人間の心は自分の道を計画する。  
主が一步一步を備えてくださる。

(箴言16:9)

くじはひざの上に投げるが  
ふさわしい定めはすべて主から与えられる。  
(箴言16:33)

人の一步一步を定めるのは主である。  
人は自らの道について何を理解していようか。  
(箴言20:24)

## 〈ねらい②〉

「すべてのことに意味がある」と信じて生きる、  
信仰者の根源的な幸いを伝える。

## 〈展開例②〉

お兄さんたちの悪だくらみによって、エジプトに連れて行かれてしまったヨセフさん。かわいそうだね。エジプトでも色んな大変なことがありますが、やがて王様に気に入られてヨセフさんが総理大臣になっていくという、とってもスケールの大きなお話が、この後に続きます。でもね、お話はそれで終りではありません。ヨセフさんの後、イスラエルの人たちはエジプトに住むようになりますが、やがてエジプトのファラオから憎まれて、

奴隷として追いつめられて苦みの叫びをあげます。そこに登場するのがモーセです。モーセさんによってエジプトから脱出するという救いの大きな物語が続くわけです。さらに言えば、それだけじゃないよ。その後カナンの地で、ダビデ王が王国を築き、そしてそのダビデの家からやがてイエス様という救い主が与えられます。そこが救いのご計画のクライマックスです。そう考えると、今日聞いたお話は、まだまだ始まりの始まりだね。

でもこの始まりの始まりからもうすでに、神様はすべてのことを考えつくして用意しておられました。お兄さんたちの悪だくらみによってヨセフさんはエジプトに連れて行かれてしまいましたが、でもこの出来事がなければ、その後の大きな物語は起こらないのです。それは偶然ではなく、神様が定めておられたことです。

このヨセフ物語には神様が直接登場なさることはありません。でもその大きな手がすべてを包んでいます。私たちの人生にも、神様が直接登場なさって、言葉を与えてくださることなどありません。でもいつでも神様は、私たちを見ていてくださって、すべてを用意してくださいます。私たちの人生に起こるすべてのことには意味があります。その意味は、神様が知っておられます。私たちの思いをこえて、神様は、終りの時の神の国の完成に向けて、大きな救いの物語を進めておられます。そのために必要な一つひとつのことを、私たちのために定めてくださっています。ヨセフが味わったような、痛みや辛さを味わうこともあるでしょう。でもすべては、大きな物語の完成(私たちの救いの完成)のために、意味のあることなのです。

## 〈祈り〉

神様、あなたのもとで、すべてのことに意味があると信じる幸いを、もっと教えてください。

## 〈ねらい〉

歴史を支配される神様の摂理のスケールの大きさを覚える。

## 〈展開例〉

Q. 皆は「自分は一体、何をするために生まれて来たんだろう」、こんな疑問を感じたことはないだろうか。思春期というのは、こういうでっかい謎が気になったりする時期だと思う。むしろ、自分の一生について時間をかけて考えられる今の時期に思う存分考えて欲しい。みんなは中学生なりに色々なことをしながら自分を探していると思う。学校の課題。塾のノルマ。部活に習いごと。恋愛、友だち。色々あると思うが、じゃあ、君は勉強するために生まれて来たのか？ 部活をするために生まれて来たのか？ 習い事をするために生まれて来たのか？ 恋愛のために生まれて来たのか。抱えているモノは人それぞれ。とはいえ、今の君たちはまだ何者でもないように感じるかもしれない。

① 今日から始まったヨセフ物語には様々な人たちが登場するが、神様はそうした色々な人の、色々な人生を用いて、神様が約束を実現されていく様子をヨセフの人生に現わされる。アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そして、これらの人たちと一緒に時代を生きた数限りない人たち。こうした人たちがそれぞれに生きて、神様の約束が少しずつ実現してく。神様はこういう仕方、一人の一生だけでなく、世界が始まってから完成するまでの「歴史」というめっちゃめっちゃ規模のでかいモノを、御自分の計画に従って整えて、導いていく。そんな中で君たちは何のために生まれてきたのか。具体的な形はこれから少しずつ形づくれば良い。ただ、今日覚えて欲しいのは君の人生には間違いなく「何かのため」

という目的と意味があるということ。そして、いつかその目的のために存分に力を発揮するために、皆の「今」には図りきれない意味がある。

② ヨセフは一見、苦しみのどん底のような人生を送る。家族との別離。兄弟からの憎悪。奴隷という束縛。しかし、ヨセフの苦しみは自分の一族すべて、さらにはエジプトという当時のトップ大国全体を救いへと導くために必要な苦しみであった。ヨセフの若い時の苦しみは、ヨセフ自身の未来のため、エジプトという大きな社会が祝福されるため、そして、ヨセフの後の人々の救いという今後の歴史のため、その歴史を導かれる神様のために無くてはならないものであった。

③ 君が何をするために生まれて来たのか。それは他人にはわからない。でも、君の人生はヨセフを導き、歴史を導く神様の愛の眼差しの内にある。君は自分のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は、社会のためだけに生まれて来たわけじゃない。君は神様が世界を祝福へと導くその立役者となるために生まれて来た。君はたまたま生まれた、いてもいなくても同じな、そんな空しい存在ではない。君が生まれるのは、この時代の、この国でなくてはならなかった。

君は世界や社会の中でちっぽけな存在ではない。君は広大な世界と壮大な歴史を舞台に飛び回る神様が選り出したメインキャストである。神様の目線で自分を見つめるとき、自分という存在は、自分が思う以上にかけがえのない存在であるということを感じて欲しい。

## 〈祈り〉

世界と時間を導く神様、あなたの創られるこの世界で生きられることを感謝します。アーメン。

**〈背景と文脈〉**

神は、ポティファルに仕えるヨセフと共におられ、彼の働きを祝福された。しかしヨセフは、ポティファルの妻の誘惑を退けたことから、新しい試練にあう。妻の偽りの言葉を信じたポティファルは、ヨセフを捕えて、王の囚人のための監獄に彼を入れた。しかし主はヨセフと共におられ、恵みを与えられたので、ヨセフは監守長の信任を得た。

この後、ファラオの給仕役の長と料理役の長が王に過ちを犯し、ヨセフのいた獄に投獄された。二人はそれぞれ夢を見たが、その意味を理解できないでいた。ヨセフは彼らの夢を解き明かし、それが現実になった。彼は、職に復帰することになった給仕役の長に、無実の罪で投獄されていることをファラオに告げ、解放されるよう取り計らってほしい、と依頼した。しかし、給仕役の長はそのヨセフの願いを忘れてしまった。そのため、その後2年、彼はなお囚人として獄で生活する。しかし、これが神の摂理だったことが、今日の箇所から明らかになる。

**〈ファラオの夢を解くヨセフ (41:1～36)〉**

ヨセフが給仕役の長の夢を解いたその2年後、ファラオはふたつの夢を見た。やせ細った七頭の雌牛が、よく肥えた七頭の雌牛を食い尽した。また、実の入っていない干からびた七つの穂が、太って実の入った七つの穂をのみ込んでしまった。これらの夢を見たファラオはひどく胸が騒ぎ、エジプト中の魔術師と賢者をすべて呼び集め、解き明かしを求めたが、誰にもそれができなかった。

そのとき、給仕役の長は、ヨセフがかつて獄中で、彼と料理役の長の夢を解き、その通りになったことを思い出し、ファラオに彼のことを告げた。ヨセフは獄から連れ出され、ファラオの前に出た。神の時が来た。

王はふたつの夢をヨセフに話した。ヨセフは、王が見た夢は、神がこれからなさろうとしておら

れることを、ファラオに告げるものであり、ふたつの夢の意味は同じであること、また神がそれを間もなく起こそうと決定されていることを告げた。それは7年の豊作のあとに7年の飢饉の年が来ることの予言であり、ヨセフはその対策として何をなすべきかファラオに進言した。

**〈宰相になったヨセフ (41:37～44)〉**

ファラオはヨセフに神の霊が宿っていることを認め、彼をエジプト国民のもっとも上に立つ宰相として任命した。ファラオの言葉、「お前の許しなしには、このエジプト全国で、だれも、手足を上げてはならない」(44)は、ヨセフが王の次の位の支配者であり、すべての国民を治める者とされたことを示唆する。囚人の身分だったヨセフは、神の時が来た時、神によって引き上げられた。そのことが、父ヤコブの一族を救うために、神が用意された道であったことが、42章以下の記事からわかる。

ヨセフの人生の中で、神は彼に伴い、恵みを与えられた。神はポティファルの奴隷となったヨセフと共におられ、その祝福は彼のゆえにポティファルの家、財産にも及んだ(39:2～5)。また神は、無実の罪によって投獄されたヨセフと共におられ、恵みを与え、監守長の目にかなうように導かれた(39:21)。

そのように、神はヨセフと共におられ、彼の人生を導かれた。ヨセフの夢の解き明かしを聞いたファラオは、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と感嘆している(41:38)。ヨセフは自分の境遇を恨むことなく、神を信じ、そのような環境の中で彼を導いておられる神に自分自身をゆだねた。神はヨセフと共におられ、祝福され、またその祝福は、周囲の人々にも及んだのである。神は彼を神の救済史のなかで用いられたばかりでなく、異教の地でご自身の証人としても用いられた。(後藤公子)

テキスト 創世記 41章1～44節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問14

---

### 〔単元のねらい〕

神様がどんな時もヨセフと共におられた、このインマヌエルから、神様の豊かな祝福がヨセフ自身はもちろん、周りの未信者の人々にも及ぼされていた事実を教えたい。子どもたちが、この事実を知ること、神様の子どもとされている自分の存在意義をいよいよおぼえて、日々、勇気をもって歩めればと願う。

---

## 「神さまはどんな時も一緒」

---

愛する子どもたち、おはようございます。

毎日暑い日が続いていますが、森や林では、ツクツクボウシが鳴くようになりました。先生は、みんなみたいに小学生の頃、ツクツクボウシが鳴くようになると、ツクツクボウシが「夏休みもうすぐ終わりだから、宿題頑張っ！」とやっているように聞こえて、ちょっとあせったものです。みんなは、どうですか。

さあ、この夏休みは、元気に過ごせましたか。もしかしたら、クーラーかけっぱなしで寝て、寝冷えしちゃったことがあったかも知れませんね。そして、何日間か、高い熱が出て、苦しい思いをしたかも知れません。そんな病気の時、みんなは、どう思うでしょうか。確かにクーラーかけっぱなしが原因で、体をこわしてしまったわけだけれど、神さまが見捨てられたので、病気になっちゃったのかな？ それで、苦しい思いをしているのかな？ と思ったことないでしょうか。神さまが、どこかに行ってしまったので、病気になったのでしょうか。きょうは、たとえば、病気で苦しい時とか、神さまは、どこにおられるのかをヨセフさんのお話から考えてみましょう。

ヨセフさん、お兄さんたちに嫌われて、遠い遠いエジプトの国へと奴隷として売られて連れて行かれました。そして、エジプトの王様にお仕える侍従長、ポティファルさんの奴隷として働くことになりました。ヨセフさんは、もしかしたら、お兄さんたちに穴に突き落とされた時から、「神

さま、どうして、一緒にいてくださるはずなのに、わたしを守ってくださらなかったのですか！」と、神さまに何度も何度も訴えていたかも知れませんが、しかし、神さまは、ヨセフさんから、ひとときも離れられることなく、いつも一緒だったのです。創世記の第39章には、そのことが繰り返し書いてあります。たとえば、「主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家にいた。主が共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計らわれるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた」(39:2～4)。「しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしめるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計らわれたからである」(39:21～23)。神さまがいつもヨセフさんと一緒だったので、ヨセフさんだけでなく、ポティファルさんの家も豊かに祝福されたのでした。それで、まず、ヨセフさんは、ポティファルさんの家のことを何でも任せられました。ところで、ヨセフさんは、とてもイケメンだったようです。ある日、ポティファルさんの奥さんがヨセフさんを誘惑しました。しかし、神さまが一緒でしたから、それを退

けることができましたが、ポティファルさんに誤解されてしまい、牢屋に入れられてしまったのです。それでも、神さまがヨセフさんと一緒だったので、牢屋でも、牢屋を見張るお役人から、牢屋のことをすべて任せられました。その次の第40章には、神さまがヨセフさんといつも一緒だったので、ヨセフさんが、人の見た夢の意味がわかるようになったことが書いてあります。それで、王様のご機嫌を損ねるようなことをしてかして、同じ牢屋に入れられた給仕長と料理長の夢の意味を教えます。それぞれの夢は、三日後に給仕長は許されて元のお仕事に戻るけれども、料理長は許されずに死刑にされるといった意味でした。実際、三日後にその通りになったのですが、ヨセフさんは、給仕長に、その通りになって幸せになった時には、私のことを思い出して、王様に牢屋から出すように取り計らってくださいとお願いしました。ところが、給仕長は、つい、ヨセフさんのことを忘れてしまったのです。

それから、二年が経った様子です。王様が奇妙な夢を見ました。突然、川から、太った七頭の雌牛が上がって来て、岸辺で草を食べ始めるのです。そうしたら、やせた七頭の雌牛が上がって来て、さっきの太った七頭の雌牛を食べてしまいます。また、こんな奇妙な夢も見ました。一本の茎から豊かに実を結んだ七本の穂が生えて来たのです。そうしたら、実のない、ひからびた七本の穂が生えて来て、さっきの豊かに実を結んだ七本の穂を飲み込んでしまったのです。王様は、国中の魔術師なんか、夢の意味を問いましたが、誰ひとり分かりません。すると、給仕長が、ヨセフさんのことを思い出して、王様に、どんな夢でもその意味がわかるヘブライ人が牢屋にいることを告げま

した。早速、王様は、ヨセフさんを牢屋から出して、連れて来させ、夢の意味を問います。すると、ヨセフさん、一緒にいてくださる神さまが教えてくださったこととして、その夢の意味を教えます。その奇妙な夢は、エジプトの国中に七年間もたらされる豊作と、それに続く七年間、国中を襲う飢饉のことだったのです。そして、ヨセフさんは、王様に七年間の飢饉に備えるために、食べ物で七年分蓄えるようにアドバイスもしたのです。

王様は、ヨセフさんのことがたいそう気に入って、ヨセフさんをエジプトの国のナンバーツー、総理大臣にしたのでした。最初、野原の穴に、お兄さんたちによって突き落とされた時には、真っ暗な中で、これからどうなるのだろうか？神さまはどこに行ってしまったのだろうか？と思ったに違いありません。そして、ヨセフさんは奴隷としてエジプトに連れて行かれましたが、神さまは決してヨセフさんから離れることなく、いつも一緒におられました。そして、たとえ牢屋に入れられても一緒におられて、ついにヨセフさんをエジプトの国の総理大臣になるようにお導きくださったのです。

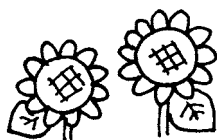
このように神さまは、たとえば病気で苦しい時も一緒にいてくださいます。悲しい時、つらい時も、神さまは一緒です。苦しい時、悲しい時、つらい時ばかりではありません。楽しい時も、いやいや普通の時も、神さまは一緒にいて私たちを祝福してくださいます。私たちだけでなく、私たちの周りの人たち、お友だちも祝福してくださいます。今週も、いつも、神さまは一緒。どんな時も一緒にいてくださる神さまに信頼し、感謝して生活しましょう。(長谷川潤)

---

[今週の暗唱聖句] 創世記 39章2節

主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。

---



## 〈ねらい〉

困難にあっても、自分の力ではなく神さまが道を開いて下さることを信じられるように。

## 〈暗唱聖句〉

「わたしではありません。神さまが王さまの幸について告げられるのです」。

## 〈展開例〉

- ① エジプトに売られていったヨセフは、なんと無実の罪で牢屋に入れられました。神さまはもうヨセフを見捨てられたのでしょうか。そうではありません。神さまは牢屋の中でもヨセフさんとともにおられ、そこから素晴らしい道を用意してくださっているのです。
- ② ある日、エジプトの王さまの給仕役と料理役が、王さまに怒られて牢屋に入れられました。二人はこの後どうなるのか心配でたまりません。そして二人は同じ夜に夢を見ました。給仕役の夢はこうです。
- ③ 一本のぶどうの木に三本のつるがあり、それがすくすく大きくなって、ぶどうが取れました。私はそれを王さまの杯に注ぎました。ヨセフはそれを聞いて解き明かしをしました。「三日たてば、あなたは元の仕事に戻ることができます。そのときは、どうか私のことも思い出してください」。
- ④ 三日後、ヨセフの解き明かしたとおり給仕役は解放されました。でもヨセフのことは、すっかり忘れてしまいました。
- ⑤ それから、二年たちました。今度は王さまが夢を見ました。「誰か、私の夢を解き明かしてくれる者はいないだろうか。エジプト中の魔術師と賢者を集めて聞いたが、誰にも分からなかった。ああ、こまった。心がさわぐ。きっと何か大切な知らせに違いないのに」。それを聞いた、あの給仕役はヨセフのことを思い出して、「きっと、ヨセフなら分かります」と王さまに言いま

した。

- ⑥ 早速、ヨセフは王さまの前に出されました。「お前は夢を解き明かすことができるそうだな」。王さまが尋ねますと、ヨセフは「私ではありません。神さまが王さまの幸せのために告げられるのです」。王さまは安心して夢のことを話し始めました。
- ⑦ 「ナイル川のほとりに七頭のよく太った牛が上がってきた後、七頭の醜いやせた牛が上がってきて、最初の太った七頭を食べてしまった。また、一本の茎から七つのよく実の入った穂が出てきた後、やせて干からびた七つの穂が出てきて、よく実った七つの穂を飲み込んでしまった。この意味を告げるものが誰もいないのだ。おまえには分かるか？」ヨセフは答えて言いました。「七頭の太った牛と七つのよく実った穂は、エジプトの国に7年間の大豊作があることを表し、七頭のやせた牛と七つの干からびた穂は、その後起こる大飢饉を表しています。だから最初の七年間の豊作の時に食べ物を蓄えておけば、後の七年間の飢饉の時も、エジプトでは誰も困ることはありません」。
- ⑧ 王さまは驚きながら、「ヨセフほど神さまの霊が宿っている人は他にいない。こんなに神さまに守られている者がエジプトのために働いてくれば、この国は神さまに守られることになるであろう」と言って、ヨセフを総理大臣に任命しました。そしてヨセフによって大飢饉のときも国中の人が守られました。でもヨセフはこう言うでしょう。「私ではなく、神さまがすべての人の幸せのために告げられたのです」。

## 〈お祈り〉

苦しい時も、いつも一緒にいて守ってくださる神さま。すべての人が幸せのために告げられた聖書の言葉を私にもっと教えてください。そしてすべての人が幸せになりますように、お守りください。アーメン。

### 〈ねらい〉

どんな時も共におられる神様を覚え、自分だけでなく周りのためにも祈ることができる子どもになりたい。

### 〈はじめに〉

いよいよ夏休みも数日で終わってしまいます。すでに学校が始まっている子どもたちもいるかもしれません。子どもたちの様子はいかがでしょうか。宿題に追われていたり、緊張や不安があったりするかもしれません。子どもたちの心のうちを聞く時間もちましましょう。そして、全てを神様に委ねて安心してこの一週間をすごすことができるよう共に祈りましょう。

### 〈御言葉に聴きましょう〉

- ①誰が夢を見ましたか。
- ②最初に川から上がってきた雌牛は、太っていましたか。やせていましたか。
- ③次に来た雌牛はどうでしたか。
- ④醜い、やせた雌牛はどうなりましたか。

### 〈展開例〉

ヨセフさんのお話が続きます。お父さんに愛されていたのに、兄弟からは嫌われていたヨセフさんは、悲しい思いをしましたね。お兄さんたちに見捨てられ、遠い国に奴隷として連れて行かれました。家族から離れてしまって一人ぼっちになってしまいました。でもそんなヨセフさんのそばから離れないでずっと一緒にいてくださった方、神様がおられました。どんな時も一緒にいてくださいました。この神様に応えて、ヨセフさんも一生

懸命自分に当てられたお仕事朝から晩まで心を込めてしました。何年も何年も働きました。だんだん周りの人から、このヨセフさんは他の人と違うぞ、よく仕事ができるぞ、信頼する人が増えてきました。

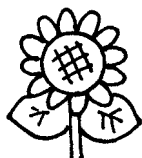
ある日、この国の王様が夢を見て、その夢の意味を教えるという大きな仕事がヨセフさんに頼られました。ヨセフさんはいつものように神様から力をいただいて、王様の見た夢の意味を王様にお伝えすることができました、そのお陰で、このエジプトの国の大勢の人の生活、命を守ることができました。王様はヨセフさんを信頼して、この国の二番目に偉い人、総理大臣という大事なお仕事をヨセフさんに与えました。

この国に来たときは奴隷として売られて来て、誰一人知った人もいなくて、しかも兄弟から嫌われたという心に大きな傷をもっていたヨセフさんも、今では総理大臣です。誰がこんな人になると思っていたでしょう。もちろんお兄さんたちだって想像もしていなかったこと、誰も知らないことが、ヨセフさんに起こっていたのですね。でも、このことも神様の大きな計画の中にあっただけです。

私たちが悲しい時、いやだと思ふ時、なぜ？と思ふ時があります。でもどんなときでもヨセフさんのそばに神様がいてくださった、その同じ神様が私たちのそばに今もいてくださいます。勇気が出てきますね。私たちの回りの人たちはどうでしょう。私だけでなく、お友だちにも、家族に人にも、この神様が共にいてくださる、この祝福をお伝えしましょう。

### 〈お祈り〉

神様、どんなときにも共にいてくださりありがとうございます。





**〈ねらい①〉**

前回と同じように、思いを超えた、神の救いの物語のスケールの大きさに、共に驚く。

**〈展開例①〉**

聖書の中でも飛びぬけて面白いテキストですから、聖書物語を丁寧に確認するだけで十分に意義深いと思います。礼拝における説教者が、時間の都合で十分に語れないような場合に、分級でフォローなさればいいと思います。その際は、説教展開例を参考になさってください。紙芝居や絵本も充実していると思います。

**〈ねらい②〉**

主を信じる者は、決して主から見捨てられることはないという確信を伝える。

**〈展開例②〉**

「強く、また雄々しくあれ。恐れてはならない。彼らのゆえにうろたえてはならない。あなたの神、主は、あなたと共に歩まれる。あなたを見放すことも、見捨てられることもない。」（申命記31:6）

説教展開例にあるように、ヨセフはエジプトで様々な苦悩を味わいましたが、いつも神様が共にいてくださったので、ことがうまく運びました。でも、そんなヨセフさんであっても、もう自分は神様から見捨てられてしまったと、悲しみに沈んでしまった時はあったでしょう。お兄さんたちへの恨みと怒りで、心が真っ暗になった時もあったかもしれません。やつらのせいで、おれはこんな惨めな暮らしをしなければいけない……と、考えてもおかしくありません。でも考えてみれば、元々はヨセフも悪かったのですかね。お父さんにひい

きされているのをいいことに、お兄さんたちに対しても高慢にふるまって、怒らせているのにも気付かない。無神経なジコチュー人間でした。

どちらも罪人でした。罪人同士が憎しみ合って、傷つけあった末に、ヨセフの惨めな牢獄生活があるのです。それは罪の牢獄と言ってもいいですね。罪に支配された人間が、神様の御心からまったく遠く離れた思いと行いによって傷を深め、罪の牢獄に捕らえられて行き詰っているのです。神様から「もうお前のことなんか知らない」って言われてもおかしくない、むしろ言われるのが当然です。それはヨセフだけじゃない。私たちはみんな、神様から見捨てられて当然の者たちです。行き詰った罪人です。

でも神様は、そんなヨセフのことを、私たちのことを、どこまでも見捨てないで、共にいてくださる方なのだと、今日の御言葉は教えてくれます。イエス様を信じるなら、私たちは神様から絶対に見捨てられることはありません。イエス様が、私たちの代わりに見捨てられてくださったのですから、もう私たちが見捨てられることはありません。皆さんにも、ヨセフのように行き詰る時があるでしょう。考えることもできない悲劇が襲う時もあります。でも神様は、絶対にあなたを見捨ててはいません。その苦しみにも必ず意味があります。

**〈祈り〉**

ヨセフとどこまでも共にいてくださった神様、どうか私たちといつまでも共にいてください。思いもよらない悲しみに襲われる時にも、考えたこともなかった苦しみを味わう時にも、私たちの目を開いてくださって、あなたが共にいてくださることを教えてください。どんな時も、あなたを信じ、強く雄々しくあることができますように。



## 〈ねらい〉

常に共にいてくださる主を覚える。

## 〈展開例〉

- ①「神様が私たちと共におられる」小さい頃から教会に来ていた人には聞きなれた言葉だと思ふ。教会は、世界を創り、世界と歴史を導く神様が皆と一緒にいる、という世間の人からすれば信じられないことを大真面目で告白する。

Q. みんなは、どうだろう？ 自分の生活に神様は確かに一緒にいてくださる、こんな風に感じたことがあるだろうか？ 反対に、そんなすごい方が一緒にいるにしては、自分の毎日は余りにしょぼい。本当に神様は私と一緒にいるのだろうか？ こんな疑問を感じたことはないか？

- ②今日、聞いたエジプトで奴隷として働くヨセフのサクセスストーリーはただの、成り上がりの深い話ではない。「主と共におられた」のでヨセフは、はた目にはつらそうな状況の中でも道が切り開かれていった。ナレーションはそう語るが、ヨセフの胸中がどうであったかはわからない。聖書は、ヨセフがどう感じたかではなく、「主はヨセフと共にいた」という事実をただ述べる。しかし、神様が共にいられるということは、まったく実感のないものであるわけではない。ヨセフは与えられた知恵や夢解きという才能を用いて一つひとつの状況を一生懸命に生きていく中で、神様が共におられることを確かに示された。どんな困難な中でも常にポジティブでいたヨセフの信仰は、そうした歩みの中で培われていった。信じたから助けられたのではない。助けてくださったから信じてきたのである。苦しい状況であったがヨセフは確かに神様の力によって守られていった。未来はヨセフの前に閉じていない。希望は常に彼の

前にあった。

- ③「神様が自分と一緒にいてくださる」この信仰は神様に守られる中で養われる。守られる道のりを振り返るときに初めて気がつくことも多いだろう。しかし、神様に助けられ祝福され続ける日々の積み重ねが、この素朴だが力強い信仰を育む。そして、まったくの真顔で「ああ、神様は私の毎日に確かに共にいてくださる」と思える時、どんな困難の中にあっても決して絶望しない、希望に満ちた生き様を君の人生につくりあげる。

- ④ヨセフほどの劇的な状況ではないにしろ、君の人生で何かがうまく運ぶとき、そこには神様の導きが確実にある。神様と共に生きることで受ける祝福は幅が広い。命の危機から救われるような大きなことかもしれないし、毎日の中の些細なことかもしれない。それが大きなことであれ小さなことであれ、よく目を凝らせば神様の恵みは君の毎日に溢れかえっているはず。そうやって、日々の恵みを見つめ続けることによって、目を凝らしても神様の恵みがわからないような苦しみの中で、「大丈夫。神様は絶対に一緒にいてくださる」こう信じる信仰が皆に与えられることを心から願う。将来に役立つことを色々と身につけるこの時期に、どんな人生を歩むにせよ、「神様が私と一緒にいてくださる」この信仰をほど重要なことはない。苦難にあっても絶望しない「主と共におられる」確信が与えられるように願い求めて欲しい。

## 〈祈り〉

私たちと共にいてくださる神様。感謝します。どんな時にもそのことを信じられるようにしてください。アーメン。

**〈背景と文脈〉**

ヨセフが解き明かしたように、7年の豊作のあと、7年の飢饉が来た。「飢饉は世界各地に及んだ」(41:56)。それにより「世界各地の人々も、穀物を買いにエジプトのヨセフのもとにやってくるようになった」(41:57)。その中にヤコブの息子たちもいた。ヨセフはすぐ兄たちの一行であると気づいたが、彼らはヨセフとは気づかなかった。物語がどのように展開していったかについては42～44章を参照のこと。

二度目に穀物を買うためにヨセフのもとに来た兄たちに、ヨセフは自分の身を明かした。「わたしはあなたがたがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。……神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」(45:4～8)。

ヨセフのこの言葉は、ヨセフ物語のクライマックスともいえるべきものである。やがてヤコブ一族はヨセフの招きによってエジプトに下ってくる。ヤコブはヨセフとの再会を果たし、その後、エジプトの地で息を引き取った。ヨセフや兄たちは、ヤコブの遺言に従い、カナンに彼を葬り、エジプトに戻ってきた。今日学ぶ箇所は、ヨセフ物語の締めくくりであり、読者は、ヨセフの言葉を通して、神が人の悪を善へと造りかえられる全能者であることを知る。

**〈兄たちの恐れ (50:15～18)〉**

兄たちは、父ヤコブの死により、ヨセフが、ことによると過去に彼にした悪の仕返しをするのではないかと非常に恐れた。彼らは弟ヨセフを奴隷として売ったことに対して、長い間、罪悪感を

持っていたことは明らかである(42:20～22)。ヤコブが死んでしまった今、エジプトの宰相として権力をほしいままにできるヨセフが、彼らに仕返しすることは容易である。彼らはヨセフの仕返しを非常に恐れた。それで、人を介して、父ヤコブが生前「どうか兄たちの咎と罪を赦してやってほしい」と言っていたと告げた。「これを聞いて、ヨセフは涙を流した」(17)とある。ヨセフは万感の思いでその言葉を聞いたことであろう。その後、兄たち自身もやって来て、「お願いします。どうか、あなたの父の神に仕える僕たちの咎を赦してください」と彼に懇願した。彼の夢(37:7)は、奇しくもこのように成就した。兄たちは悪意をもって、その夢の成就を阻もうとしたが(37:19～20)、全能の神の前に、それはまったく意味をなさなかった。

**〈赦しの再確認と摂理の主への信仰 (50:19～21)〉**

ヨセフの兄たちへの言葉(50:19～21)がヨセフ物語の結論である。彼は、自分の人生を導かれたのは神ご自身であり、神は、彼らのたくらんだ悪を善に変えられたこと、またその目的は、多くの民の命を救うためであった、と言った。

「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」(45:8)と、ヨセフはすでに兄たちに語ったが、その言葉を受けて、「わたしが神に代わることができましようか」(19)と、今日の箇所では言っている。ヨセフは、測り知れない知恵をもって悪を善に変えられたのは神であり、自分は神のしもべとして、神のご計画に用いられたに過ぎないことを自覚していた。ヨセフは生涯を通して摂理の主を信じ続け、その導きに従った。それだからこそ人間的に見れば多くの不運を体験したが、その信仰は揺るがず報いられた。一見マイナスに見える環境の中でも、悪を善に変えられる摂理の主を信じ、しもべとしてなすべきことをなすことが大切である。(後藤公子)

---

9月5日

「摂理の主の勝利」

説教展開例

---

テキスト 創世記 50章15～21節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問13

---

### 〔単元のねらい〕

神様が正義のお方ならば、どうして、世の中に悪がはびこるのか、こういった素朴な問いを持つ子どもも多いことだろう。しかし、イエス様を信じる私たちは、神様が悪を善へと変えて、御自身の栄光と私たちの救いのために役立ててくださると大胆に信仰をもって教えることができる。ヨセフ物語の学びをとおして万事を益としてくださる神様への信頼がいよいよ子どもたちに増し加わることを願う。

---

## 「すべてのことを善としてくださる神さま」

---

愛する子どもたち、おはようございます。

二学期が始まりましたね。今学期も、学校で、お家で、そして、何よりも日曜日は日曜学校、教会で、神さまがヨセフさんと一緒にいてくださったように、みんなとも、いつでもどこでも一緒にいてくださって、豊かに祝福してくださいますように。

さて、神さまが全世界の救い主をお送りくださるお約束を実現なさるために絶対に必要だった、ヨセフさんに関係するいろんな出来事のお話をして来ました。先週のお話では、そのヨセフさんが、王様の夢の意味がわかったことで王様にたいそう気に入られて、総理大臣とされて、国中のすべてのことを任せられました。奴隷から総理大臣へ、日本だと、ちょっと豊臣秀吉に似ているけれども、ヨセフさんの場合は、神さまがアブラハムさんへのお約束を果たされるために、総理大臣とされたのでした。ヨセフさんが総理大臣とされてからの話を少ししておきましょう。

ヨセフさんが神さまに告げられて王様に教えた通りに、七年間、豊作の年があるかと思ったら、今度は、七年間、ひどい飢饉の年が続きました。しかし、ヨセフさんのアドヴァイスの通りに食べ物をストックしていたので、エジプトが飢饉で困ることはありませんでした。けれども、その飢饉は、ヤコブさんたちが住んでいたカナンにも広がって行きました。ヤコブさんたちは、飢饉に備えていませんでしたから、食べ物に困ってしまい

ました。それで、ヤコブさんは、末っ子のベニヤミンさん以外の息子たちを食べ物を買わせに、エジプトまでお使いに出したのです。何も知らずに、息子たちは総理大臣のところに行って、地面にひれ伏しました。こうして、ヨセフさんが昔見た夢が本当のことになりました。ヨセフさんは、お兄さんたちが来たことがわかりましたが、自分がみんなの弟のヨセフだとは言いませんでした。ヨセフさんは、お兄さんたちに末のベニヤミンさんも連れて来るように命じました。そのベニヤミンさんが来て、兄弟がみんなそろると、はじめて、ヨセフさんは、自分のことを明かしたのです。そして、こう言ったのでした。

「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。……」(45:4～8)。

さらにヨセフさんは、お父さんのヤコブさん、家族、家畜全部が、エジプトの国に来て、住むように言いました。こうして、ヤコブさんの家族全員が、エジプトに移り住むことになりました。このことによって、神さまは、その昔、アブラハムさんになされた約束の一部をちゃんと果たしてくださったのです。「よく覚えておくがよい。あなたの子孫は異邦の国で寄留者となり、……」（創世記15:13）。そして、この約束は、全世界の救い主をお送りくださるお約束の一部でもありますから、全世界の救い主のお約束を守ってくださいと言うこともできます。

ヤコブさんがエジプトの国で亡くなると、お兄さんたちは、ヨセフさんを恐れるようになりました。ヤコブさんが生きていた時は、ヤコブさんに免じて、自分たちが赦されていると思っていたからです。しかし、ヨセフさんは、ヤコブさんに免じてでなく、既にお兄さんたちを心から赦していたのです。そのことを、ヨセフさんは、あらためてお兄さんたちに言いました。それが今日の聖書箇所です。

「ヨセフは兄たちに言った。『恐れることはありません。わたしが神に代わることができましょうか。あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。どうか恐れなないでください。このわたしが、あなたたちとあなたたちの子供を養いましょう』。ヨセフはこのように、兄たちを慰め、優しく語りかけた」（50:19

～21）。

ヨセフさんは、お兄さんたちをはじめ、たくさん人たちの命を飢饉にあって救うために、神さまがヨセフさんを先にエジプトに遣わして、奴隸から総理大臣になるようにしてくださったと確かに信じてことができました。神さまは、悪さえ善へと変えてくださるお方だと、確かに信じてことができました。このようなことは、お兄さんたちに野原の穴に突き落とされた昔を神さまへの信仰をもって振り返ってこそ、言えることです。

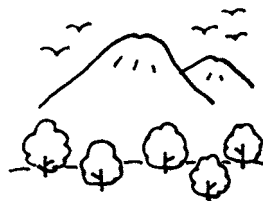
ヨセフさんは、「あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです」と言いました。神さまの救いの、より大きな歴史で言うならば、これは神さまが、お兄さんたちの悪にくみを善に変えて、多くの民の命を罪による滅びから救うための救い主をお送りになるために、今日のようにしてくださったということです。今日のところから、神さまは、すべてを善に変えられるお方でいらっしゃることを教えられます。みんなの中には、今、何で？とまっていることがたくさんあるかも知れませんね。神さまが一緒なのに、何でこんな悪が？とまっていることがあるかも知れません。しかし、神さまがヨセフさんと多くの民のために悪を善へと変えてくださったように、みんなのためにも善に変えてくださることに信頼し、期待しながら、今週も歩みましょう。（長谷川潤）

---

〔今週の暗唱聖句〕 創世記 50章20節

あなたがたはわたしに悪をたくらみましたが、神はそれを善に変え、多くの民の命を救うために、今日のようにしてくださったのです。

---



## 〈ねらい〉

人間の悪をも善に変えられる神さまの力に信頼し、神さまの善に用いられることを望むように。

## 〈暗唱聖句〉

「あなたがたの悪を、神は善にかえられた」。

## 〈展開例〉

①ヨセフの解き明かしたとおり、七年の豊作のあと、七年の大飢饉が起きました。エジプトではヨセフが総理大臣となって食べる物にこまりませんでした。他の国では食べ物がありません。ヨセフのお父さんのヤコブの家族も飢え死にしそうでした。そこでヤコブは子どもたちに言いました。「エジプトには素晴らしい総理大臣がいて、飢饉の中でも倉にはたくさんの食べ物があるそう。行って買って来ておくれ」。そうして、お兄さんたちはヨセフのいるエジプトにやってきました。

②「総理大臣さま。どうか私たちに食べ物を買ってください」。お兄さんたちはヨセフの前にひざまずいて懇願しました。その姿は、あのヨセフが最初に見た夢のとおりでした。ヨセフはお兄さんたちだと分かりましたが、お兄さんたちはそれがヨセフだとは気づきません。当然ですよ。自分たちが奴隷として打った弟が総理大臣になっているなんて、誰も思いません。ヨセフもそのときは何も言いませんでしたが、もう一度来るように計画を立てました。

③ヨセフが計画したとおり、お兄さんたちはもう一度エジプトに来ました。ヨセフは、「お兄さんたち、私はあなたたちがエジプトに売ったヨセフですよ」と言って、自分の正体を明かしました。お兄さんたちはびっくりすると同時に、とても怖くなりました。だって、ヨセフにあんなひどいことをしたのですから。「ごめんなさい。私たちがあなたにしたことを赦してくれ」。お兄さんたちはヨセフを恐れました。

④でも、ヨセフは言いました。「恐れなくてください。私をエジプトに送ったのは、あなたたちではなく、神さまです。あなたたちは確かに悪いことをしましたが、神さまは多くの人の命を救うために、そのことも用いられました。私は怒っていません。どうかヤコブお父さんもエジプトに来て、一緒に住みましょう」。ヨセフは優しく語りかけました。

⑤兄たちはヨセフの言うまをお父さんに告げました。ヤコブも涙を流してヨセフが生きていることを喜び、家族そろってエジプトにくだってヨセフのそばで暮らしました。

## 〈お祈り〉

人間の悪いわざも、善いことに変えてくださるすばらしい神さま。どうか神さまの善いことのために私を遣わしてください。アーメン。



## 〈ねらい〉

神様への信頼を深める。

## 〈はじめに〉

夏休みの間のご奉仕も感謝いたします。新しい学期を迎え、子どもたちは生き生きとしているでしょうか。教師自身の状態はいかがでしょう。子どもたちの前に立たされるとき、自分自身の信仰生活がいつも問われます。教えるということの前に、自分自身が御言葉に養われ、主の導きを祈らなければなりません。学生の方で奉仕をしてくださる方、お仕事で毎日忙しく帰りも遅い中、このクラスの準備をしてくださる方、主婦の方、このクラスを担当してもう何年にもなられる方、いろいろな方が幼い子どもたちに仕えておられると思います。お一人おひとりのご奉仕が整えられ、心身の健康が支えられますように。

## 〈御言葉に聴きましょう〉

- ①ヨセフのお父さんヤコブは死ぬ前に、何と書いていましたか。
- ②これを聞いたヨセフはどうしましたか。
- ③ヨセフはお兄さんたちを怒りましたか。
- ④20節を声に出して読みましょう。

## 〈展開例〉

ヨセフさんは、神様から特別な力をいただいて、王様ファラオの夢の意味を知ることが出来ました。夢の意味を教えられた王様はヨセフをとても信頼して、総理大臣のお仕事を任せました。その

後、ヨセフさんはどうなったでしょうか。

ヨセフさんには昔、悲しい出来事がありましたね。それは、兄弟から捨てられるという出来事です。どんなに王様から大事にされても、どんなに大きなお仕事をしてみんなからほめられても、きっと心の奥でいつもお父さんは元気かな、お兄さんや弟は今頃何しているかな、どうして私はこんなことを経験したのかなと思いをめぐらし、時には悲しみに胸がいっぱいになった時もあったでしょう。でもヨセフさんは一生懸命、国のため国民のために働きました。王様の見た夢はヨセフさんが言ったとおりになりました。ヨセフさんのお陰で国民は助かりました。

遠くに住んでいるお兄さんたちの生活も助けました。これを指導している総理大臣が自分たちのあの捨てたヨセフとは誰も知りません。随分時間がたってから、ヨセフは兄弟にもお父さんにも再会することができました。何十年も待ちに待った再会でした。でもお兄さんたちは手放しでは喜べません。なぜなら、あの時自分たちがしてしまった悪いこと、ヨセフを憎み捨てて、お父さんにもうそをついたことをずっと忘れないでいたからです。きっとヨセフは赦してくれない、それほど悪いことをしてしまったことの後悔と恐れがありました。でも、ヨセフは、お兄さんたちを赦しました。全てを神様はご存知で、悪いことも、善いことに変えてくださる神様を、その神様のお力をますます信じる思いが強くとえられたからです。

もう一度20節をみんなで声を合わせて読みましょう。

## 〈お祈り〉

神様、神様の大きな愛をありがとうございます。



## 〈ねらい①〉

前回と同じように、思いを超えた、神の救いの物語のスケールの大きさに、共に驚く。

## 〈展開例①〉

聖書の中でも飛びぬけて面白いテキストですから、聖書物語を丁寧に確認するだけで十分に意義深いと思います。礼拝における説教者が、時間の都合で十分に語れないような場合に、分級でフォローなさればいいと思います。その際は、説教展開例を参考になさってください。紙芝居や絵本も充実していると思います。

## 〈ねらい②〉

悪を善に変えられる摂理の主を信じる、信仰者の「最高の幸い（カルヴァン）」を伝える。

## 〈展開例②〉

「神の全能の力、窮めがたい知恵、無限の善は、その摂理の中によく現れ、最初の墮落やその他すべての御使いと人間たちの一切の罪にまでおよび、しかも単なる許容によるものではなくて、多様な配剤において、神ご自身のきよい目的のための、最も賢い力ある制限や、その他の秩序づけと統治がそれに伴っている。しかもなおその場合の罪性はただ被造物からだけ出て、神から出るのではない。最もきよく正しくいます神は、罪の作者でも是認者でもないし、またありえない」（ウ信仰告白5:4）。

「一切は混乱し混沌と化したように見られても、その時に天上は常に静穏で晴れ晴れとしている。それゆえ、世界の物事が混乱して我々の判断が奪われる時にも、神は義と知恵の純粹の光によってこの激動を最も良く整えられた秩序に收拾し、正しき目的に至らせたもうと確信すべきである」（カルヴァン『綱要』第1篇17:1）。

人間には、神様の考えておられることのすべては分かりません。どうしてこんなことが起こるのか？と言いたくなる様な出来事がしばしば起こります。「どうしてアダムとエバは墮落したのか？」誰もが聞きたい問ですね。「神様は人間を命令だけに従うロボットとして創られなかった、自由な存在に創ってくださった。でも人間はその自由を間違っって使って、墮落の道を選んでしまった」。これは聖書から導き出される模範解答です。でもこれを聞いても、先生は全然納得できません。みんなはどうか？

「どうして？なぜ神様はこんなことを……」という問いは、人間が永遠に問い続けるものでしょう。でも、神様の考えておられることをすべて知りたいと願うのは傲慢なことですし、そんなこと不可能です。また必要ありません。むしろ大切なことは、どんな出来事が起ころうとも、それはすべて神様の「全能の力、窮めがたい知恵、無限の善」によって定められたものであって、すべては「きよい目的」の実現のために用いられると“信じる”ことです。

神様は、人間の犯したどんな反逆も過ちも悪も、また私たちが味わわねばならないあらゆる悲惨な出来事も、すべてを善に変えて用いてくださる方です。イエス様を十字架にかけてしまったのは人間の最大の罪ですが、神様はその罪さえも用いて、私たちの救いを実現してくださった方です（使徒2:23～24、4:27～28）。大いなる神の御手に人生を委ねて、平安の中であゆみましょう。

## 〈祈り〉

神様、万事を益としてくださるあなたを信じます。どんな混乱の時も、あなたを見上げ、確かな平安の中で歩むことができますように、私たちの信仰を整えてください。





## 〈ねらい〉

人の悪を善に変えられる神様の業を覚える。

## 〈展開例〉

①今日で壮大なヨセフ物語が幕となる。これまで激動の人生を歩んできたヨセフだったが、この物語の最後は、自分に向けられた悪が、神の救いのために用いられ、善へと変えられたというヨセフの告白で締めくくられる。

Q. ヨセフの周りにあった悪とはいったい何だったろうか？ 父親の偏った愛。兄たちの嫉妬。兄たちの殺意。女性からの誘惑。自分を利用するだけ利用して恩を忘れる薄情さ。そして、エジプトという異教の国の存在。神様はアブラハムの子孫たちに、祝福を約束した契約を実現し、イスラエル一族を飢饉から守られたために、こうした悪を用いられた。そして、ついには神様が善しくイスラエルをとおして世界を祝福される方であることがはっきりと示された。

②以前も話したが、これは悪でもOKということではない。悪を働いた者はそれぞれに責任を負う。父は最愛の息子を失い、兄たちには罪の呵責が与えられ、他の神々を捨てなかった大国エジプトも、やがて神様の裁きのもとに滅びることとなる。しかし、神様はそのような悪であっても自由を奪うことなくそれぞれの責任のもとで世界を任せられる。そして、人の自由さすらも計画の中に入れた上で、御自分の思い、アブラハムの子孫を祝福し、地上の民を祝福するという思いを実現させられる。

③ヨセフはすべてが成し遂げられたとき、自分がこれまで味わってきた人の悪意をゆるすことができた。それは、神様の目線で自分の生涯を見

ることができたから。自分には辛く、悲しく、寂しく、苦しい人の悪意だったが、神様の実現のためにそれらは起こるべくして起きたとヨセフは理解した。そして神様が起こした救いを知った今、それらの悪は最早、過去の出来事であり、赦すべき人の弱さへと変わったのである。

④摂理信仰とはまさに、神様の眺めておられる壮大で愛情に満ちた目線に立って、すべてを見つめるということである。神様の眼差しを意識して世界を見つめるとき、また毎日の生活を見つめるとき、人の悪を嫌いながらも、人そのものを大切にされる神様の寛容さに触れることができる。悪ですら御自分の御業のために使われる神様に従うとき、私たちは自分の身の回りに起る悪であっても寛容となれる。ヨセフが「悪が善へと変えられた」と言うとき、それはテレビ越しに感じる世界の悪とかネットで気になる人間の悪さとかそういう頭の中の話をしているのではない。自分を苦しめ、自分を陥れたそのリアルな悪に対して、彼はそれを赦し、感謝することすらできたのである。皆の日常にも降りかかる人の悪意があるかもしれない。しかし、その悪ですら、神様ならばやがて善へと変えてくださると信じていることができならば、君は悪に対して傷つく人生から、悪のある世界を受け入れつつ、それが善へと変わることに希望を持つ、ワンランク上の人生観を与えられる。悪を善に変える神様の御業が自分の人生にも豊かにしめされるように、祈り求めたい。

## 〈祈り〉

人を祝福するために悪を善へと変えられる神様。感謝します。私にも、私の周りにも多くの悪がありますが、あなたが整えて善へと変えてください。アーメン。



歴史を顧みない権力者の号令がエジプトのイスラエルを悪夢へ引きずり込む。ここに出現した闇の世界は、洪水前夜の罪に満ちた世界の再現である。そのとき神は世界の破滅を宣告された。ファラオを殺戮の衝動に走らせたのは恐怖であり、イスラエルを脅威と感じたエジプトの民族意識である。文化や習慣の異なる民族を多く抱えるのにも限界があると感ずる人々の意識はこうして歴史的なものとして証明される。しかし、イスラエル人を強制労働に服させるというファラオの対応策は裏目に出、彼らの人口はかえって増大した。そこでファラオの恐怖は嫌悪や憎悪にまで発展し、ついに大量殺戮の号令が下る。最悪の時代には最悪の人間が神の座につく（新約ではヘロデ）。

出エジプト記の初めに記される状況は「エジプトとイスラエル」という民族間の対立と図式化される。創世記の終りに向かう主題は、神の不思議な救いの御業による和解であった。兄弟同士の間にあった深い対立の溝は、ヨセフに対する兄たちの嫉妬であり、その後は彼を奴隷に売り飛ばした罪悪感であったが、それが神の導きの下に取り去られて救いが告げられ、イスラエルの家族は神の祝福の中に安息を見いだした。これはヤコブ＝イスラエルの家族内における和解である。当時のエジプトとイスラエルの関係は和やかで、宗教の違いが争乱のもとになる心配すらない。しかし、出エジプト記では、イスラエルは既に家族からひとつの民族へと発展しており、そこから今度はエジプトとイスラエルという民族単位の対立が生じる。イスラエルと世界との間の対立構造、すなわち、神の民と異邦人との関わりである。これがここから展開する旧約全体の主題の一つとなる。すると、既にここから終りも予想されていることに気付く。それは神を起源とする二つの兄弟であるエジプトとイスラエルの和解である（イザヤ書19章）。地上のあらゆる民族の対立が解消されることがこの先の歴史で目指される。従って、出エ

ジプトという出来事は大きいなる出発である。世界に対する神の救済の御業がここから開始され、人類の真の和解を目指してイスラエルの歴史は長い旅に出る。

一人の男の子の誕生からそれは始まる。レビ人の夫婦に生まれたその子は母親がしっかりと防水加工を施した葦の籠に入れられナイルに漂う。「籠（テバ）」という特殊な語は、他では洪水の上を漂った「箱（舟）」にしか用いられない。それは大水からの救いをあらわす神の救いの器である。小さな命が神に守られて荒れ狂う波間を漂う。赤ん坊はついにファラオの娘に拾われ王宮へと運ばれるが、これは単なる幸運ではない。美しい（或いは健康な）男の子が命を狙われて親元から切り離される。それが、神の不思議な導きでエジプトの宮廷にまで入り込む。これは、ヤコブの息子ヨセフが辿った道のりと同じく神の摂理を物語る。ファラオはヨセフを忘れたが、神はイスラエルを忘れることなく、かつて示された道筋で新たに神の僕を起こされる。

「モーセ」という名はヘブライ語では「引き上げる」を意味するが、この名前にもヨセフとの共通点がある。ヨセフはファラオに迎え入れられたときに別のエジプト名を授かった。モーセは一つの名前だけが、その名は本来エジプト語で「息子」を意味しファラオたちの愛称であった。すなわち、モーセはエジプト名とヘブライ名の二つの名を重ね持つという点でヨセフと共通する。ヨセフはエジプトの宰相になり、ヤコブの家族とエジプトを救った。モーセもまたイスラエルを救うために神がお遣わしになる救済者である。そして、王の息子としての名をもつ、エジプトの王子となるはずであった。モーセはやがて来るべきお方の前触れとして、歴史に神が働きかけてくださる具体的なしるしとして旧約時代に示されたキリストの型を示す。（牧野信成）

テキスト 出エジプト記 1章22節～2章10節

参照カテキズム 子どもカテキズム 問11

### 〔単元のねらい〕

主なる神は、ご自分の造られた世界を御手の中で支え、導いておられるお方である。『子どもカテキズム』問11に、神の全能と主権について、「神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません」とある。赤ん坊を川に流さなければならない。これは、理不尽なことであり、たいへん悲しいことである。けれども、このことも主なる神の支配の中に置かれていた。モーセはエジプトの王女によって引き上げられ、王女の子どもとして育てられる。そのようにして、神ご自身が歴史を紡いでおられる。わたしたち、また子どもたちにとっても、主なる神は愛をもってわたしたちと深く関わり、導いてくださるお方である。主なる神がおられることを驚きと喜びをもって伝えたい。

## 「神さまが引き上げてくださった」

ヨセフの時代に、ヤコブの家族、イスラエルの人びとすべてがエジプトに移り住みました。やがてヤコブとヨセフはエジプトで死に、その後も、イスラエルの人びとはエジプトに住み続けました。神さまは変わることなく恵みを注いでくださって、イスラエルの人びとはエジプトで増え広がりました。300年ほどの間、イスラエルの民はエジプトで祝福されて歩んだようです。

今日からは、モーセのお話になります。モーセをとおして、神さまが再び力強いみわざ、不思議なみわざを行ってくださいました。イスラエルの民を、今度は、エジプトから導き出して、もともと神さまがイスラエルの民に与えると約束しておられた土地、カナンへ導いてくださった。その出エジプトということを学びます。神さまの約束の地カナンへと帰って行く物語です。

神さまは、イスラエルの民がエジプトに向かう時にはヨセフを用いられました。今度、イスラエルの民がカナンへと帰るために、モーセが用いられます。先ほどの聖書の御言葉は、そのモーセが生まれたときの出来事です。

モーセが生まれたとき、イスラエルの人びとは、たいへんな中に置かれていました。モーセには、アロンというお兄さん、ミリアムというお姉さん

がいました。お兄さんお姉さんが生まれた時はまだよかったです。けれども、モーセが生まれた時には、エジプトの王さまから命令が出ていました。「ヘブライ人（イスラエルの人のことです）に男の子が生まれたら、その子をナイル川に放り込まなければならない」。そういうおかしな命令が出ていました。そのため、モーセは、生まれてきても川に放り込まなければならない。そして、川に放り込まれるならば、普通は生きていられません。死んでしまいます。ですから、生まれてきても死ななければならない、モーセはそういう状況の中で生まれました。

もちろん、モーセのお父さんお母さんも、モーセを見捨てることなどできません。生まれてから三ヶ月ほど、何とか隠して育てました。アロン兄さん、ミリアム姉さんも協力しました。けれども、赤ん坊も三ヶ月くらいになってくると大きな声で泣くようになります。ハイハイし始めるようになります。だんだん隠しておくことが難しくなるのです。そして、ついに隠しておけず、ナイル川に放り込まなければならなくなりました。何と悲しく、つらいことでしょう。けれども、できることなら何とか生き延びてほしい。そう願って、お父さんお母さんはカゴを用意して、水に沈まないようにして、そのカゴにモーセを寝かせることにし

ました。ナイル川の葦の葉が茂っているところに置いて、川に流されてしまうことがないようにしました。少しでも長く生き延びてほしい。みんながそう願っていました。

ミリアム姉さんも、赤ん坊のモーセをかわいがっていました。カゴに寝かされて川に置かれたモーセのことが気になって仕方ありません。もしカゴがひっくり返ってしまったら！そう思うと気が気でありません。ミリアム姉さんは、遠くからモーセのカゴを見守ることにしました。

しばらくすると、エジプトの王さまの娘、王女がやって来ました。王女は、ときおり、そのあたりで水浴びをしていたのです。いつものように水浴びをしていると、何だか赤ん坊の泣き声がするではありませんか。王女は、召し使いの女たちと一緒に赤ん坊を探しました。カゴに寝かされたモーセが見つかりました。なんとまあ、かわいい男の子ではありませんか。王女はすぐに気がつきました。ああ、この子はヘブライ人の男の子なのだ。王さまの命令に従うために、カゴに入れて川に流されたのだ。そうであるならば、このまま放り出しておくのがよいだろうか。川に流してしまえばよいのか。いや、何とかかわいい男の子か。何とかかわいそうなことか。そう思って、王女は、自分が引き取って育てることにしました。こうして、モーセは川から引き上げられたのです。

遠くから見ていたミリアム姉さんは、モーセを引き上げたのがエジプトの王女であることに気がつきました。びっくりしましたが、王女がモーセを引き上げて、かわいそうに見つめているのを見て、勇気を出して飛び出して行きました。そして言いました。「お乳の出るヘブライ人の女の人を知っています。呼んで参りましょうか」。王女は答えました。「ありがとう。そうしてください」。ミリアム姉さんは、さっそく家に帰って、モーセのお母さんを連れて来ました。王女は、ミリアム姉さんが連れて来た女が実のお母さんであると気

づいたでしょうか。きっと気づいたでしょうね。それでも、王女は言いました。「この子を連れて行って、わたしの代わりにお乳を飲ませて、世話をしてください」。モーセのお母さんは、王女からモーセを育てよう命じられ、何と驚き、また喜んだことでしょうか。

こうして、川から引き上げられたモーセは、エジプトの王女の子どもになり、しかも、実のお母さんに引き取られて、育つことになりました。たいへん不思議な仕方ですけれども、神さまは、不思議な仕方で、人に生きる道を与えてくださいます。人間の思いを超えた神さまご自身の方法で、生きる道を切り開いてくださいます。エジプトの王女が引き上げたのですけれども、実は、主なる神さまがモーセを引き上げたのです。

ナイル川は、豊かな収穫を与える豊穡の神と呼ばれ、礼拝されていました。川が礼拝されるとは不思議なことですが、ナイル川に流されて、モーセの命はナイル川が支配することとなった。そのところで、イスラエルの神は、そのナイル川の支配の中からモーセを引き上げて、救い出してくださいました。イスラエルの神は、エジプトの神、偽りの神々に勝利しておられる、力強いお方です。やがてイスラエルの民は、エジプトに勝利して荒れ野に旅立ちます。すでにその勝利が、このモーセの誕生の時に始まっていたのです。

わたしたちにとって、神さまは、このようにして力強く働いてくださるお方です。わたしたちを愛して、決して見捨てない神さまがおられ、わたしたちの周りに起こることの一つひとつをご存じで、支配しておられます。悪いことが起きても、よいことへと造り変えてくださいます。このような力強い神さまがおられ、この神さまを信じていることができるとは、何と幸いなことでしょうか。この神さまを信じて歩みましょう。（望月 信）

---

[今週の暗唱聖句]      ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、  
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。

---

**〈ねらい〉**

神様が、苦しみや悲しみから引き上げてくださることを知るように。

**〈暗唱聖句〉**

かごの中の赤ちゃんを「水の中からわたしが引き上げた」。

**〈展開例〉**

①ヨセフの計らいで、ヤコブさんの家族は全員エジプトに住むようになりました。エジプトの人たちとも親しくなって、イスラエルの人々は国中に広がりました。しかしそれからずいぶんたって、ヨセフさんのことを知らない王さまが現れると、急に怖くなりました。「イスラエルの人たちはあまりにもたくさんになった。もしかすると私たちの敵になるかもしれない。気をつけるにこしたことはないな。そうだ。厳しい仕事を与えれば、苦しくてこれ以上増えないかもしれない」。

②そう思った王さまは、イスラエル人たちを無理やり連れて行って町の建設現場で働かせました。そこは、熱くて、重くて、休む時間も食料もほとんどありません。イスラエルの人たちは「助けて。苦しいよ」と叫び声を上げています。でも神さまが守られたので、イスラエルの人たちはもっと増え広がりました。

③そこで王さまは考えました。「なかなかイスラエルの人には減らないな。そうでもっと直接数を減らそう。生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め。女の子は生かしておけ」。大変なことになりました。国中にイスラエルの人たちの悲しみと叫び声広がりました。

④そんな中で、レビの家に一人の男の子が生まれ

ました。とっても美しい子です。家の人は王さまの命令を知っていましたが、かわいそうで、三ヶ月間、家の中で隠して育てました。しかし赤ちゃんはすすく成長し、声も大きくなってきます。これ以上隠しておくわけにいきません。そこでパピルスのかごにアスファルトとピッチで水が入らないようにし、その中に男の子を入れてナイル川の葦の茂みにそっと置きました。お母さんは、「この子をエジプト人が拾ってくれたら、命は助かるかもしれない」。そう考えたのです。その様子をお姉さんは草陰でじっと見ていました。

⑤そこへ王女さまが水浴びをしにやってきました。「アーン、アーン」。「あれ何かしら。赤ちゃんの鳴き声が聞こえるわ。あ、あそこのかごの中に赤ちゃんが」。抱き上げると、それはかわいいい男の子でした。王女さまは、王さまの出した命令に心を痛めていましたので、この子を育てる決心をしました。この子は「水の中から私が引き上げた」ので、モーセと名づけましょう。そして王宮で大切に育てました。

⑥モーセはこのあと、どうなるのでしょうか。そしてエジプトで苦しめられているイスラエルの人たちはどうになってしまうのでしょうか。大丈夫。神さまはすべてをご覧になって、御心に留めておられます。そして、モーセを通して、素晴らしいやり方で、苦しみの中から引き上げてくださいます。

**〈お祈り〉**

すべてを知っておられる神さま。どうか苦しんでいる人を助けてください。悲しんでいる人を、涙の中から引き上げてください。そのために私を遣わしてください。アーメン。

**〈ねらい〉**

神様は私たちの毎日を導いてくださるお方、そしてこの大きな歴史の中で働いておられるお方であることを知る。

**〈はじめに〉**

クラスには数少ない子供しかまだ与えられていないかもしれません。でもこれから主はどのような子どもを与えてくださろうとしているのかわかりません。一人のキリスト者として、今、目の前に主が与えてくださった子どもに、小さなわたしの全てを通して福音が伝えられ、またこの福音が次の世代にも伝えられていくことを信じながら、子どもの前に立たせていただきますよう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①王様ファラオは、全国民に、赤ちゃんを殺せという命令を出しました。その赤ちゃんは男の子ですか。女の子ですか。
- ②どこの川にほうり込めと命じましたか。
- ③ある時に男の赤ちゃんが生まれました。家族は隠しました。でもだんだんと大きくなったので隠せなくなりました。家族はどうしましたか。

**〈展開例〉**

ヨセフさんが死んで、長い時間がたちました。その間に何人も王様が変わりました。そして、ある王様が「イスラエル人の男の赤ちゃんは全員ナイル川にほうり込め。殺してしまえ」という残酷

な命令を出したのです。イスラエルの人たちはエジプトで奴隷として一生懸命働いて、そして、人数も増えてきたので、王様は怖くなってきたのです。だから男の赤ちゃんを殺してしまおうという恐ろしい命令を出したのです。

あるイスラエル人の家族に男の赤ちゃんが生まれました。その家族は絶対に赤ちゃんを殺したくありませんでした。そこで葦を編んで作った籠に赤ちゃんを入れ、ナイル川の茂みにそうっと置きました。

その赤ちゃんを見つけたのがなんと、あの恐ろしい命令を出した王様の王女だったのです。王女は、その赤ちゃんを見つけて、かわいそうに思って、自分のこどもとして育てることにしたのです。しかもその赤ちゃんにミルクを与える役目として、本当のお母さんをそばに置きました。こうして、この殺されるはずだったイスラエル人のある一つの家から生まれた赤ちゃんは、王様の家族として、大事に育てられたのです。

この赤ちゃんの名前を「モーセ」と言います。モーセさんは大人になってから、神様のために働く大事なお仕事をご用意されていました。だから、神様はこのような特別な方法で、モーセが殺されないようにお守りくださったのです。

**〈お祈り〉**

神様、私たちも神様をご用意されたお仕事ができるよう、今からお守りください。そして、神様がどんなことがあっても助けてくださることを信じさせてください。



**〈ねらい〉**

人間が考え出すいかなるドラマよりも劇的な、神の歴史創造の妙に、共に驚く。

**〈展開例〉**

ヨセフさんの山あり谷ありの人生をずっと学んできました。一時は牢獄にまで入れられたのに、まさか総理大臣ようになってしまうなんて。そんなドラマがあったら、「ありえないーい！」って言っちゃいそうですね。でも神様の救いの物語は、人間が考える以上にドラマティックなのです。聖書にはそういうお話がずっと書かれている。だから最高に面白いのです。

さて、ヨセフの人生も山あり谷ありでしたが、神の民イスラエルの歴史はそれ以上に山あり谷ありです。ヨセフさんのおかげで命拾いした兄弟たちは、その後一族全員を引き連れて、エジプトに移り住んだと教えてもらいましたね。そしてどんどん数が増えていった。幸せの絶頂ですね。いい感じです。

でもこの後急降下します。エジプトの王様が、「このままではあいつらが強くなりすぎる……」と警戒して、苦しい重労働をさせて、イスラエルの人々を虐待しはじめたのです。でもまだまだイスラエルはへこたれません。それでもどんどん増えていく。するとエジプト王は、とんでもないことを言い出しました。「イスラエルの人々に男の子が生まれたら、一人残らずナイル川に放り込め!!」……さあ大変、最大のピンチです。

そんな時に生まれてきたのがモーセでした。このモーセは、やがてイスラエルの人々をカナン之地に導くために神様が遣わしてくださった大事な人だと教えてもらいましたね。でもそんなモーセが、よりによってこんな大ピンチの時に生まれてくる。エジプト王が、イスラエルを導く神様の手を、必死になって邪魔しようとしているのです。

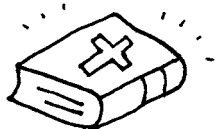
その結果はどうなったか……？ それは説教で聞きましたね。赤ちゃんモーセは奇跡的に命を助けられて、なんとエジプトの王子として育てられることになりました。「ありえないーい!!」でも、誰でも考え付くようなことなら、神様じゃなくてもできます。ありえないからこそ、信じる値打ちがあるのです。

そんなわけで、ヨセフ以上に波乱万丈なモーセの人生がスタートしました。そしてそのモーセと共に、イスラエルの波乱万丈の歴史もいよいよ本格的にスタートします。そこには、いつも神様の見えない導きがあります。人間の思いを超えた、劇的な救いのご計画が進められています。

人間はいつも神様のご計画を邪魔しようとしします。赤ちゃんモーセが殺されかけたように、赤ちゃんイエス様も殺されかけました（マタイ2:16-23）。でもエジプト王やヘロデ王の狂気も、イスラエルにモーセを与え、全世界に救い主イエスを与えようとする神様の力を止めることはできません。どちらの時もたくさんの子供もたちが死にました。たくさんのお血が流され、涙が流されました。神様はその悲しみを全部見ておられます。だからこそ、その悲惨の泥沼から人間を「引き上げる」ために、どれだけ罪人に邪魔されようが、神様は力づくで救いを進めていけます。あなたという人の小さな歴史にも、そんな劇的な導きが必ずあります。

**〈祈り〉**

神様、あなたのお考えになっていることは大きすぎて、とても想像が付きません。あなたはすごい方です。そんなあなたが、私の神様になってくださったことを感謝します。イスラエルの歴史を導いてくださったあなたの手が、私をいつも守り導いてくださいますように。あなたを信頼します。



## 〈ねらい〉

モーセに与えられた救いから、自分に与えられている救いを確認する。

## 〈展開例〉

①今日から、モーセによってイスラエルがエジプトより救い出される、出エジプトの物語。ヨセフのもとで神様の恵みによって潤ったエジプト。しかし、エジプトは、その身に受けた祝福を忘れ、繁栄するイスラエルを憎み虐げようになる。そんな時代に、神様はイスラエルを救い出しかつてアブラハムに約束したカナン之地に導くため、モーセという指導者を選びだされた。今日は、このモーセの出生に示された神様の救いを覚えたい。

②モーセは生まれて三ヶ月の後に、イスラエルを恐れるエジプトの王ファラオの命令のために、ナイル川の上を籠に乗せられて漂っていた。ナイル川はエジプト人にとって自分たちに豊穡を与える神と信じられていた。本当の神様のことを認めない人々の国で、偽物の神に流されるがまま、生まれてから死に向かって漂い流れていく人生。モーセはそこから救われる。そして、これは君たちにも同じように言える。皆は本当の神様のことを認めようとする国の中で生きている。神様を認めない人間の造り出す社会や文化は、そこに生きる人を神様が嫌われるような生き方や考え方のとりこにしようとする。

Q. 皆が暮らすこの社会には、神様が嫌な思いをするような文化が無いかな？ 君が好きな小説やマンガ。テレビ番組やゲーム。こうしたモノの中に、君を神様から引き離そうとする考え方はあるかな。こうしたモノに、君が「カッコいい」と感じる時、そこには神様が嫌われる生き方や考え方はあるだろうか？ 人間は自分の力で

どこまでも成長できるか、自分の信念や夢が世界で一番大事か。「神など俺には必要ない」。こんなキヤがまるでカッコ良いかのようにいたるところに現れる。人間が一番という人間至上主義の国で皆は生活している。だが、その価値観に流されて辿り着くのは、神様から「お前は必要ない」と拒絶される永遠の死である。神様から拾い出されないなら、私たちの命は絶望的である。

③モーセの話に戻ろう。神様はエジプトの王女を用いるという仕方、モーセをこの死地から拾い上げられ、かつイスラエル人の母親の手によって育てられていく。これにより、モーセはエジプトを良く知るイスラエル人として出エジプトのために整えられていく。モーセは神様を知らない人の価値観に触れつつも、本当の神様を主人とする生き方を学んでいったに違いない。

④生まれてから死に向かって流れていく、人間を中心とした人生観。そのとりこになってしまう人生から君は神様に拾い上げられた。小さい頃から君が教会で何度も聞いてきた「救い」とは、ここからの救いである。そして、この救いを知る者が、やがて他の人々を救いへ導く者として用いられていく。モーセに対して、神様は様々な人を用いて、この救いを与えてくださった。君もまた同じである。神様は君を死に向かう川の流れから拾い上げるために様々な人を用いて、君を人間至上主義の人生から救い出される。この神様にこの身を委ねたい。

## 〈祈り〉

死へと流れる私を拾われた神様。感謝します。どうか、人間を一番にする価値観のとりこにならないようにお守りください。アーメン。



神が地上をご覧になり人間の苦しむ姿を認められる時、神は人間を通して救いの御業を始められる。「モーセ、モーセ」と二度呼ぶ声が燃える柴から聞かれたとき、神の人はその救いの働きに召されていく。「自分ではない」とモーセが必死に抵抗する様子から知らされるのは、神が人を召されるのは本人の自覚や自主性がその役割を引き受ける第一要因ではないことである。神がモーセに現れた。そして抗うことのできない言葉に促されて、自分を無にして砂漠から人々の住まう所に出て行った。「わたしは必ずあなたと共にいる」との約束が、かつて族長たちに語られたのと同様モーセにも告げられている。その確約を得て「わたしは、今、イスラエルの人々のところに参ります」との応答が導かれる。

モーセが向かうエジプトという「この世」は、文明の力をもって暴虐を尽くすファラオの王国、罪の極まった人間世界のモデルだといえる。もっと深刻なのは、イスラエルもまた神の僕を喜んで受け入れるほど信仰に生きてはいない現実である。彼らは自分たちが置かれた苦難に打ちひしがれて叫ぶが、神の名を呼ぶことすらできない。そんな場所へと神はモーセを派遣し、彼は神の言葉を語らなくてはならない。モーセが繰り返し神の召しを拒絶するのも、その困難、否、不可能が分かるからである。あらゆる不安を神の前に持ち出し、自分が神の命令に耐え切れないと己が弱さを認めざるを得ない。かつてのエジプトの王子は、今や身も心も、沙漠で羊を飼う一人の無力な人間に過ぎない。

しかし、神の救いの道筋がこうして整えられる。自分の力で救いをもたらそうという自負心はモーセにはない。モーセが訴える不安はすべて神が引き受けられる。しるしとなる杖も、代弁者となる兄アロンも、必要なものはすべて神が用意される。あとは神に身を委ねて自分を空にしたまま、エジプトへ出て行けばよい。

このとき神は、モーセにご自身の名を顕された。

「主（YHWH—アドナイと読む）」がそれである。ヘブライ語の四文字で表されるその名は、今では誰も本当の呼び方を知らないが、意味するところは「わたしはある」という神の存在そのものである。この謎めいた名は、「わたしは在りたいように在る」「わたしはいたいと思うところにいる」という歴史に働く神の自由をも示す。モーセはこの名を委ねられて、今、信仰のない世界へ送られ、自らを神の子と称するファラオの前で、「ある」というお方の証言をせねばならない。モーセがそう主張するのではない。「わたしはある」とははっきりと語られる神御自身がモーセを通して証しされる。そして、未だ神の名を呼ぶことを知らないイスラエルの民に向かい、「わたしはある」と宣言される方の言葉を伝え、彼らがその名において神を礼拝するようになることが、これからのモーセが生きる意味となる。

神に召された信仰者は誰しもモーセの姿に自らの召命を見る。神が人を御自身の働きへと召されるとき、それは抗うことができない。神が「ある」ということを本当に知るとき、その言葉には逆らえない。モーセが試みた反抗は、己を捨てるための試みであった。人の思いから来る疑いや不安は、神の御存在の確かさの前には根拠を失う。御言葉の宣教へと人が召されるとき、自分の力を信じることなどできない。罪人が悔い改める出来事は、杖が蛇に変わったり、皮膚病がきれいに治ったりする以上の奇跡に相違ない。主イエスはこれを「ラクダが針の穴を通る方が易しい」と言われた。宣教への召命は、モーセのように一介の羊飼いが召されるのと同じである。「人にはできないが、神にはできる」ことを信じて、ただ神の言葉の力に頼って、その働きに召されるだけである。信じる者には、神の名が委ねられており、神は信仰者の生涯においてご自身の存在を訴えておられる。神を信じる者たちの人生は、いつでもその名を帯びている。 (牧野信成)

テキスト 出エジプト記 3章1～22節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問7, 8

### 〔単元のねらい〕

『子どもカテキズム』問7は、神さまは「永遠で、変わらないお方です」と告白する。問8には、「生きておられるまことの神さまです」とある。聖書の神は契約の神であり、真実で変わらないお方、生きて働かれるお方である。主なる神は、モーセを召し出して、出エジプトのわがへと導いてくださった。イスラエルの民の贖いのみわざを成し遂げてくださった。今も、主なる神のわたしたちへの愛は変わらない。契約に対する真実も変わらない。神は生きて働いておられる。それゆえに、神は確かにわたしたちを救いの恵みに入れてくださる。神さまを信頼することへと子どもたちを招きたい。そして、わたしたちも神さまに真実をもって応えて歩みたい。なお、聖書朗読としては、1～10節くらいまでが適切であろう。

## 「神さまの愛は変わらない」

みんなは、お友だちやおうちの人と約束をしたことがありますか。たぶん、あるでしょう。いろいろな約束をしたことがあるでしょう。いついつ一緒に遊ぼうね。そう約束して、約束を守ることができたでしょうか。あと一時間遊んだら、お片付けして勉強する。そう約束して、守れたでしょうか。守れたこともあるし、守れなかったこともある。そうですね。わたしは、子どもたちといついつ一緒に遊べるよ、そう約束していて、忘れてしまうことがありました。本当にごめんなさい。

約束は、きちんと守らなくてはいけません。けれども、わたしたちは、守れないことがある。約束していたことを忘れてしまうことがあります。人間は、約束をきちんと守ることができず、人を傷つけたり、悲しませたりしてしまいます。けれども、神さまは、約束を忘れることはありません。約束をいつもおぼえていて、必ずそのとおりにしてくださるお方です。

神さまの不思議な導きによって自ら引き上げられたモーセは、おそらく三年ほどお父さんお母さんのもとで養われ、その後、エジプトの王女に引き取られて、エジプト人として育てられました。モーセは成長して、おとなになり、やがてエジ

トからも離れて生活することになりました。このとき、ミディアンという地方に住んで、羊の群れを飼い、羊を育てる仕事をしていました。

ある日のこと、モーセが羊の群れを連れて荒れ野に出かけていたとき、とても驚くことが起こりました。荒れ野の中の所々に柴の木が生えていました。その柴の木の一つが突然燃え上がりました。炎が上がったのです。空気が乾燥しているから、自然に火が起こったのか、モーセさんはそう思ったかもしれませんが。ところが、その柴は、燃えているのに、燃え尽きません。赤く燃えているのに、柴の木そのものはぜんぜん燃えていません。いったいどういうことだろうか。そう思ったモーセは、柴の木に近づきました。

すると、その柴の木のほうから声がしました。「モーセよ、モーセよ」。モーセはとっさに答えました。「はい」。声が続きました。「ここに近づいてはならない。足から履き物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」。さらに声が続きます。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」。モーセは気がつきました。ああ、神さまが声をかけてくださったのだ。柴が燃えていたのは、神さまの御使いがそこにおられたからだ。モー

セは、神さまを畏れて、あわてて顔を覆い、ひれ伏しました。

神さまはおっしゃいました。「わたしは、あなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。わたしは、エジプトにいるイスラエルの人びとが苦しんで生活しているのを知っている。わたしは、あなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブに、カナンの地を与えると約束したことをおぼえている。今、わたしは、エジプト人の手からあなたたちを救い出し、その約束の地、すばらしい土地に導き出す。イスラエルの人びとが苦しんでいる声が聞こえる。今、行きなさい。わたしは、あなたをエジプトの王さまのところに遣わす。わたしの民イスラエルの人びとをエジプトから連れ出さない」。

驚きましたか。柴の木が燃えだして、けれども、燃え尽きない。それはもちろん驚きです。けれども、もっと驚くべきことがあります。神さまが、300年以上、いや400年位も昔かもしれません、それほど昔の約束を忘れることがなかったことです。神さまは、モーセの先祖であるアブラハム、イサク、ヤコブへの約束を忘れることなく、今このとき、それを実行しようとしておられるのです。神さまは、そのように、変わらないお方です。アブラハムを愛して、イサクを愛して、ヨセフを愛して、今もモーセを愛して、イスラエルの人びとを愛しておられます。その愛が変わらないから、モーセに語りかけて、これからイスラエルの人びとを導き出すとおっしゃっておられます。

このイスラエルの人びとは、主イエスさまに結ばれて教会の枝とされているわたしたちのこともあります。主なる神さまは、わたしたちのことも愛して、わたしたちをも救い出してください、力強く生きて働いてくださるお方です。神さまは、わたしたちを愛して救い出すと約束されました。そのことを必ず成し遂げてくださるお方なのです。こういう神さまがおられて、神さまを信じるができることは、何と幸いなことでしょうか。

そして、変わらない、真実な神さまを信じて、わたしたちも神さまに答えて、真実に生きることができるよう、まっすぐに生きることができるよう、造り変えられるのです。

神さまが突然現れて、「あなたをエジプトに遣わす」と言われて、モーセは戸惑いました。うろたえました。いったいどういうことでしょうか。自分に何ができるでしょうか。とくに、実は、モーセはエジプトの王さまから逃げていたのです。王女の子どもとして育てられたのですが、王さまのところから逃げ出して、ミディアンに来ていた。ですから、エジプトに戻るなどとてもない。そして、エジプトの王女の家でぬくぬくと育った自分を、イスラエルの人びとがどうして指導者として受け入れてくれるだろうか。モーセは、いくつもの理由をあげて、神さまに反対しました。

神さまは、そんなふうにして逃げ出してきて、モーセの心が傷ついていることをご存じでした。そのため、生きて働いておられる神、力強いお方である神ご自身がいつも一緒にいてくださると約束されました。「わたしは必ずあなたと共にいる」。そうおっしゃって、モーセをカづけられました。

神さまは、ご自身の御言葉を与えて、わたしたちをカづけてくださいます。確かに一緒にいて、力を与えてくださいます。モーセは、確かに神さまと一緒におられ、神さまから力を与えられました。神さまは、モーセを助ける人として、兄であるアロンも備えておられました。そのような助けと励ましがあがり、イスラエルの人たちは、神さまがモーセに告げられた御言葉を聞いて、神さまの約束を思い出し、信じることへと導かれました。イスラエルの人びとは、モーセを指導者として受け入れ、出エジプトへと備えたのです。

神さまは変わらないお方であり、生きて働いておられます。わたしたちを愛して、わたしたちを救い出す、その約束に忠実です。その神さまに信頼して、わたしたちも、神さまに真実に答えて生きていきましょう。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句]

マラキ書 3章6節前半

まことに、主であるわたしは変わることはない。

---

## 〈ねらい〉

必要なものはすべて神さまが用意してくださるから、大胆に神さまのことをお話できるように。

## 〈暗唱聖句〉

「わたし必ずあなたと共にいる」。

## 〈展開例〉

①長い間、イスラエル人たちは奴隷となって苦しんでいました。神さまはその叫びを聞き、御心に留められていました。そして大きくなったモーセさんにいよいよ声をかけられます。

②ある日、モーセが荒れ野の奥へ羊を追って入っていくと、柴が燃えているのに気がつきました。「あれ、火は燃えているのに、柴は燃え尽きない。不思議だな」。

③すると、「モーセよ、モーセよ」と天から声が聞こえました。彼が「はい」と答えると、「私はあなたの父の神である。私はエジプトで苦しむイスラエル人を見、叫びを聞いた。そこで、わたしはあなた王のもとに遣わして、イスラエルの人をエジプトから連れ出す」。

④モーセはビックリしました。そしてすぐに言いました。「私にはそんな力はありません。私には無理です」。しかし神さまは言われます。「わたしは必ずあなたと共にいる」。

⑤でもモーセは自信がなくて言いました。「神さまはどなただと聞かれたら答えられません」。しかし神さまは言われます。「わたしはあると

いうものだ。そう答えなさい」。

⑥でもモーセは心配して言いました。「私が神さまと一緒にいることは誰にも見えません」。しかし神さまは言われます。「杖を蛇にかえてあらわしなさい」。

⑦それでもモーセは恐れて言いました。「わたしは口下手でうまく話しができません。誰か他の人にしてください」。

⑧さすがに神さまは怒って言われます。「アロンと一緒に連れて行きなさい。もう言い訳はよい。必要なものはすべてわたしが用意する。だからあなたは杖を持って、アロンと一緒に王の前に行きなさい」。

⑨モーセさんは行くことをとても怖がっていましたが、それが神さまの御心であることがはっきり分かりました。そしてアロンと杖を持って出かけていきました。もう言い訳ばかりのモーセではありません。神さまから送られた者として、堂々と王さまの前に立ち、神さまの言葉を語りました。

## 〈お祈り〉

いつも必ずわたしたちと共にいてくださる神さま。あなたは、神さまのお働きができるように、すべて準備してくださっていることをモーセさんを通して知りました。だからわたしたちも神さまのお働きができるように力を与えて、周りのお友達にも神さまのことをお話しできるようにしてください。アーメン。



**〈ねらい〉**

神様はいつも変わらないお方であり、お約束を守られる方であることを知る。

**〈はじめに〉**

今日も変わらず、日曜学校に神様が一人ひとりの子どもを招いてくださいました。招きに応じてくることができた一人ひとりの子どもを温かく迎えましょう。このクラスの部屋に入って来る子どもたちの表情はいかがでしょう。子どもたちの生活の様子は見えますか。子どもたちの祈りの課題はないでしょうか。子どもたちの祈りの交わりも大切にしたいものです。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①モーセは、神の山に行きました。この山は何と言いますか。
- ②ホレブの山に来た時、モーセは何を見ましたか。
- ③柴の間から、「モーセよ、モーセよ」という声を聞きました。だれの声ですか。

**〈展開例〉**

王女に助けられ育ったモーセは、大きくなって、将来の王様になるためのお勉強を一生懸命しました。そして多くの人から尊敬される大人として成長しました。でも、モーセは自分と同じイスラエル人が、奴隷として毎日毎日、しんどい苦しい仕事をしている様子を見ていましたから、心がいつも悲しかったのです。モーセは、このエジプトからイスラエル人を助ける大きな仕事が与えられて

いることを知っていました。

ある日、モーセはいじめられているイスラエル人を見て、そのいじめたエジプト人を殺してしまいました。それを知った王様はカンカンに怒ったので、モーセはミディアンという所に逃げて行きました。その時モーセは40歳でした。モーセは羊のお世話をするお仕事をしておりました。今までとは全く違うお仕事ですね。

ある日、モーセは、ホレブという山に来ました。そこに不思議な火が燃えているのに、葉っぱや枝はなくなりません。そして火の中から、神様の声がして「モーセよ、モーセよ、ここに近づいてはいけません。履物を脱ぎなさい。ここは聖なる土地です」と言われました。また「私は、エジプトにいるイスラエル人が苦しんでいるのをよく知っています。私はあの人たちを救い出します。今、行きなさい！王様の所に行って、イスラエル人を連れ出すと言いなさい」と言われました。

モーセはびっくりしました。「どうしてそんなことが私にできるのでしょうか」と言いましたが、神様は「私は必ず、あなたと共にいます。必ずイスラエル人をエジプトから救い出します」と言われました。モーセは本当に神様から大きな力が与えられました。

モーセと共に居てくださった神様は、今日も明日も私たちと共にいてくださるのです。

**〈お祈り〉**

神様、どんな時も私たちと一緒にいてくださりありがとうございます。変わらない愛をもって私たちを愛してくださり、ありがとうございます。

光の子



**〈ねらい〉**

「単元のねらい」に従って、「聖書の神は契約の神であり、真実で変わらないお方、生きて働かれるお方である」ことを確認したい。

**〈展開例〉**

「あなたこそ、主なる神。アブラムを選んでカルデアのウルから導き出し／名をアブラハムとされた。あなたに対して忠実なその心を認め／彼と契約を結び／子孫に土地を与えると約束された。カナン人、ヘト人、アモリ人／ペリジ人、エブス人、ギルガシ人の土地を。あなたは約束を果たされた。まことにあなたは正しい方。

わたしたちの先祖がエジプトで苦しんでいるのを見／葦の海で叫び声をあげるのを聞き ファラオとその家来／その国民すべてに対して／あなたは数々の不思議と奇跡を行われた。彼らがわたしたちの先祖に対して／傲慢にふるまったことを／まことにあなたは知っておられた。こうしてかちえられたあなたの名声は／今日も衰えることを知らない」（ネヘミヤ記9:7～10）。

イスラエルの人々の苦しみをほうっておくことができずに、モーセを通して救い出そうと、神様が宣言なさったと教えられました。そしてそれは、ご自分がかつて約束なさったことを、決して忘れることなく実行なさろうとしてください、神様の変わることない真実を教えてくださいのだと確認しました。

聖書の神様はこのように、私たちのために約束を守り続けてくださる方です。聖書には、そんな神様が何度も繰り返してくださった約束の言葉が記録されています。

「それにもかかわらず、彼らが敵の国にいる間も、わたしは彼らを捨てず、退けず、彼らを滅ぼし尽くさず、彼らと結んだわたしの契約を破らな

い。わたしは彼らの神、主だからである。

わたしは彼らの先祖と結んだ契約を、彼らのために思い起こす。彼らはわたしがその神となるために、かつて国々の目の前でエジプトの国から導き出した者である。わたしは主である」（レビ記26:44～45）。

「わたしの僕イスラエルよ。わたしの選んだヤコブよ。わたしの愛する友アブラハムの末よ。わたしはあなたを固くとらえ／地の果て、その隅々から呼び出して言った。あなたはわたしの僕／わたしはあなたを選び、決して見捨てない。

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える」（イザヤ書41:8～10）。

約束を果たされる神様は、約束通りにイエス様を与えてくださいました。そしてイエス様は私たちに、罪の赦しと永遠の命を、必ず約束通りに与えてくださいます。

「神は約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださったのです。……わたしたちも、先祖に与えられた約束について、あなたがたに福音を告げ知らせています。つまり、神はイエスを復活させて、わたしたち子孫のためにその約束を果たしてくださったのです。」（使徒言行録13:23, 32～33）

**〈祈り〉**

神様、約束を守り続けてくださるあなたの真実に感謝します。モーセやイスラエルの民と共にいてくださったように、私たちとどこまでも共にいてくださると約束してくださったあなたを信じます。強く雄々しく歩むことができますように、守り導いてください。



## 〈ねらい〉

神様の約束の確かさと、それを確信させる神様の存在と御言葉の力を覚える。

## 〈展開例〉

①今日はモーセが、イスラエルの人たちに神様の思いを伝える使命に召し出された話。モーセは王宮で成長した。しかし、エジプト人に虐げられるイスラエル人を助ける際にエジプト人を殺してしまう。モーセは事件が露呈するのを恐れ、エジプトからミディアンという土地に逃れ、そこで暮らしていた。そんな折、モーセは山で神様と出会う。そこで、モーセに使命が与えられる。使命とは、エジプトに戻りイスラエル人に、神様は昔の約束を覚えてイスラエルを助けるということ伝えること。また彼らをエジプトから約束していたカナンへ導くというものであった。

②これを聞いてモーセはうろたえる。エジプト人への恐怖。自分の能力の限界。イスラエルの人たちへの不信感。神様は色々な言い訳を理由にして使命を断ろうとするモーセに、それらを解決する答えをくださる。それでも不安がるモーセに、神様は私が一緒にいるから大丈夫だ、と力強い励ましを与えてくださった。

Q. 皆はどうか？ 神様から自分の生きる道を示されたとき、うろたえることはないか？ 神様を中心にした生活をつくり上げよ、という使命。すべての人に神様と生きる幸いな生き方を広めよ、というイエス様からの使命。君たちもまた神様からの使命をいただく者たちである。だが、神様の命令を聞くとき色々な言い訳を探して、「そんな力は無い」「そんなことをすれば周りからひどい目にあう」「そんな生き方をしても誰も理解しないに違いない」、こんな風に使命を

放棄する心の弱さがないだろうか？

③しかし、神様は言われる、「わたしは必ずあなたと共にいる」。モーセは神様との出会いをとおして、本当に神様はおられるということを知った。そして、その神様が使命のために必要なすべてのことを解決してくださるということを示された。モーセという人は本当に心配症である。神さまの励ましがあり、それでもなお彼はうろたえる。だが、神様はとりあえずげ、と言われる。心配事は言い出せばキリがないが、神様はモーセと一緒に言って、その都度、なすべきことを教えてくださると言われた。そして、確かに彼は神様と共にエジプトのイスラエルの人々の前に出ていき、神様の約束の確かさを彼らに信じさせるに至った。

④モーセの何が、神様の約束の確かさをイスラエルに信じさせたのだろうか？ それは、一緒にいてくださる神様のリアリティー。そして、リアルに神様と一緒にいる、モーセの口をとおして語られる神様の言葉の力だった。自分が信じるにしろ、誰かに信じてもらうにしろ、神様の命令や約束がホンモノだということが確かにされるとき、必要なのは能力でも環境でもない。神様が共にいること。神様の声に聞くこと。このことだけが、無茶に思える神様の使命を実現可能にする。この二つを体の隅々にかよわせるために毎週の礼拝を神様は用意くださっている。神様を中心として生きるために、神様がそのリアリティーと確かな言葉を君たちに届けてくれるよう、神様に願いたい。

## 〈祈り〉

モーセと共におられた神様。あなたの使命に生きられるように、私にも同じように共にあって、あなたの声を聞かせてください。アーメン。

神はイスラエル救出のためモーセとアロンを派遣され、この二人の働きによって神の御業が世に媒介される。出エジプトの出来事では、イスラエルの解放という事態を通して救いの神が啓示されるが、その一方で神の裁きに立ち向かう人間の滅び行く様をも描き出す。全体として、救いの神と救われるべき罪人の姿が告げられることによって、人類全体へ救いが呼びかけられている。

イスラエルの解放は単にエジプトから砂漠へと放り出されることではない。聖書はそれを「自由である」とは言わない。神の代理人としてモーセがファラオに要求するのは、「わたしの民を去らせ、荒野野でわたしに仕えさせよ」というものである(7:16)。イスラエルの自由は、神に仕える、すなわち礼拝することの中に保証される。奴隷から自由民へという社会的立場の変化には、罪の束縛から神の自由への解放という福音が込められている。その意味で、出エジプトの出来事はイエス・キリストの十字架による罪の贖いを予め示す。

十の災いによってふるわれるエジプトは、創造者である神が救済者として働かれることによって、実際に不信仰が打ち壊されて行く過程をも示す。モーセとアロンの一見絶望的な闘いは、神がご自身の闘いとしてこれを行われることで、確実に救いへと導かれる。それはエジプトの神とイスラエルの神との闘いとして描かれており、エジプトの偶像に対して創造者である真の神が裁きの力を発揮され、ご自身の唯一であることを証しされる。

アロンの杖が蛇に変わって見せることで神の奇跡的な力が示されるが、これはエジプトの魔術師たちも同様に行うことができ、実害のない不思議というものが信仰の問題にとっては効果を生まないことの事例となっている。アロンの杖が魔術師たちの杖を飲み込んだことはその後の行く末を暗示する。

第一の災害は、ナイル川だけが血に変わったの

かエジプト中のあらゆる水が血に変わったのが本文が錯綜するが、エジプト全体が受ける被害は甚大なものと予想される。一つにはエジプト全土を襲う濁水であり、もう一つはエジプトを支える漁業の受ける打撃である。さらには酷い臭いが立ちこめるという不快な状況も加わる。これに対し、ファラオはモーセを無視したばかりではなく、民衆の苦しみにも目を留めていない。

ナイル川の水が血に変わるという災害には、続く蛙の災いと併せて幾つかの象徴的な意味がある。これらの災いはファラオがイスラエルに行った「嬰兒殺し」に対する報復を意味する。「生まれた男の子は一人残らずナイル川に放り込め」(1:22)と命じたファラオに対して、殺された子供たちの血がナイル川から訴える。蛙はエジプトの豊饒を支える女神であり、安産の神であった。ナイル川と蛙というエジプトの神々は、こうして今やエジプトに災いをもたらすものとなった。これらの災いはエジプトの自然崇拝を逆手にとり、イスラエルの神がそれらの創造者であることを知らせるものである。

神はエジプトを滅びに定められたとは記されていない。エジプトは、自分の国のただ中で悲惨な状態に置かれているイスラエルに目を留めるよう求められている。彼らを奴隷の状態に留めておくのは不当である、と訴えられている。そして物言わぬ偶像にではなく、イスラエルを真の信仰の内に解放しようとされている神の御業に目を留めることが求められる。その神の真実を悟るのならば、彼らも間違いなく、神の憐れみを受けることになる。ヨセフの時代がその前例となる。そこには危機の中にあっても平安でいられた、神の知恵が支配する時代があった。エジプトにもまた立ち返る場所が用意されている。人間の頑なさは人間の説得力ではなく、歴史を導く神の御業が打ち壊す。神は世を滅ぼすお方ではなく、滅び行く世界を救おうとされるお方である。(牧野信成)



テキスト 出エジプト記 7章8～24節  
参照カテキズム 子どもカテキズム 問14

### 〔単元のねらい〕

テキストは7章前半であるが、単元の主題に基づいて、12章までを取り扱う。『子どもカテキズム』問14に「神さまより大きく強いものはないからです」とある。主なる神は、ファラオの高ぶりを裁くことをとおして、イスラエルの民を神信頼へと招かれた。わたしたちも主なる神に期待することができる。主イエス・キリストを贖いの小羊として与えてくださった神こそ、わたしたちの力である。

## 「神さまに希望がある」

エジプトで、イスラエルの人たちは苦しんでいました。奴隷にされて、朝から晩まで土をこねて、レンガを作らなければなりません。逃げ出した人もいました。けれども、エジプトの兵士たちが見張っていました。逃げ出した人は捕まえられて、もっと苦しい目にあわされました。

そんなイスラエルの人たちのところに、モーセが現れました。モーセは言いました。「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、イスラエルの民の神さまが現れて、『イスラエルの人びとをエジプトから導き出す』と告げられた」。モーセの兄であるアロンも一緒になって、神さまが現れてくださったと語りました。イスラエルの人たちは、神さまと一緒にいてくださるならば、エジプトから出て行くことができるかもしれない、苦しみから逃れることができるかもしれない、そう思い、神さまを信じて、神さまに期待しました。

けれども、その期待は裏切られました。モーセとアロンがエジプトの王さま、ファラオのところに行って、言いました。「イスラエルの神、主がこう言われました。『わたしの民を去らせて、荒れ野でわたしのために祭りを行わせなさい』(5:1)。ところが、ファラオは、モーセとアロンの言うことを聞かず、イスラエルの神さまのことを認めませんでした。ファラオはとても傲慢だったのです。イスラエルの神を認めませんでした。また、イスラエルの人たちはよく働いたので、エジプトにとって、イスラエルの人たちが出て行く

などどんでもないことだったのです。ファラオは、イスラエルの人たちをもっと苦しめることにしました。「レンガを作る材料を集めることから始めなさい。できるレンガの量は変えてはならない」。そう言って仕事を増やしました。イスラエルの人たちは、イスラエルの神さまよりもエジプトのファラオのほうが強いのか。神さまの力はそんなものか。そんなふうに思ったかもしれません。

みんなは神さまが生きて働いておられることを信じていますか。神さまが力強いお方であることを知っていますか。まことの神さまは、神さまを認めなかった傲慢なファラオを裁き、また、イスラエルの人たちに、ご自身が力あるまことの神であることをお示しくださいました。そのために、とても大きなみわざを行ってくださいました。

神さまはモーセを励まして言いました。「今や、あなたは、わたしがファラオにすることを見るであろう。わたしの強い手によって、ファラオはついに彼らを去らせる。わたしの強い手によって、ついに彼らを国から追い出すようになる」(6:1)。神さまは、イスラエルの人びとがお願いしてエジプトから出て行くのではなくて、逆にエジプトのファラオがイスラエルの人たちに出て行ってほしいと願うようになるだろうと約束されました。

神さまから励まされ、力を与えられて、モーセはファラオの前で次々と不思議なことを行いました。まず最初に、アロンが自分の杖をファラオの

前に投げると、杖が蛇になりました。けれども、ファラオはイスラエルの神さまを認めませんでした。そのため、神さまは全部で十の災いを与えられました。一つめの災いは、ナイル川の水が血に変わりました。モーセが杖でナイル川の水を打つと、水が真っ赤な血に変わり、ついには川だけでなく、池や水たまりの水まで血に変わりました。飲み水がなくなるといへんなことになりましたが、けれども、ファラオはイスラエルの人たちがエジプトを出て行くことを認めませんでした。

二つめは、エジプトを蛙が襲う災いでした。神さまはエジプト中に蛙を送り込み、蛙は家の中はもちろん、ファラオのベッドにまで入り込みました。ファラオは言いました。「主に祈願して、蛙がわたしとわたしの民のもとから退くようにしてもらいたい。そうすれば、民を去らせ、主に犠牲をささげよう」。けれども、蛙が死に絶え、災いが過ぎ去ると、ファラオは心を変えて、イスラエルの人たちを去らせませんでした。

第三はぶよが送り込まれました。第四はあぶが送り込まれました。ぶよやあぶは人や家畜を襲って体を刺します。けれども、ファラオはイスラエルの人たちを去らせませんでした。五つめは疫病がはやり、六つめははれ物の災いでした。エジプトの国中の人々が病気に襲われ、けれども、イスラエルの人たちは病気になりませんでした。第七は雹が降るといふ災いです。雹が降って野原にいた家畜や畑の穀物がすべてダメになってしまいました。第八はいなごの大軍が飛んできて、畑に残っていた穀物や緑をすべて食い尽くしていきました。そのたびに、ファラオは、口では「イスラエルの民を去らせよう」と言いますが、災いが過ぎ去ると、「いや、去らせはしない」と言いました。約束を守らず、イスラエルの神さまが生きておられるお方であることを認めません。

ついに神さまは、エジプトの国中を暗くされました。暗闇で覆われたのです。第九の災いです。暗闇とはもはや希望がないということです。エジ

プトには希望が残されていないと示されました。神さまが共におられることに希望があります。

第十の災い、最後の災いがエジプトに行われます。神さまは、イスラエルの人たちに、小羊の血を家の門に塗り、その小羊の肉を焼いて食べるよう命じられました。その塗られた血を御覧になって、過ぎ越されるとおっしゃるのです。その夜、エジプトの国中で悲しくつらいことが起こりました。人であれ家畜であれ、その最初の子が撃たれて、命を失いました。エジプトの国中に泣き叫ぶ声が満ちました。けれども、小羊の血を門に塗ったイスラエルの人たちは守られたのです。

ついにファラオは、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいと、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思い、出て行ってほしいと願うようになりました。神さまがエジプトに対して憤っておられることを認め、モーセを呼び出して言いました。「さあ、わたしの民の中から出て行くがよい。行って、主に仕えるがよい。そして、わたしのために祝福を祈ってほしい」。こうして、ファラオとエジプトの人々は、イスラエルの人たちをせき立てて、エジプトから追い出しました。お願いされて出て行くのですから、家畜などを連れて行くのはもちろん、衣服や金銀の装飾品などもいただいて、イスラエルの人たちは用意を整えて旅立ちました(12:31~36)。

神さまは、神さまを認めず、人々を苦しめる、傲慢な人を裁かれます。また、イスラエルの人たちは、その神さまの力強いみわざを見て、神さまへの信頼を取り戻しました。神さまに期待して歩む民とされて、荒れ野に旅立ちました。神さまは、神さまを信じる民を災いから守り、救い出してくださるお方です。今もイエスさまに結ばれて、神さまを信じて生きる者と共にいてくださるお方です。たとえ災いがあっても、神さまに依り頼む人に神さまの守りが確かです。神さまに期待して、歩みましょう。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 7章5節

わたしがエジプトに対して手を伸ばし、イスラエルの人びとをそのなか導き出すとき、  
エジプト人は、わたしが主であることを知るようになる。

---

## 〈ねらい〉

必要なものはすべて神さまが用意してくださるから、大胆に神さまのことをお話できるようになって欲しい。

## 〈暗唱聖句〉

「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。

## 〈展開例〉

- ①モーセさんは神さまの言われたとおり、王さまの前にたち、勇気を振りしぼって言いました。「イスラエルの神、主がこう言われます。『わたしの民をエジプトから去らせなさい』」。しかし王さまは「わたしは主など知らないし、イスラエルをさらせはしないと、聞こうともしません。モーセさんたちはがっかりして退出しました。
- ②しかし神さまはモーセさん言いました。「わたしの強い手によって、王は必ずイスラエルを去らせることになる」。モーセさんは神さまの言葉を信じました。
- ③神さまは言われました。「王の心はかたくて民を去らせない。アロンに言って、杖でナイル川を打ちなさい。そうすれば水は血に変わる」。アロンは言われたとおりに行いました。川の水はことごとく血に変わり、悪臭を放ち、誰も水を飲めなくなりました。しかし、王はこのことを心に留めませんでした。
- ④次に神さまはモーセに言われました。「国中の水の上に手を伸ばしなさい。そうすればかえるを這い上がらせる」。アロンは言われたとおりに行いました。あらゆる水からかえるが這い上がってきて、国中を覆いました。王さまは困って、モーセに「明日イスラエルの人を去らせる」と約束しました。でも、次の日になると心をかたくしてイスラエル人を去らせませんでした。
- ⑤神さまは言われました。「杖で土の塵を打ち、

ぶよにしなさい。」アロンはそのとおりにしました。しかし王は彼らの言うことを聞きませんでした。

- ⑥神さまは次々に災いを起こされて、王にイスラエル人を去らせるように迫りました。モーセさんとアロンさんは神さまの言うとおりに王に話し、また行いました。しかし王の心はかたくなくて、神さまの言葉を聞き入れませんでした。
- ⑦そして最後の10番目の災いのとき、神さまは言われました。「私はエジプト中の人も家畜もすべて、はじめの子供を打つ。イスラエルの人々は、小羊の血をその家の門の柱とかもいに塗りなさい。そうすればわたしはその家の前を通り過ぎて打つことはない。この災いの後、王はイスラエルをエジプトから去らせる」。モーセは王に伝えましたが、王の心はかたくなくて、イスラエルの人たちを去らせませんでした。
- ⑧その夜、神さまの言われたとおりのことが起きました。国中の初めの子どもが打たれたのです。王さまはやっと神さまの強い手が分かり、エジプトからイスラエル人を去らせることを決心しました。
- ⑨こうして、神さまの強い手によって、イスラエルの人たちは奴隷の苦しみから解放され、モーセに率いられてエジプトから出て行くことになりました。そしてこれからも神さまの手の中で旅を続けていくこととなります。

## 〈お祈り〉

力強い手を持って、イスラエルの人たちを守り救ってくださった神さま。あなたはどんなことをしてでも、助けを求める人たちをお救いになる方です。どうか私たちも、あなたの手の中で守ってください。王さまのように、心をかたくなくにして災いを与えられませんかように。アーメン。



**〈ねらい〉**

生きて働いておられる、神様のお守りの確かさに信頼する。

**〈はじめに〉**

9月も最後の週を迎えました。季節の変わり目は子どもたちにとって、体調を崩しやすかったりします。お休みが続いている子どもはいないでしょうか。どういう風にコンタクトをとるのがその子どもにとって、その家庭にとって相応しいのか、案じることも多々あります。いろいろと教師間で相談しながら、相応しいフォローを祈りながら続けましょう。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①神様は、誰と誰にお話をされましたか。
- ②杖は、何に変わりましたか。
- ③ファラオは、モーセとアロンの言うことをききましたか。

**〈展開例〉**

神様から大きなお仕事を与えられたモーセにはアロンというお兄さんがいました。モーセとアロンで、神様との約束「エジプトからイスラエル人を救い出す」という仕事を始めました。

でも、この国の王様ファラオは、全く言うことを聞きません。そこで、神様はエジプトの国に不思議な「十」の出来事、喜ぶことではなく、災いを次から次に起こしました。

一つ目。アロンがファラオの目の前で、杖を振り上げ、ナイル川の水を打つと、川の水が、全部、血に変わってしまいました。家で使う水も血になってしまいました。国中血のにおいで一杯になりました。でも王様は言うことを聞きません。二つ目。川から蛙があふれてきました。国中蛙で一杯になりました。王様は言うことを聞くから蛙をなくして欲しいとお願いすると、モーセは神様に祈って蛙は全部死んでしまいました。蛙がいなくなるとファラオの心は変わってしまい、約束は守りませんでした。三つ目。土の塵が全部、ぶよに変わ

り、四つ目。あぶで一杯になって国は荒れ果てました。五つ目。動物の病気がはやりました。家畜は全部死んでしまいました。六つ目。エジプト人と家畜は、うみのある腫れものができました。七つ目。雷がなって、大きなひょうが降りました。外にいた人はみんなひょうに当たって死んでしまい、畑のものも全部死んでしまいました。八つ目。いなごの大群がやってきて残っていた作物を全部食べてしまいました。九つ目。エジプト中、三日間真っ暗になりました。こうして、エジプトの国は次から次に恐ろしい災いがくだりましたが、残念なことに王様は全然、モーセとアロンの言う「イスラエル人をエジプトの国から出してください」ということを聞き入れませんでした。

そして、どうとう、十番目の災いが起こります。それは、一番恐ろしいものでした。「エジプト中の、全ての長男が、みんな死んでしまいます」というものでした。王様の長男も死んでしまうというものです。この災いからイスラエル人の子どもは助かるように、特別なことができました。それは、家の入口の柱に、子羊の血を塗るということでした。その血を塗っている家の子どもは殺されませんでした。神様が言われたとおり、国中の長男が死にました。王様の長男も死にました。これ以上の悲しみはありません。やっとやっと、王様の心は変わり、イスラエル人をエジプトから出て行くことができました。

長い間、本当に長い間待った、神様からのお約束、イスラエル人を救い出すというお約束は、本当になりました。たくさんイスラエル人は苦しい仕事から、苦しい生活から離れることができました。皆どんな気持ちだったでしょう。モーセのあとについて、たくさんの人たちが家族やお引越しの荷物も持って歩き出しました。神様は、その長い列を、昼は雲の柱、夜は火の柱で、みんなを守ってくださいました。

**〈お祈り〉**

神様、神様の言うことを信じ守り続けることができますように。

## 〈ねらい①〉

まことの神のご意志に対してどこまでも反抗する罪人のかたくなさと、それをいつでも凌駕することができる神の力強さを伝える（子どもカテキズム問14「神さまより大きく強いものはないからです」）。同時に、そのような力強い神が、その力を捨てるという十字架の愚かさによって人を救いに招かれるという、愛の圧倒にとともに驚く。

## 〈展開例①〉

今日のお話では、これでもかこれでもかと、神様が驚くべき出来事を起こされました（紙芝居など用いて、子どもたちのイメージをふくらませていただければと願います。）でもファラオはどこまでもかたくなでしたね。「もう参った、やめてくれ」と言いながら、神様が手を緩めると「やっぱり嫌だ、神の言うことなんか聞くものか!!」って、駄々っ子みたいに繰り返しました。バカだなあって思うけど、でもこれが人間なんだと聖書は教えてくれています。私たちも、いつも同じことをしているのです。

神様は、そんなファラオのことを、手のひらで転がすようにしてあしらわれましたね。ファラオがそうやって「やっぱり嫌だ」って言い出すことも全部分かっておられて、そんな反抗には決して屈しないで、どこまでも力で圧倒されます。ついには、「本当に今度こそ参りました」と言わせて、イスラエルの人たちが出て行くようにとファラオをお願いさせてしまった。

北風と太陽の話は知っていますか。旅人のコートを脱がせようと、北風が必死に吹きつけても、旅人は絶対に脱ごうとしなかった。同じように、ファラオも絶対に神様の言うことを聞こうとしなかった。でも北風にはできなかったことも、神様にはできるのです。どこまでもかたくななファラオのコートを、ついに脱がせてしまう、そういう圧倒的な力を神様は持っておられるのです。すご

いね。

そんな神様の力によれば、今世界中の罪人（私たちを含めて）に何千、何万の災いを与えて、神様の言うことをムリヤリ聞かせることだって、本当はできるのです。でも神様はそうはされなかったことを覚えましょう。神様は、どこまでも反抗する私たちの罪を罰する代わりに、イエス様を身代わりの犠牲としてくださいました。そういう大きな愛が、私たちのかたくなさをすっぱり覆っています。太陽よりも暖かい愛が、私たちに注がれているのです。

## 〈ねらい②〉

このような「奇跡」を信仰の目によっていかにしてとらえるか、共に考える。

## 〈展開例②〉

こういう10の災いの奇跡を読んで、おとぎ話みたいだなと思った人もいると思う。正直でよい。教会には「違うよ、おとぎ話なんかじゃない、本当にあったんだ」と証明したくて、科学的に説明しようとする人もいっぱいいます。最近では、この一連の出来事は、紀元前1500年ごろにあったサントリーニ島の大爆発からすべて説明できるなんて仮説もあるね。（インターネットで「エジプト サントリーニ島」と検索すると色々出てきます）。

でも、本当に大事なものは、それは全部「神様が神の民のために起こしてくださった救い」だと信じていることです。神様は、科学で説明できるようなことも、説明できない超自然的なことも全部用いて、私たちのために「救い」を与えてくださいます。そのためなら、神様はどんなことでもしてくださいます。そして、そういう神様の力が働いている出来事は、どんなありふれたことであっても「奇跡」なのです。



## 〈ねらい〉

力強い業で私たちに信頼を起こし、この信頼に応えて災いから守ってくださる神様を覚える。

## 〈展開例〉

①今日は、神様が不思議な10の災いを起こされて、エジプトの王ファラオにイスラエルの解放を認めさせたお話。先週、モーセがイスラエルの人たちに神様の約束への信頼を呼び起こした話を聞いた。そしてモーセは、エジプトで奴隷であったイスラエルを解放へ導くため、王のもとへ行く。しかし、王はそれを頑なに拒否する。王は、神様の使いであるモーセとやりあおうとする。つまり、王は神様と勝負しようとした。当時の世界の頂点に君臨する神様を認めない国エジプトの代表として、王は神様に歯向かう。神様は自分を神とやりあえると勘違いするこのファラオに、本当の世界の支配者の力をまざまざと知らされる。このため、エジプトには国中を混乱させる災いが10度におよび引き起こされる。そしてついにファラオは神様の力に屈服して、イスラエルの解放を口にした。

②神様はエジプトに災害を引き起こされたがイスラエルの人々は守られた。神様はモーセの言葉信じ、神様に信頼した者たちを確かに守られ、その約束を果たされたのである。イスラエル人はエジプトに引き起こされる神様の力の大きさを見るたびに神様を畏れたことだろう。また、そこから守られるたびに神様への信頼を強められたことだろう。

③私たちは違う時代を生活しているが、今日の話は人ごとではない。私たちの日常にも神様と、神様と敵対する者との戦いは身近なことである。ひとつは、君が神様に従うために、その邪魔を

する具体的な障害があるかもしれない。人間関係、社会の仕組み、世の中の考え方。神様と敵対者の戦いは君の周りに確かにあるだろう。また、君の内側、神様に逆らうファラオと神様に従おうとする戦いは君の心の中でも度々引き起こされるのではないだろうか？

④皆はこうした戦いの中で、ときに敵対者の力に怯むかもしれない。今日の話の中で勝利のカギは神様に信頼を置くということであった。しかし、この信頼はどうやったら得られるのだろうか？ 私たちは口先だけの人間を信じることは難しい。反対に言葉数が少なくても、言ったことをやり遂げる人の言葉には、私たちを信じさせる力がある。皆が神様を信じられるかどうか、それは相手が信じるに足るか？ということにすべてがかかっている。

⑤今日の話は、神様は御自分が神であるということをしかりと現わして下さる方であることを伝えている。神様は自分の力も隠したままではおられない。神様は、本当に御自分が神であるということを私たちに示し、私たちの信頼を勝ち取って下さるのである。そして、そんな神様を信頼する者を神様は裏切られずに守って下さる。神様は御自分が大切にしている人を助けられるし、神様は御自分のことを大切にする人を助けたいと思われる。君は、神様がその独り子を与えるほどに神様にとって大切な人である。だから、君もまたいつも神様を大切にする人として歩んでほしい。そんな君を神様はさらに大切に保護して守って下さるからだ。

## 〈祈り〉

愛する者に信頼を呼び起こし、さらに愛して下さるあなたに感謝します。アーメン。



## 2010年10～12月カリキュラム（第39号）

—救済史に基づく二年サイクルカリキュラムの一年目—

月 日 教会暦・行事	主 題	聖 書 箇 所	暗 唱 聖 句
	単 元 の 目 標		
10月3日	葦の海を渡る	出エジプト14章	出エジプト14:14
	神ご自身がたたかって、勝利された。神の大きなみわざをほめたたえよう		
10月10日	天からのパン	出エジプト16章	申命記8:3（一部）
	神がご自身の民を養われる。神に養われる幸い、また七日目の祝福を知ろう		
10月17日	十戒を授かる	出エジプト 19:1－20:21	詩編119:105
	神は愛と恵みの言葉として十戒を与えられた。律法を持つ幸いを味わおう		
10月24日	金の子牛の事件	出エジプト32章	出エジプト20:3, 4（前半）
	神は偶像礼拝をしりぞけられる。神に喜ばれる礼拝をささげよう		
10月31日 宗教改革記念	幕屋の建設	出エジプト40章	出エジプト40:16
	神礼拝を中心として共同体が形成される。栄光に満たされる礼拝をささげよう		
11月7日	荒れ野の放浪	民数記13－14章	民数記14:9（後半）
	人を恐れてしり込みする者を主はさばかれる。主なる神をこそ恐れよう		
11月14日	ヨルダン川を渡る	ヨシュア3章	ヘブライ11:1
	主が共にいてくださることがわたしたちの勇気である。試練と向かい合おう		
11月21日	約束の地カナンへ	ヨシュア6章	エフェソ6:10（後半）
	主が先立ち、たたかってください。勇気をもって立ち向かおう		
11月28日 アドベント	待降節・アブラハムの子	創世記15:1－6	ガラテヤ3:7
	アブラハムへの約束はキリストによって私たちにも及ぶ。その幸いを知ろう		
12月5日 アドベント	待降節・ダビデの子	イザヤ11:1－10	イザヤ11:1, 2（前半）
	主を恐れ敬う霊に満たされて生きる幻。真実の王を待ち望もう		
12月12日 アドベント	待降節・捕囚からの解放	イザヤ40:1－11	イザヤ40:1
	神ご自身が民を慰めてくださる。御子イエス・キリストの到来に備えよう		
12月19日 降誕祭	降誕祭・主イエスの降誕	ルカ2:8－21	ルカ2:10（後半）
	羊飼いに告げられた救い。キリストにおいて成就した神との平和を喜ぼう		
12月26日 年末	神殿で献げられる	ルカ2:22－35	ルカ2:30－32
	律法の成就として献げられたキリスト。このお方を見て安息をいただこう		

## 2010年度 年間カリキュラム

(2010年4月～2011年3月)

二年サイクル聖書物語の第一年

	月 日	教会暦・行事	主 題
2010年 第37号	4月4日	進級式・復活祭	復活のキリスト
	4月11日		創造主なる神
	4月18日		被造物の祝福、環境（土地・生物）
	4月25日		神の栄光の舞台、歴史の主
	5月2日		人間の創造、人生の目的と文化命令
	5月9日	母の日	人間の創造、男と女の創造
	5月16日		罪と墮落
	5月23日	聖霊降臨祭	聖霊降臨と教会
	5月30日		救いの約束（原福音）
	6月6日		カインとアベル
	6月13日	花の日	ノアの箱舟
	6月20日	父の日	ノアの契約
	6月27日		バベルの塔
第38号	7月4日		アブラハムの召命
	7月11日		アブラハムへの約束
	7月18日		ソドムの滅亡
	7月25日		イサクの誕生
	8月1日		イサクを献げる
	8月8日		ヤコブとエサウ
	8月15日	(平和)	平和の主
	8月22日		売られたヨセフ
	8月29日		総理大臣になったヨセフ
	9月5日		摂理の主の勝利
	9月12日		モーセの誕生
	9月19日	(20敬老の日)	モーセの召命
	9月26日		十の災いと過ぎ越し



年・号	月 日	教会暦・行事	主 題
第39号	10月3日		葦の海を渡る
	10月10日		天からのパン
	10月17日		十戒を授かる
	10月24日		金の子牛の事件
	10月31日	宗教改革記念日	幕屋の建設
	11月7日		荒れ野の放浪
	11月14日		ヨルダン川を渡る
	11月21日		約束の地カナンへ
	11月28日	アドベント	待降・アブラハムの子
	12月5日	アドベント	待降・ダビデの子
	12月12日	アドベント	待降・捕囚からの解放
	12月19日	クリスマス	降誕・主イエスの降誕
	12月26日	年末	神殿で献げられる
2011年 第40号	1月2日	新年	ヨハネと主イエスの受洗
	1月9日		荒れ野の主イエス
	1月16日		漁師を弟子にする
	1月23日		神の国の幸いの説教
	1月30日		律法の完成者キリスト
	2月6日	(11信教の自由)	地の塩・世の光
	2月13日		完全な人イエス
	2月20日		天に富を積む
	2月27日		神の国と神の義
	3月6日	(9- レント)	神の国の律法
	3月13日	レント	権威ある者の教え
	3月20日	レント	病人をいやすメシア
	3月27日	レント	嵐をしずめるメシア

## 『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満9年となり、第38号まで発行して参りました。中部中会では8割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ70教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額 30万円／年

送金先 郵便振替 伊藤治郎

00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

## 教案誌会計報告

中部中会日曜学校委員会発行『教会学校教案誌』は、日本キリスト改革派教会中部中会の事業として、中部中会に会計報告をし、会計監査を受けています。けれども、収入の多くが教案誌の売り上げと自由募金であり、教案誌上において会計報告をすることが必要であると判断し、2006年度分より報告しております。2009年度の教案誌会計は以下の通りです。

中部中会日曜学校委員会

### 教案誌会計（2009年3月3日～2010年2月28日）

収 入		支 出	
中会財務より	100,000	出版費	1,386,000
教案誌売り上げ（※1）	1,270,780	送料	98,825
パンフレット売り上げ	43,890	謝礼	94,000
自由募金（※2）	318,890	事務費	5,660
		会議費	26,000
		交通費	32,615
		消耗品費	5,164
		雑費	1,560
小計	1,733,510	小計	1,649,824
繰越金	635,709	繰越金	719,395
合計	2,369,219	合計	2,369,219

※1 教案誌購読者数 74教会・個人、合計327部

※2 教案誌自由募金 37教会伝道所・3個人

尊い献金をどうもありがとうございました。

教会団体分内訳

#### 【改革派教会】

高松東教会、灘教会（5口）、犬山教会、宝塚教会（2口）、高蔵寺教会、四日市教会、桑名伝道所、松戸小金原教会、羽生栄光教会、銚子栄光伝道所、神港教会、滋賀摂理伝道所、静岡教会、網島教会、湖北台教会、高松教会、那加教会、青葉台キリスト教会、千里摂理教会（2口）、大屋伝道所、横浜教会、津島教会、名古屋教会（2口）、多治見教会、吉原富士見伝道所、関キリスト教会、新浦安教会、山田教会、厚木教会、稲毛海岸教会、江古田教会、東広島伝道所、所沢ニューライフ教会、奈良伝道所、名古屋岩の上伝道所、丸亀伝道所、男山教会

#### 【その他の教会】

なし

## 〈執筆者よりひとこと〉

- 幼稚科の子どもたちが喜んで御言葉を口ずさんでいる姿を目に浮かべて取り組みました。(草野誠)
- 送られてくる子ども一人ひとりを大切に愛せますように。(芦田順子)
- 限られた時間と賜物で試行錯誤を繰り返しています。ご容赦ください。(坂井孝宏)
- 今号も、足りないところを多くの人に支えられました。感謝です。(山中恵一)
- 説教展開例をささげる奉仕は、伝道メッセージを編み出すまたとない機会となっています。これからも細く長く、皆様とご一緒に歩みたいと願っております。(二宮 創)
- 荒ただしい日々の生活の中で、皆さんが教会学校のために多くの犠牲を払って奉仕してくださっていることに感謝しています。教案誌が皆様の役に立つこと、また神さまに用いられることを願っています。(望月 信)。

## 〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』(300円)をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第32号までは一部500円で販売しています(品切れの号もあり)。
- 申し込みの受け付けと送付は大垣伝道所の辻幸宏教師が担当しています。お求めは下記までご連絡ください。副読本『主は羊飼ひ』のお買い求めも下記までお願いします。

大垣伝道所 辻幸宏まで

〒503-0996 大垣市島町283

Tel/Fax. 0584-91-3538

## 〈あとがき〉

- 夏のキャンプや夏期学校の季節になりました。聖書の信仰に生きるとは、共同的な信仰を生きることであって、幼い頃から信仰の仲間との交わりの中に置かれることが大切です。その意味では、日頃、それぞれの教会で同世代の友だちが少ないならば、まさに中会や大会の夏のキャンプや夏期学校は貴重な機会となります。同世代の信仰の仲間と出会える大切な機会を逃すことがないように、それぞれの教会の夏期学校はもちろん、中会や大会のキャンプ、夏期学校などに、ぜひ子どもたちを送り出してください。
- 中部中会では、小学校高学年から中学生、高校生、学生、青年と、キャンプ・修養会が行われます。キャンプ・修養会の夏です。中会・大会の集会の情報収集に努めて、参加をうながしましょう。
- 特集「信仰の継承」を掲載しました。今回は、子どもの目線からということを計画しています。信仰は、親とされている者が子どもに与えることのできる最大で最高の遺産です。大切な信仰のボタンを受け継いでいくことを祈り求めて参りましょう。
- 「聖書は歴史をどう語るか」の寄稿も数回かけて掲載します。聖書的歴史観を身に着けることは、信仰を骨太なものにします。神の摂理に信頼する信仰を養いましょう。
- 今号も「教会学校教案誌」をお届けできますことを、神様と読者の皆様に心から感謝申し上げます。届けられた封を破り、最新号を手にしてくださるその時、そこに至るまでの数々の奉仕者の労苦に思いをはせてくださるならば幸いです。まず、執筆者の犠牲的な奉仕なしに弊誌はあり得ません。とりわけ分級展開例は、読者であり、現場の奉仕者である教会学校教師による執筆であることが、弊誌の特徴の一つです。どうぞ、編集部までお声を掛けてください。また、こちらから声を掛けさせていただいたときは、どうぞ、祈りの内にお引き受けください……！
- 様々なご意見、情報をお気軽に編集部までお寄せください。弊誌は、皆さまのものです。皆さまに奉仕することこそ、その使命、目標です。今後とも宜しくお願い致します。
- Soli Deo Gloria!

---

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき

吉田 隆 (仙台教会牧師)

巻頭説教

金 起 泰 (浜松伝道所代理宣教教師)

特別寄稿

牧野信成 (神戸改革派神学校教授)

特集「信仰の継承」

梶浦和由 (津島教会長老)

草野勝男 (那加教会会員、引退長老)

町野正三 (恵那教会長老)

聖書研究

中根汎信 (那加教会牧師)

久保田証一 (盛岡伝道所宣教教師)

潮田 祐 (花見川キリスト教会牧師)

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

後藤公子 (元インドネシア派遣女性宣教教師)

牧野信成 (神戸改革派神学校教授)

説教展開例

木下裕也 (名古屋教会牧師)

辻 幸宏 (大垣伝道所協力牧師)

二宮 創 (太田伝道所宣教教師)

相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)

長谷川潤 (四日市教会牧師)

望月 信 (高蔵寺教会牧師)

分級展開例

幼稚科

草野 誠 (恵那教会牧師)

小学科下級

芦田順子 (新浦安伝道所日曜学校教師)

小学科上級

坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)

中学科

山中恵一 (板宿教会定住伝道者)

イラスト作画

表紙 田口裕美 (尾張旭教会)

本文 岡野美佳 (青葉台教会)

---

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長) 名古屋岩の上伝道所宣教教師

木下裕也 名古屋教会牧師

辻 幸宏 大垣伝道所協力牧師

長谷川潤 四日市教会牧師

二宮 創 太田伝道所宣教教師

望月 信 高蔵寺教会牧師

---

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2010年7・8・9月号 (季刊)

第38号

2010年5月23日発行

---

発行 日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会  
発行所 日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部  
名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎

〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012

Tel/Fax. 052-895-6701

郵便振替口座 00890-2-148183 「伊藤治郎」

編集・印刷 株式会社あるむ

頒価 900円 (本体価格)

---